

# 『九鬼奔流』 48幕詳説

— 金沢大学名誉教授：阪上 正信 著 —



特定非営利活動法人

ドラマ九鬼奔流で町おこしをする会

## 目次

---

- |                 |                     |
|-----------------|---------------------|
| 第1幕：九鬼源流        | 第26幕：江戸へ諭吉・桜田門外の変   |
| 第2幕：志摩進出        | 第27幕：化学新書とその源流      |
| 第3幕：志摩追放        | 第28幕：精錬方設置          |
| 第4幕：朝熊山根拠・船力充実  | 第29幕：洪庵江戸へ・開成所      |
| 第5幕：織田水軍・志摩平定   | 第30幕：隆義執政           |
| 第6幕：長島・石山本願寺攻め  | 第31幕：維新直前・大政奉還      |
| 第7幕：鳥羽城主・東西のはざま | 第32幕：幸民帰郷・英蘭塾       |
| 第8幕：家督争い・山間移封   | 第33幕：明治初期教育、幸民上京・逝去 |
| 第9幕：学界船出・人材養成   | 第34幕：諭吉・幸民、廃藩置県     |
| 第10幕：英才誕生・勉学精励  | 第35幕：郷騒(百姓一揆)       |
| 第11幕：江戸留学・出発到着  | 第36幕：諭吉来訪とその意見      |
| 第12幕：蘭学塾入門      | 第37幕：キリスト教との出会い     |
| 第13幕：青春・婚儀恋情    | 第38幕：神戸移住・学校発足      |
| 第14幕：塾卒業・帰郷     | 第39幕：摂津三田教会・幼児教育    |
| 第15幕：自立・成婚      | 第40幕：志摩三商会          |
| 第16幕：刃傷事件       | 第41幕：九鬼関係者の活動       |
| 第17幕：浦賀塾居・試練    | 第42幕：北海道開拓(赤心社)     |
| 第18幕：江戸復帰・独立    | 第43幕：開拓の前進・充実       |
| 第19幕：島津斉彬の知遇    | 第44幕：新しい学の海         |
| 第20幕：マッチ試作・著作   | 第45幕：九鬼隆一の生い立ち      |
| 第21幕：写実実験・諭吉適塾  | 第46幕：官か私か           |
| 第22幕：薩摩事情・藩主変遷  | 第47幕：美術と博物館(文化行政の海) |
| 第23幕：黒船来航・ビール試醸 | 第48幕：歴史につながる現代の海    |
| 第24幕：藩書調書・薩摩藩籍  | おわりに                |
| 第25幕：転居・安政の大獄   |                     |

# 第1幕 九鬼源流

## 第1場 初代隆信、九鬼浦へ

1. 新宮市から熊野灘を東に進むと紀伊市木(一木)・木本・鬼ヶ城・二木島・三木里・七鬼の滝・八鬼・九木の地名が続くが、この木は鬼(キ)で、修験道を意味する。平安時代から中世にかけ山岳信仰を奉ずる修験者の修験道場が拡張、熊野権現の勢力がこの辺りまで及び、九鬼(九木)とは9番目の修験道場を意味するとも見られる。
2. この九木の地に、今から約650年前[1346年、南朝正平元年、北朝貞和二年]、伊勢の国の佐倉(現在の四日市市桜付近)に居た南朝に仕える佐倉の中将・藤原隆信(フジワラノタカミツ、先祖は平安時代の朝臣の中納言藤原隆家、979-1046、関白道隆の第四子)が北朝方の仁木義長(ニキヨシナガ、1376、兄の頼章と共に常に足利尊氏に従い功をあげ、三河・伊勢・伊賀などの四国の守護となる)に襲撃され、逃れて移り住み、九鬼の姓を名乗ることとなった。
3. 太平洋に続く熊野灘を展望し、海拔400m弱の山頂の麓に抱かれた穏やかな九木浦の良港は水深も深く海上輸送を主とした頃は台風や大波による難破船も含め、風待ち日和待ちで入港する船にとってははかけがえのない所であった。
4. そこでの村民と隆信の出会いと会話。その背景となる歴史的な時代の流れ[1333年鎌倉幕府が新田義貞を主力とする後醍醐天皇の軍の攻撃で滅亡し建武の新政があったが、その失政不満のなか足利尊氏が台頭、一天両帝の南北朝(吉野・京都)時代始まる。
5. 隆信は九木の桑の坂に、東西38間・南北23間の長方形の城を築く。(現在は畑)
6. 熊野灘に突き出した九木崎は海賊・九鬼にとって格好の場所で、その上部には狼煙をあげる見張所(遠見番所)を設置した。水軍も養成。

Ref. 『紀伊続風土記』、尾鷲市史余談 p80

## 第2場 二代隆治、神社創建

1. 二代の長男隆治は年少の頃は吉野の南朝に仕えて宮内少輔に補せられていたが、父が老境に入ったので九木浦に帰ってきた。
2. 城の西北の宮の谷に天満宮を創建し、五人張りの弓と箭を奉納した。  
寛文二年(1662)長い石段を登る現在の宮山の地に九木神社が再建されており、奉納された重器としての弓矢を保管する。境内には様々ないわれのある石灯籠等がある。
3. このほか九鬼氏開基の薬師寺と他2ヶ寺を合寺の真巖寺(曹洞宗)があり、県指定文化財の薬師如来(嘉暦4年1329の銘あり)を祀る。ここには目立つ大きな菩提樹がある。九木浦には神社と寺を含めた無形文化財の「正月禱屋行事」がある。尚現在の九木神社の入り口付近に、寄港した船がとも綱を結わいつけた大岩記念の記念碑「端綱大岩の碑」(平成5年建立)がある。

## 第3場 三代隆房の次男隆良、波切へ

1. 三代隆房も幼少の時代は南朝へ仕え、刑部少輔に補せられたが、南北朝合体後は九木浦に帰る。その長男四代隆長も南朝へ仕え、宮内少輔に補せられた。
2. 隆房の次男隆良は兄の隆長の後援も得て志摩の波切に進出・築城し、7島を領した(第2幕へ)。この隆良が九鬼家の第一分家に当る。

## 第2幕 志摩進出

### 第1場 難破船座礁

- 1・志摩に進出した隆良の波切の城跡とそれから望む大海原。現在の三重県大王町波切港と大王崎灯台、宮山、城山の位置と周辺島々の空からの映像。
- 2・暴風雨の夜、難破船(でんごろりん)を、蓑傘、松明を持つ男達が見つめ、翌早朝、法螺貝が吹き鳴り、砦の武士、住民が呼び起こされる。
- 3・望楼に坊主頭の武者頭金剛九兵衛と若者(九鬼右馬允 後の嘉隆)が船首丸上げ紋、船尾丸藤紋(下り藤)の土佐一条家の船が大王島の手前で座礁を認識。入江の船溜りから4艘の小早船が向かう。若者は舳先に白い犬を抱いて立つ。
- 4・座礁船と若者の船で弓矢の戦いの後、座礁船に縄梯子で乗り移る。船底に女3人。うち一人は土佐一条殿衆の息女お咲。九鬼右馬允を名乗る若者が女に犬を投げて一緒に連れて来いと言う。
- 5・天の恵み「お宝」と呼ぶ座礁船の荷物を小早船一杯に乗せ、櫓声を上げ波切港へ。女と嫁入り道具も荷物の隙間に。右馬允と女の対話。一人の男が女一人を海へ投げ、拾い上げる。

Ref.A.p5-11

### 第2場 右馬允(後の嘉隆)洞窟の祖父泰隆訪問

- 1・宮山の洞窟に右馬允は祖父の九鬼泰隆を訪ねる。泰隆は志摩に進出した隆良の後裔で鳥羽に近い田城も奪い、志摩の他の地頭からも警戒し恨まれている。その子定隆は父に先立って死に、その長男が田城砦の弥五郎浄隆、次男が波切砦の右馬允嘉隆である。  
泰隆はノミを動かして数々の人面を木彫りする。両者の対面会話。
- 2・昔波切の地頭で隆良に乗っ取られた川面家出身のお供の小姓役 川面右近と帰路で会話する。城山の砦に犬、捨丸が待ち兼ね、砦の奥に洗濯されて干された華やかな女の衣装をくぐり、縁側の若い女のもとで右馬允は目を合わせ、一言。

Ref.A.p12-15

### 第3場 澄隆元服、嘉隆結婚

- 1・弥五郎浄隆(22歳)の子弥之助澄隆(5歳)の元服に田城砦へ、波切砦の右馬允嘉隆(15歳)が後見役金剛九兵衛、川面右近と共に騎馬で山坂に行く。右馬允の嫁取りにつき会話。
- 2・田城砦にて兄弟の会話。志摩で鼻つまみであった幼児の思い出、志摩侵略の歴史。  
弥之助澄隆の元服の儀式。烏帽子を少年の頭頂に載せる右馬允嘉隆。以後幼名を捨てる。
- 3・波切に戻り洞窟の祖父泰隆を訪ねての会話。200年間志摩での状況。  
操船の術に長け、気性の激しい九鬼家が眠りについてきた諸地頭をめざめさせ、志摩のど真ん中の田城にも砦を構えたがいつ攻められるか、後は浄隆、嘉隆に。
- 4・嘉隆が呼ばれ、女が自害を試み紀州犬捨丸が邪魔したとのこと。数日後一条家の女お咲は女中頭に連れられ、捨丸を抱き嘉隆の居室へ。嘉隆とお咲のやり取り、手打ち、まくい。川面右近が顔をみせたが退散。女の年齢を聞き17歳と知る。
- 5・2ヵ月後の初冬に嘉隆とお咲きは婚礼。浄隆、澄隆も波切に来る。婚礼の夜、松明の明かりのもと宮山の洞窟に一同は泰隆を訪問。会話。

Ref.A.p15-25

## 第3幕 志摩追放

### 第1場 泰隆歿、田城敵襲

1. 鎧兜の九鬼嘉隆が32挺櫓の関船の舳先で采配。その眼前に金剛九兵衛総指揮の約16艘の小船の群れ、掛け声と弓矢で華やか、活発な海上合戦の状況。投げ鍵(手索)で船を引き寄せ船に乗り込む。船垣で武者の争い。調練やめ、の合図。金剛九兵衛が船尾甲板に乗り込み、戦いの評定。
2. そこへ4挺櫓の注進船で川面右近が泰隆危篤を知らせに来る。嘉隆は14挺櫓の小早船一艘を招き、右近と共に波切港へ。
3. 港にその年正月に生まれた男子藤四郎を抱いてお咲が出迎え。共に宮山の洞窟へ。大きないびきの泰隆。人面像の木像の群れ。嘉隆のもとで歿。  
翌朝昼前、浄隆が田城から十里の山道を泰隆の死に間に合わずに来る。
4. 翌日、仙遊寺の僧を呼び葬儀。その中に3騎の武者が20年前、泰隆に領土を追われた田城左馬之助が約70人により田城砦を襲撃したとの知らせ。
5. 夕刻、嘉隆も屈強の20数人を選び馬で田城へ向かう。途中迫間村(磯部町)で九鬼家の地侍数人が館から加わると共に、甲賀からたまたま逗留していた流浪人滝川市郎兵衛が火縄銃(鉄砲)を持って加わる。

Ref.A.p25-32

### 第2場 鉄砲で左馬之助を討ち取る

1. 深更に加茂郷岩倉の田城砦付近に着く。西方に加茂川、それから分かれた田城川が砦の前方。その川原に田城左馬之助の本陣。不意を突き会戦。危ういところで滝川市郎兵衛の鉄砲で左馬之助を討ち取る。砦から浄隆も出て来て対話。
2. 左馬之助討ち死にが飛び道具の鉄砲使用の為、翌年諸地頭より非難と恨みをかい、浄隆に使者を送り絶交宣言。館が南伊勢の多芸にある国司北畠氏にも全地頭が200年にわたる九鬼家の旧悪も暴き、その処分を願う盟約書が出された。そこから嘉隆呼び出しの使い。使いと浄隆との対話。
3. 翌々日波切から来た18歳の逞しい嘉隆と意見交換。織田信長の今川義元奇襲のことも述べ、船と鉄砲を揃えることを主張。

Ref.A.p32-40

### 第3場 浄隆没、田城を捨て九鬼船団敗北

1. 田城砦を400の地頭の軍勢が攻める。嘉隆も援兵を連れ砦にこもる病体気味の浄隆に会う。浄隆の国司への調停も聞き入れられず、嘉隆は夜襲の支度。
2. そこに波切砦から和具衆と越賀衆が攻めて来たとの急使。すぐ波切に帰る。
3. 和具、次いで越賀の砦に積極的に出撃し、夕暮れに波切へ引き返す。
4. 辛抱強く持ちこたえていた田城砦の25歳の浄隆が8歳の一人子澄隆を残し駆けつけた18歳の嘉隆と最後の言葉を交わし没す。
5. 没後6年後、やっと持ちこたえていた田城砦本丸で24歳の嘉隆と14歳の澄隆と城兵と評定。限界と、城を捨て、火を掛け波切に戻る。隆良が波切に進出した状況となる。
6. 迫間村の館に子女を移す話。志摩の地頭十人連署の磯部五郷、的矢七郷返還の書状。書面を引き裂き、合戦準備。先手打ち20艘の船団(内軍船は関船1艘、小早船6艘)出陣。甲賀砦襲撃。的矢湾千賀砦攻撃へ。夜討を受ける。翌朝千賀船団が来て合戦。  
鎧崎から安宅船を持つ小浜民部、2艘の関船を持つ向井正重(北畠水軍としても活躍した仁木義長から7代目の後)、先導する鳥羽監物、水主ら北畠海賊衆の50艘の船団。悲惨な海戦が始まる。九鬼船団は包囲され炎上沈没。嘉隆、澄隆、金剛九兵衛は救助に来た小早仕立の漁船で戦場離脱。迫間村の館に行き一旦志摩を離脱することになる。

(CG:3場、海戦)Ref.A.p40-60

## 第4幕 朝熊山根拠・船力充実

### 第1場 潮熊山出立

- 1・伊勢・志摩の両国にまたがる標高 553mの朝熊山の金剛證寺。蓑笠をまとい粉雪のなか、山頂を訪れる川面右近、紀州犬捨丸の鳴き声、杉木立の中遊ぶ2人の子供、お咲。嘉隆一家仮住まい、澄隆も隣室に。金剛九兵衛他わずかな家臣も寺内散宿。
- 2・摩尼殿近くの草庵で木彫りにこる嘉隆に川面右近は会う。船も沢山並び対話。
- 3・右近が志摩の諸地頭、国司の様子を報告。嘉隆が織田信長の家来に縁者がある滝川市郎兵衛を尾張に赴かせ、状況を探索させると述べる。
- 4・墨染めの僧衣をまとったもと金剛證寺の修行僧であった金剛九兵衛にも会う。
- 5・永禄九年(1566)2月金剛證寺の客殿の一室に、嘉隆はじめ九鬼衆が顔を揃え、織田家の鉄砲衆の大將もつとめる縁者の滝川一益にも会ってきた滝川市郎兵衛の話聞く。  
嘉隆は織田信長に隨身したいと述べ、滝川市郎兵衛も嘉隆は日本一の船大將と一益に申したという。
- 6・お咲と2人の子、澄隆を右近に託し、住職にも挨拶をし、滝川市郎兵衛を先導に、5人の家来を従え、九鬼嘉隆は永禄九年3月朝熊山を降りる。

Ref. A.P61-71

### 第2場 造船の町大湊逗留

- 1・五十鈴川と宮川の合流する河口の港町大湊に一行は赴く。船宿をかねた廻船問屋が軒を並べ、船大工たちの家がひしめく。船大工竹中辰兵衛の屋敷を訪れる。九鬼泰隆が13年前注文した関船鬼宿丸のこと等の語らいの後、安宅船のことを知りたいと要望。
- 2・逗留の為離れ屋で夕刻俵の竹中辰五郎と会う。なかば出来上がった安宅船を、大工の姿なら翌朝案内すると言われる。
- 3・入江の凹地で船体がなかば隠れている安宅船のところに、辰五郎に連れられ、嘉隆と九鬼家の大工頭をつとめる雨宮堪八は行く。梯子伝いで建造中の船上に案内され、ほぼ出来上がる下部構造を船底から二人を案内。船材・構造等につき質問。
- 4・その日から職人にまざり二人は平大工として船造りに参加。船の雛型づくりの好きな嘉隆も器用。十日もたつと信頼して木割図(設計図)も見せてくれる。  
水門から完成した安宅船が海に浮かぶのも見て、長期逗留の後、主従5人尾張へ。

Ref. A.P71-76

### 第3場 小牧山の城、北伊勢平状

- 1・信長のいる標高85mの小牧山城(火車輪城)の南麓の滝川一益の住居に入る。  
嘉隆(25歳)は禪一本、裸で頬ひげ、顎ひげの滝川一益(40歳前後)との対面。  
織田家仕官の希望のわけを聞かれ返答。信長は奔馬のような人柄と話す。
- 2・滝川一益に連れられ次々と関所を通り、山頂本丸の城門をくぐり、馬場で鉄砲試し打ち中の信長と対面。床几に腰をおろした信長に手招きされ嘉隆平伏。「九鬼とは変わった名じゃ。なぜか」と聞かれ「九の字は十に満ちぬ最高の数、満ちぬがため、常に前へ進むように定められ、鬼はその前進の心意気をあらわすと聞く」と答える。大座敷で夕餉の食膳を信長と向かい合っており、得意を聞かれ船と答え、志摩地頭、伊勢の北畠手飼いの海賊につき話す。滝川一益の寄騎とし食禄30貫を与えられることとなる。
- 3・小牧山山麓で半年過ごし、信長の美濃攻めにも何度か参陣。滝川一益には北伊勢攻略を命じ、信長は永禄十年美濃攻略、稲葉城に入り岐阜城とし、美濃・尾張を領有。
- 4・嘉隆は滝川一益とともに尾張・伊勢の国境に近い蟹江城に3000の軍勢で居座り、北伊勢の領主たちに帰服呼びかけ。天下布武の朱印、信長伊勢出馬の書面。桑名城を攻め落とし、滝川一益と木下藤吉郎にまかせる。永禄十一年四万の大軍で再び北伊勢へ。  
小豪族平伏。神戸城の神戸蔵人、安濃津城の長野次郎をねらい、信長三男11歳信孝を神戸家養子に、長野家には信長舎弟を入れ長野次郎追放。滝川一益勢州総奉行、桑名城を本拠とする。嘉隆には金銀と銭を与え、船建造、織田家海賊衆の育成を依頼。

Ref. A. p76 - 90

## 第5幕 織田水軍・志摩平定

### 第1場 南伊勢、北畠攻め

- 1・岐阜城から織田信長永禄十一年9月、尾張・美濃・伊勢の侍大将勢揃いして上落、東寺に陣。足利義昭15代將軍。信長に滝川一益と嘉隆が寺の大座敷で面談。
- 2・南伊勢・志摩の状況。国司北畠と海賊衆代表は小浜民部と向井正重。北畠具教は家督を具房に譲り、大淀城を隠居所と定めたが、松阪西方の大河内城に堅固な要塞。具教の舎弟木造具政とそのもとの織田家の威勢を恐れる僧源淨院を利用して国司家に内紛を起す。南伊勢地頭は中立。具教怒り志摩に出撃。桑名へ来て嘉隆に会う。
- 3・永禄十二年6月志摩の地頭は五十鈴川河口の汐合ヶ浜に布陣、北畠軍襲撃を待つ。嘉隆は安宅船をはじめ織田家の注文した軍船の引き取りに大湊に居る。
- 4・北畠軍と地頭連合軍の合戦、敗色濃い地頭軍、北畠軍背後から山田の神官が伏兵、退路を断つ。国司軍惨敗、伊勢に逃げ帰る。
- 5・織田信長5万の大軍が桑名城へ、ここからの滝川一益の兵と合流、国司軍包囲の木造城を助け、大河内城攻略に桂瀬山に本陣を設け、包囲の陣。嘉隆も呼ばれ、食料弾薬搬入阻止の為海上輸送の通路の松ヶ島城と大淀城を鉄砲を用い攻略の必要性を具申。

Ref. A. p90 - 104

### 第2場 伊勢平定、朝熊山に信長

- 1・桑名の港から80余艘の織田海賊衆の船団が船出し南下。安宅船総矢倉に鎧具足をまとう嘉隆が立ち、金剛九兵衛、滝川市郎兵衛など家臣が武装して佇む。昼過ぎ大淀城の港口に着く。安宅船楼上の大太鼓より押し太鼓、関船2艘もそれに応じ太鼓。十挺の長鉄砲の一斉射撃。嘉隆は浜に上陸し城攻め、陣頭に黄色絹に永楽銭をちりばめた織田信長の一丈六尺の大旗と、それに並べて九鬼家の七曜の家紋の白旗。城攻略。
- 2・松ヶ島城を艦砲射撃で攻めるの案。後年嘉隆は日本最初の艦砲射撃の定式考案。
- 3・大河内城で信長苦戦。次男茶筌丸12歳の養子入れ和議。伊勢平定。内宮参拝。
- 4・信長の馬の手綱を嘉隆がとり、朝熊山に登る。山頂の展望、信長との会話。織田水軍と名付ける。志摩平定を命じる。金剛證寺山門の近くで信長の帰路を人々見送る。

Ref. A. p104 - 114

### 第3場 鳥羽攻略、志摩平定

- 1・志摩の地頭たちは信長には従うが、水軍総大将嘉隆には恨みありそのもとの行かぬ。
- 2・桑名の水軍屋敷で嘉隆(28歳)は主だった家臣と相談、まず鳥羽砦の公家地頭の鳥羽監物、主水(もんど)父子を協力させることとし、永禄十二年(1569)11月半ば、安宅船一艘、関船二艘、小早船14艘。水軍200余人で、志摩の泊浦(鳥羽)に向い南下。
- 3・泊浦で力攻めに攻めると見せて和談に持ち込む。海上から大鉄砲攻めでおどし、滝川市郎兵衛を使者に立てる。嘉隆は信長のやり方のように、肉親を敵中に送るように自分が監物の娘(姉は小浜景隆に嫁ぐ)を正室として迎えることを申し出る。夕刻嘉隆上陸、砦の本丸の奥座敷で鳥羽父子と対座。金剛九兵衛が志摩の全地頭に鳥羽砦への伺候を促す鳥羽父子と嘉隆連名の書状を手渡し、承諾させる。監物の息女にも会わず。
- 4・期限内に地頭で来たのは安楽島左門と田城左馬のみ。浦砦の和田大学助への嘉隆の使者は首を切られたので、嘉隆は鳥羽主水(もんど)を連れ、九鬼家の七曜の紋旗と鳥羽家の左三巴の紋旗を翻し生浦湾の浦砦へ出陣。鉄砲で攻めたて主人の首もあげる。
- 5・鳥羽砦二の丸広間で、監物の息女しのぶと嘉隆の婚儀。澄隆も呼ぶ。川面右近は伝令役でお咲は側室に。小浜景隆は奥方の(しのぶの姉)も連れ、遅参、対面対話。
- 6・安宅船はじめ関船・小早船およそ二十五艘の船団。小浜と向井の海賊衆が逃げるに違いないとつづやき、澄隆、金剛九兵衛さらに鳥羽主水も加え、織田水軍全船団出撃して追う。他の地頭も加わり先鋒として追う。距離をつめ一斉射撃。火矢つるべ打ち。  
手索で敵船に乗り移り、捕虜多数、完勝。翌年志摩平定を滝川一益に報告。

(CG;3場6海戦)Ref. A. p114 - 158

## 第6幕 長島・石山本願寺攻め

### 第1場 長島攻め

- 1・元龜元年(1570)二年の信長をとりまく状況。近畿の残敵、浅井、六角、三好、朝倉、陰に陽に敵対する比叡山延暦寺・大坂の石山本願寺、その後ろ楯 甲斐の武田信玄、山陰山陽の毛利元成。元年正月信長が石山本願寺に移転の挑戦の使者。9月天満の本陣を一向宗門徒が襲う。比叡山山頂の浅井、朝倉の軍勢と膠着状態の信長、麓で嘉隆と対話。11月伊勢長島願証寺の宗徒が蜂起、信長の弟信興の尾張小木江城を攻める。
- 2・嘉隆は川面右近と伊勢へ。三大河川河口の中州 長島とその周囲の輪中は一向宗門徒の巢。小木江城に黒煙、一揆勢に取り囲まれた桑名城に夜やと入る。翌日物見櫓から戦死で極楽とする百姓兵の戦い振りを見る。信興は小木江城に火を放ち自害。
- 3・滝川一益も桑名城から安濃津へ退き、嘉隆も鳥羽の砦に戻り、賑やかな年明け。正室しのぶが嘉隆が生ませた子供を養育。お咲は来ない。嘉隆は家臣ら呼び集め水軍の訓練と組織作りに力を注ぐ。軍船名を6種類、軍兵、操船用員名も規定。
- 4・元龜二年 5月信長大軍で長島の一向宗門徒に決戦を挑む。津島神社に本陣。無理押しの川合戦で不利、一揆勢に翻弄され、戦果なく岐阜に引き揚げる。比叡山焼き討ち。毛利元就、北条氏康、武田信玄の死、足利義昭京追放。天正二年(1574)室町幕府滅亡。
- 5・天正二年7月信長最大兵力で三度目の長島攻撃。嘉隆に出陣命令。麾下の全船団を率いて鳥羽から伊勢湾口出撃。安宅船、関船は沖合に遊弋させ、嘉隆自身小早船で河口の小島攻略、最後の砦は長島本城。翌朝満潮時に織田水軍全船団漕ぎ進み、浅瀬に座礁した船は俄か造りの砦と置き去りにし上流へ。安宅船を長島砦中州の真正面の川原に乗り上げ、一斉銃撃(艦砲射撃のさきがけ)、一向宗門徒壊滅。嘉隆国持大名に。

(CG:1場5船団遡上、艦砲射撃);Ref.A.p159-178

### 第2場 嘉隆 志摩国主、紀伊出陣

- 1・天正三年暮れから四年春久々の休息。志摩は嘉隆が三万五千石の国主となり、信長の婚姻政策も見習い、娘らを家臣息子に嫁がせる。三年前正室しのぶにも嫡男出産孫次郎、後の九鬼守隆。その間に足利義昭中心に反信長同盟、4月石山本願寺拳兵。
- 2・伊勢では、北畠具教(大御所)は三瀬の館、その子具房(中ノ御所)は田丸城、本城大河内城に天正三年家督を具房から譲られた織田信雄(御本所)。それぞれに不満。僧木造源浄院は還俗して滝川三郎兵衛となり信雄の補佐役。
- 3・熊野海賊軍堀内氏が大御所の命令で騒乱。三木浦の三木城を新宮の海賊堀内氏を攻めると、御本所が紀伊長島におく加藤甚五郎から報告。
- 4・嘉隆全船団を鳥羽に集結。嘉隆の座乗する本船「鬼船」をはじめ紀伊南島へ、三木城救援、堀内氏海賊衆撃退、騒乱鎮圧。安濃津の滝川一益に報告、大御所具教が譜代の家臣に殺され具房都に逃れ、伊勢騒乱平定も知らされる。

Ref.A.p179-183、勢州軍記

### 第3場 石山城攻め

- 1・天正四年4月毛利輝元と断交を契機に四度目の石山城攻め。信長の兵糧攻めに本願寺困窮。毛利に救援求め、村上海賊出動、木津川河口へ。嘉隆は熊野で滝川市郎兵衛、雨宮甚八のみ参加。村上海賊独特の投げ抱烙、火鞠、火桶の投火器で敗北。
- 2・43歳の信長安土城御座所。嘉隆火攻めを受けやすい要所に鉄の薄板を張った船6艘の建造具申。伊勢大湊の船大工竹中辰五郎をたずね談判、依頼し天正五年末に誕生。
- 3・天正六年甲鉄艦六艘鳥羽湾に勢揃い、50余艘の船団で摂津大坂へ船出、途中雑賀海賊衆船団に勝利。堺の港に着く。10月華やかな観艦式。信長も見物に公家、大名、僧、宣教師を連れ案内(奈良興福寺多聞院英俊、ポルトガル宣教師オルガンチノの鉄船目撃記あり)。嘉隆に信長褒賞。
- 4・11月始め、600余艘の毛利海賊衆大阪湾侵入。濃い霧の中から巨船6艘現れ嘉隆鉄船の楼上、海戦はじまるが、火攻めも役立たず、完勝。嘉隆は九鬼大隈の守と大名衆へ。

(CG:3場4船団遡上、艦砲射撃);Ref.A.p179-183

## 第7幕 鳥羽城主・東西のはざま

### 第1場 信長歿、織田家内紛、澄隆討伐

1. 鳥羽砦奥座敷、嘉隆病床。31歳の偉丈夫澄隆の人望。女子供の状況、九鬼家の家政を見事に取り仕切る、両者の対話。信長は日本の中央部ほぼ完全制圧していたが、6月2日京都本能寺の宿で不意に明智光秀のため襲撃され衆寡敵せず切腹自害した報告が大河内城からの使者によりもたらされる。織田家の武将ら呆然自失。
2. 大河内城の織田信雄9日出陣、嘉隆も澄隆に見送られ鳥羽砦出立し安土城へ。包囲中城内明智秀満が裏手山道から去り、織田信雄から城内突入の際、残った兵が火を放つ。
3. 信長の跡目を決める清洲会議、新当主は二条城を攻められ自害した嫡男信忠の嫡男三法師と決定。柴田勝家と羽柴秀吉対立。関東管領にまで昇った滝川一益を伊勢長島に嘉隆が訪れたが憔悴、相談に来た嘉隆は失望して鳥羽へ戻る。

織田家内紛、次男信雄は秀吉、三男信孝は勝家。滝川一益も勝家と密約、しかし秀吉伊勢攻略号令、勝家は賤ヶ岳で大敗。秀吉に一益・嘉隆降伏。

志摩の国主であるが分家であるが故に悩む嘉隆は酒を常用。夢に光秀像が本家澄隆となりその討伐を決断、天正十二年11月滝川市郎兵衛の指揮で田城を攻め、澄隆の首。

Ref. A. P203-218

### 第2場 朝鮮出陣

1. 天正十九年8月豊臣姓を名乗り関白を辞して太閤と呼ばれる秀吉の明国征討伐令。嘉隆が海上部隊主力に名指される。全船団の旗艦にふさわしい新しい大宅船建造を思い立ち、伊勢大湊に赴き船大工棟梁辰五郎と相談、翌年2月頃完成。最初の船名は九鬼家の慣例に従い鬼宿としたが、出征軍本營の肥前名護屋に廻送したとき、太閤秀吉により日本丸と命名された巨船。自分の馬印の金の采配と茜色の吹貫を与う。
2. 文禄元年(1592)4月朝鮮に向け名護屋港を出て、釜山港へ。慶尚道水軍を敗ったが5月7日朝鮮水軍の名将李舜臣が、完璧な装甲艦の龜船をはじめとする80余艘の艦隊で登場。緒戦の勝利におごり上陸し京城に進撃したのが嘉隆の失敗、日本水軍連戦連敗。全船団の諸将が釜山沖の日本丸に集まり協議、論争。安骨浦の沖合で7月8日に龜船を中心とする李舜臣の船団と対決、弾丸弓矢も役立たず、龜船船首からの青銅砲で日本丸舷側楯板も粉碎され、逆櫓を漕いで逃げる。小早船で龜船の砲口を狙う戦法をとったが、諸将に容れられず、連戦連敗、文禄二年和議、全軍祖国へ撤退。慶長元年(1596)の再征の役の水軍編成には小船戦法で船団温存の嘉隆はずされた。口惜しい嘉隆56歳は慶長二年、家督を息子の守隆に譲り隠居する。

Ref. A. P.218-223

### 第3場 関ヶ原の合戦、嘉隆自刃

1. 嘉隆天正十四年着工で遅れていた鳥羽城築城工事(大坂築城の際の石材も利用)に熱中。大手門は港に向かう。2歳年上のお咲は長く田城にいたが金剛九兵衛隠居のあと波切砦に移ったその次男徳隆に同行。慶長四年鳥羽城完成。
2. 秀吉は慶長二年8月歿、家臣分裂、文治派三成ら西軍と武断派家康らの東軍。九鬼嘉隆と守隆父子には東西両軍から誘いかけ打診。嘉隆は徳川の天下になるとして、守隆に上杉討伐の家康のお供をせよと江戸に城兵九百余人を率いて出立させる。
3. その後間もなく西軍から味方にと起請文。仇敵が東軍に加担と聞き、分かったと嘉隆。守隆は伊勢湾海上警固を家康に免じられ鳥羽へ。空砲の威嚇射撃、使者を城内へ。鳥羽城を汚すのは勿体ないと嘉隆田城に移りそこで守隆と空砲、空矢の合戦。
4. 慶長五年9月関ヶ原合戦で東軍大勝。守隆大坂へ嘉隆は鳥羽城に戻ったが、日本丸で南へ、九鬼村で数日を過ごす。石田三成・小西行長も捕えられ徳川天下の知らせ。
5. 行先を家臣にまかせ波切へ、家康が嘉隆の首所望、守隆が父の命乞いを聞く。先祖の菩提寺仙遊寺の住職となった金剛九兵衛にも会い墓詣りにつき会話。
6. 家臣渡辺数馬領主の答志島の寺に宿。小犬と白髪の老女(実はお咲)と眼をあわす。家康が首所望で守隆の所領召し上げの苦衷も聞き、日本丸座敷で独り嘉隆自刃59歳。

Ref. A. P.223-243;(C G:2 場2 龜船との海戦)

## 第8幕 家督争い・山間移封

### 第1場 守隆とその家督争い

- 1・鳥羽城の守隆、大坂の陣(1615)に参戦『難波戦記』、豊臣方を悩ませ、5万6千石。  
4人の息子:長男良隆(病弱・寛永九年1632廃嫡・翌年歿)、次男貞隆(天然痘で寛永九年歿)、両者の母は原監物の娘。母は西山民部の娘の三男隆季。母が朝倉可愛の娘の四男久隆(元和四年1618誕生)は、8歳で叔父朝熊山金剛證寺の住職のもとで出家した。しかし長男良隆が病弱のため寛永九年廃嫡されたので久隆がその養子という形で守隆の後継者として將軍家光に拝謁し報告される。守隆はその年逝去。
- 2・しかし、守隆死後に三男隆季が自分が跡取りとして幕府に訴え、お家騒動発生。
- 3・訴状をうけ幕府は、跡目争いの責めにより、松平伊豆守智恵所の意向で、遺言どおり久隆を跡目とするが石高2万石減らし摂津三田へ転封、翌年寛永十年隆季には新たに丹波綾部2万石を与え、九鬼家を水軍を持たない内陸部へ押し込めることに幕府は成功。

Ref. C1p7, 190, K p4, S p155 - 158

### 第2場 久隆・三田移封。

- 1・藩の国替えには藩主・藩士・足軽仲間とその家族、家財道具・石臼・墓石まで運搬。鳥羽から続く民族大移動、先発隊が家臣から人夫の宿屋から糧秣の世話、三田での住宅の割り当てと大金必要が徳川施政の根本方針。  
[C1 p54 上覧に絵]
- 2・寛永十年1633年桜花点々として咲き誇る横山峠(券久寺坂)、新しく造られた墨痕鮮やかな木の領標「従是九鬼長門守領」。遠く霞む北摂三田の山脈、長尾・道場の村々正装直垂着用の従五位下長門守を迎える。
- 3・「おたち - 」の足軽頭の美声と共に、号砲一発隊伍を整えた列が峠を下る。視界に町並みの三田平野。街々・村々から笛・太鼓・鉦・三味線の賑やか喋子につれ、事前に打ち合わせた男は袴、女は矢緋の御殿女中風の服装の御殿踊り(ここは摂州三田の町よ、殿は志州の鳥羽よりお越し、武芸の誉れ四海に響く、九鬼の殿様めでたやな、三田本町いとやの娘、器量一番、姿は二番、歌につくろか、音頭にとろか、五月幟の絵に描こか)外は道の両側に平伏して新殿様を迎える。
- 4・城門を間近に控えた本町筋に少休止、正装した新領主、海で鍛えた威風堂々たる豪快さ、一際盛り上がった御殿踊りの後、地元有力者、大庄屋、総年寄らのお迎えの言葉、案外優しい殿様の歓迎の謝辞。

Ref. C1 p64 - 65

### 第3場 三田民話紙芝居「まいごになった墓石」三田市教育委員会より

[ 登場人物:大名、家老、宰領、家来、人夫頭、人夫1、2、3、4、和尚、通行人 ]

- 1・荷車や牛車の列の先頭がどうにか三田に着いたとき、列の後の方が切れ、日が暮れかかる。遅れた車はいっこうに来ない。行列の後ろの方に鳥羽の常安寺からの墓石を積んだ牛車。牛が引くので思うように進まぬ。横山峠の坂道。牛にむち。三田の町の灯。
- 2・すっかり暗闇。坂を下って街角にさしかかると向こうから提灯を下げた人。大きな寺はどこかと人夫頭がたずねると、通行人が正覚寺を教える。
- 3・牛を追い立て、境内に入る。人夫頭が声をかけると、和尚さんが出てくる。行列が離れたとことの成り行きを話すうち、時間が過ぎ、人夫達は疲れてその場にへたる。
- 4・目的地の心月院では、家老や宰領・家来が遅れた車の到着を今か今かと待ち、とうとう何人が手分けして探しに出かける。宰領が探しながら正覚寺付近を通りかかると、境内に牛車と人夫。人夫頭に心月院に運ぶよう言っていると、和尚さん出てきて、いったん、この門をくぐった墓石は、それなりに仏縁があると言い、よその寺に持ち帰るなら拙僧の首をはねてから持ちゆかれよと、山門のところにとっかと座り込む。
- 5・翌日家老が家来をつれ、九鬼の母御の墓石だから運ばせてくれというのが、和尚きっぱりと断り、供養が肝心と座り込む。お城でお殿さんに家老がことの次第を話すと、殿様は三田にもえらい坊さんがいると、ねんごろに祀ってもらうことになる。法要の時はまず家老・重臣が正覚寺に行ってお参りし、翌日に心月院で法要となる。

Ref. C1 p65 - 66

## 第9幕 学海船出・人材養成

### 第1場 三田藩学

- 1・三田藩の三田城敷地(車瀬城跡地)に御館(陣屋)、大手の七曜橋を入ると惣門を入ると表御殿、南は大池と堀。北は内堀を挟み二層の二の丸(政務)、鬼門に古城稻荷。  
海恋しさに館の周辺に池堀と島になぞらえる凹凸、操船水練の場として丹波川畔に舟小屋。  
参勤交代のために、江戸に上屋敷(数寄屋橋、神田橋、柳原、霞ヶ関)と下屋敷(二本榎)。
- 2・柳生但島守宗矩の孫宗春(妻が第一代久隆の娘)の二男副隆(すえたか)が第四代藩主(1674 - 1697)は將軍徳川綱吉が朱子学を奨励したので、元禄四年(1691)江戸留守居役天岡余次右衛門が推挙する林大学頭 の門弟、白洲文輔を藩主儒者役に召し抱え、元禄七年江戸藩邸に学問所。朱子学を三田藩の学問として弟良顕が江戸詰藩士に教える。
- 3・元禄十年藩主副隆が病死すると、文輔は五代藩主隆方(柳生家出身で副隆の養子)に願い出て、三田に引っ越し甲賀東庵明屋を拝領、屋敷内に学問所を設けた。国元の藩学の始まり。県下では一番早い藩校。
- 4・白洲家が代々儒官。七代藩主隆由(綾部出身)、藩儒白洲邸の学問所を改築拡張「国光館」。  
NA(古図)C1 三田 p45, 90, 109, 137, 170:5 江戸上屋敷全般 p104, 数寄屋橋 1634 - 1691 p70, 85;  
神田橋 1691-1694 p93; 柳原 1694 - 1708, (p83) 霞ヶ関 1708-1867 p34, 118, 173;  
江戸下屋敷 p28, 86, 94, 161. Ref. C1 p8 - 9, 16, 66 - 67, ( )高田義久「三田藩九鬼家年譜 1999

### 第2場 三田青磁

- 1・実地には江戸中期、志手原で小西金兵衛が陶器を焼き、これに従事していた陶工で、元々三田本町で代々置職をしていて途中から陶工になった内田忠兵衛がいた。
- 2・彼は志手原焼き以来の染め付け、赤絵作りなどに、師以上の才腕を発揮すると共に、寛政時代(1789 - 1801)三田三輪村の天狗の鼻に築窯。中国から輸入されていた青磁の原石を求め探すうち、亨和元年(1801)砥石谷の名に引かれその川岸の石を拾って来て試焼した所、釉薬としてまた磁胎として一級品であることを知り、青磁造りに着手。
- 3・窯の熱度を高めるための改造に資金必要。藩侯金融方の神田惣兵衛に出資依頼。
- 4・神田惣兵衛は内田忠兵衛を先進地有田につかわし研究させ、陶器細工人太一郎・貞次郎も伴い帰り、三輪天神裏山に窯を築き、青磁焼成に着手。
- 5・三田青磁が軌道に乗ったので、一層の向上発達のため、神田惣兵衛は京都から名工の高弟欽古堂亀佑を文化七年(1810)頃招き、三田焼黄金時代となる。  
(古三田青磁には、置物、香合、香炉、花瓶、小皿などがあり、精巧な浮彫、透かし彫りが特徴。色調は、さえた緑色、澄みきった緑濃い青磁、ルリ色の鮮やかな深みのあるものなど格調の高い作品を産し、中国青磁にも酷似)  
Ref. C1 p138 - 1391, 143, 144.

### 第3場 藩主隆国・造士館開設。

- 1・三田青磁をめぐる十代藩主九鬼隆国(1780 生まれ、1798 藩主、1844 に隠居して南嶽と称す。1852 歿)。
- 2・江戸生まれの隆国は柴野栗山に学び朱子学を究めたので、儒学を尊崇し、文化十四年(1817)には京都から近藤願一郎(播州の人)を儒官として召し抱え、その他の儒官も招聘。
- 3・文政元年 3 月(1818)九鬼藤之丞図書の屋敷を修復し「造士館」を開設、敷地内に聖廟・藩主臨校間(毎年3回その他不意に臨校して生徒の素読を聞く)・教諭以下詰所・授業之間・生徒控所・書籍庫・門・長屋・校守部屋・物置等を建て、午前は漢学・洋学・習字・礼式を、午後は校外で演武とし、文武両道兼修が藩規。
- 4・藩士並びに無足の子弟学齢日暦十歳に至れば必ず入学、寺子屋等での就学許さず。
- 5・白洲文五郎が近藤願一郎退官後の教授。 Ref. (a) [高田義久「三田藩学史」歴史と神戸(2001)]  
藩医としては、三代藩主隆律の御持筒組に召し抱えられ桶屋町に居住の川本英政二男衛好(もりよし)[1632 生]が医術を学び藩医となり、鍛冶屋町に住み周安(初代)と号す。その子英次も周伯と号し、その子戴英(二代目周伯)と、代々三田藩医で令名があった。

Ref. C1 p145 - 146, D p12.

## 第10幕 英才誕生・勉学精励

### 第1場 川本幸民の生い立ち

1・藩医二代目周伯には男子なく、娘(1793 歿)に播唐の国横谷村(現東條町)の医家耕斉の次男が婿養子となり川本周安(修安)となる。その妻の没後森川政子が嫁し、川本政子となる。

前妻の子長女達子のあと、三千子、米子、周篤、恭安、りく、そして幸民の三男三女が生まれた。

2・文化七年(1810)現在の兵庫県三田市三田町 24-29(周伯邸のあった当時の足軽町)の川本家に男の子幼名敬蔵(後に周民、通称養徳、長じて裕、字幸民)が誕生した。

Ref. (b)川本裕司・中谷一正「川本幸民伝」共立出版(1971) ]

3・幼い頃から種々興味を持ち勉学に励むが、文政二年正月 22 日父周安が病没(欣勝寺に墓)。

時に幸民は 10 歳、以後長兄周篤に養育されることなる。悲しんでおられず前年に開校した藩校の「造士館」に入学、昼は藩校で漢籍を学び、夜は一長老の家に行き漢文の素読を習う努力家で、断然頭角をあらわし学業進み、春秋試験毎に甲科に登る。藩の子弟で年上の者も幸民と競争できず、ねたまれてあう苛めにも耐えて屈せず。

Ref. B P9 - 18.

### 第2場 緒方洪庵の生い立ち。

1・幸民誕生の同じ年文化七年(1810)7 月 14 日、備中国足守(現在の岡山市足守)で、後に緒方洪庵となる田上セイ之助が、父は足守藩(木下氏外様 2 万 5000 石)の家臣で 33 俵 4 人扶持の佐伯瀬左衛門惟因(これより)44 歳と母キョウ 35 歳の第三子として誕生した。現在はその屋敷跡に「洪庵緒方先生碑」があり、敷地の隅に産湯の井戸が残っている。

なお両親の画像として父の喜寿(77 義)を祝った時に描かせものがある(天保 14 年 1843 年坪井信道の兄清荒神清澄寺の住職露庵が賛をしている)。

Ref. (c) [図録「緒方洪庵と適塾」適塾記念会(1971)]。

2・洪庵は文政八年 1825 年十六歳で元服して、田上セイ之助惟彰(これあき)と名乗った。この年父は大坂における藩の蔵屋敷の留守居役となり、惟彰も父に従って上坂した。

3・翌年、父と共に一旦帰郷したが、生まれつき身体が弱く、武士に適さないとして、医を志す決意を述べた手紙(Ref. (c))を残して上坂した。

4・洪庵は 1826 年 17 歳のとき来坂して蘭学者の中天游(1783-1835)の思々齋塾に入り、この時から緒方三平と改名しオランダ医学の修業を始めた。天游は丹後の人で、江戸の大槻玄沢、京都の海上随鷗(もと江戸に居た稲村三伯)に師事した蘭方医で、後に来坂し、大坂の傘屋の紋描きで非凡の才能を持ち、江戸で蘭学を修め帰坂後、医業の傍ら系漢堂で子弟を教え、その学問は地理・物理等に及び、我が国初の電気の実験も試み、種々の蘭書の訳の中には「エレキテル究理原」もある橋本宗吉に学ぶ。

Ref. (d) [海溪昇「緒方洪庵と適塾」大阪大学出版会(1996) ]

### 第3場 幸民・村上家に留学。

1・幸民は 18 歳のとき、文政十年(1827)正月 31 日、兄周篤と面識のあった、播州加東郡の木梨村(現在は木梨神社のある兵庫県社町藤田)の村上(宇野)良八のもとに留学し入門した。同家は代々医を業とし、三草藩の藩医の様な地位にもあった和漢医学書を多数所蔵する近郷の名家である。

2・熱心な幸民はここで多くの書物を涉獵し、『解体新書』にも接し、医学を学んだ。

3・2 年余り後の文政十二年 4 月 3 日に幸民は三田に帰った。

4・なお幸民が三田に帰ったころ生まれた村上良八の嗣子村上大三郎は、天保十五年(1844)15 歳のとき大坂に出て、緒方洪庵の塾に入門(「姓名録」第 4 人目)、九年間蘭学を学び、同門の大鳥圭介と共に江戸に行き、伊東玄朴のもとに三年、数藩からの招きもあったが辞退し、伊豆の葦山の江川太郎左衛門と殊に親交、兵学に自信をもつ。幕末には幸民との交信もある。中年からは郷里に隠棲、医業(特に眼科が得意)を開き、また私塾をおこした。弟子には江藤新平、沼田新八、柴六郎、新宮涼閣などがいる。

Ref. (b); (e)小沢清躬「蘭学者川本幸民」川本幸民先生顕彰会(1971) P9 - 18.

# 第11幕 江戸留学・出発到着

## 第1場 大坂蘭学事情、幸民江戸へ

1・幸民が木梨村に行った文政十年夏、大坂・京都では隠れ切支丹水野軍記が信者を増やしている噂が流れ、その一味として十数人が逮捕、橋本宗吉の門人医師藤田顕蔵がいたので宗吉も取り調べをうけ、糸漢堂も探索をうけた(切支丹事件)。さらに翌年文政十一年 10 月には「シーボルト事件」が起きた。すなわち、文政七年長崎オランダ商館付で来て蘭学を教え遊学するものも多かったシーボルトが任期を終え帰国のさい船の難破で積み荷に日本地図など禁制品が発見され、地図を与えた幕府天文方高橋景保等が下獄し、多くの蘭学者が取り調べをうけた。文政八年シーボルトが大坂に立ち寄った際、訪問した宗吉(66歳)も苛酷な取り調べをうけた。事件の決着は文政十二年暮れ。

Ref. (f) [柳田昭「大坂商人学者からの伝言」みおつくし(2000)]

2・このような蘭学苦難の時期に、幸民が木梨村から帰って間もなく、水軍の血をうけ、学問の海に乗り出す夢を持ち将来洋学が必ず必要と洞察していた第10代藩主九鬼隆国は、優秀な資質を藩校で示していた幸民を特に選んで江戸にて勉強させることとした。

3・文政十二年5月19日三田から参勤交代で出府する藩主隆国の百名を越す一行の中には、藩医として従う兄周篤に伴って、学若しならずんばの気概の弟の幸民があった。

Ref. B P9 - 18.

4・この時、幸民が摂津の有馬温泉・一庫泉(現在の川西市能瀬川沿い「摂津名所図会」1798 所載)・名塩泉(現在の武庫川沿い武田温泉)の試料水を分析のため瓶に採取し江戸に持参した。このことは、我が国で初めての蘭書訳化学書『舎密開宗』を刊行した宇田川榕庵(1748 - 1846)著の『諸国温泉試験』\*の次の記載からわかる。「文政十二年巳丑季秋摂州有馬温泉升許ヲ外父無涯翁二得タリ其門人河本弥圭造三田人の輸ス処ト云予舎密加(シミイキュンデ)ノ法ヲ以テ之ヲ試ミ左ニ其説ヲ記ス」以下略。(この文中での河本は川本の、圭造は敬蔵の誤記。なお外父無涯翁は宇田川玄真・榛斎とみられる)。

NA{\*宇田川榕庵「諸国温泉試説」武田科学振興財団[杏雨書屋]}

## 第2場 途上四日市の宿

1・三田を出た三田藩の一行は、泊まりを重ねながらゆっくりと伊勢路をたどり、文政十二年5月28日、四日市の宿(しゅく)に着いた。あとは次の桑名の宿を過ぎると、いよいよ一行の感慨を誘う九鬼水軍ゆかりの伊勢の海とも別れ、後は東海道を江戸に向かう。

2・ここでその人達にまじり海をのんびりと見ていた20歳の幸民(色黒で筋骨隆々身の丈175cmほどの大男、眉太く目に光あり、意志の強い口元で、口重く、人付き合いは悪く、後に島津斉彬は「幸民は太鼓じゃ、心を強く打てば大きく鳴るが、打ち方が下手じゃと、うんともすんとも言わぬ」と評す)に兄周篤が近づいて、お殿様のお召しとつげる。藩主の前で緊張のあまり、お礼の言葉も出せず額を畳にこすりつけるように平伏するのみ。兄が代わってお礼を述べる。藩主隆国からの言葉で、「造士館」での精励、抜擢の理由、腕白どもの苛めの一件などを知ることを聞き、少し緊張がとけ照れくさそうな表情の幸民にくだけた調子で「余の祖先はこの海から船出して遥か彼方の異国まで航海した。その方の面構えはまるで海の男のようじゃ。その方を見ていると我が祖先のことが頭に浮かぶ。その面魂を広く世に出してみたい。後ろ盾になろう。学問を通じて大きく羽ばたいてみよ」と。

Ref. B P9 - 18.

## 第3場 江戸着、幸民兄歿

1・文政十二年6月10日幸民は江戸着、霞ヶ関の藩上屋敷内の長屋に兄と同宿、学塾を探す。「シーボルト事件」で蘭学者がかかわり恐れる中、反骨精神で蘭学を学ぶ意志。塾探しは兄任せ、屋敷内の書庫に入り浸りとなり、蘭学入門書大槻玄沢『蘭学階梯』、和蘭辞書の稲村三伯『波留麻和解』写本も見つける。

2・兄が、蘭学産科医の足立長雋(しゅん)を篠山藩の人(坂部秀達)から紹介され、お願いしてきたと喜んだ深夜、突然苦しみ吐瀉、十日の後に兄は帰らぬ人となる(欣勝寺に墓)。

3・兄の遺児操はまだ三才になったばかりで、家を継げるまで幸民が遊学を辞退して帰郷し責任をになうべきと深く悩む。しかし、藩主から呼び出され、男子の本懐としての蘭学を諦めるべきでない、そちの学費の面倒はみると説得される。

Ref. Bp19 - 26.

## 第12幕 蘭学塾入門

### 第1場 足立塾から坪井塾へ

- 1・幸民は文政十二年9月9日重陽の節句の日、兄が手筈の56歳の足立長雋(しゅん)(もと漢方医学を学び、その後蘭学を志し蘭方内科を研鑽、西洋流産科の第一人者となる)の塾に入門。塾頭が多士済々の塾生を紹介し、挨拶。篠山からの坂部の言葉に支え。
- 2・修学の順調な踏み出しと、優秀な能力に加え、藩主隆国個人から学費の面倒をうけている幸民の学問に対する気構えと、蘭学に風当たりの時期での執心。
- 3・翌年秋、師長雋との会話。「僕には産科の知識を授けたり、お前を蘭方医として恥ずかしくないくらいの者にはしてやれるが、それ以上のことは無理じゃ。お前には本気に取り組ませたい。してくれる若い生きのよい師が必要なのじゃ」「昨年塾を開いた坪井信道の門を叩いてみるか。あれは僕より二十も若いし、宇田川門下きっての秀才じゃお前がその気なら、僕から頼んでみよう」。
- 4・文政十三年10月、師に連れられて坪井塾に出かける。道すがらの会話。
- 5・いよいよ坪井塾行となり、坂部の音頭で気の置けない大家族のような送別会。

Ref. B p27 - 32

### 第2場 幸民・坪井塾入門

- 1・深川の富岡八幡宮の北東の材木置き場に囲まれた木場三好町に、安懐堂の看板をかかげた坪井信道(美濃の人、10歳で父、12歳で母を亡くし、苦学、25歳で江戸へ出たが按摩をして生計。やがて宇田川榛齋に認められその書生となり蘭学を学ぶ。35歳に安懐堂開く)の塾。幸民が入門科(束脩)を納め、入門の挨拶をすませると、塾頭の青木周弼(しゅうすけ)から飲酒禁止、外出切符等の厳しい塾則の説明あり。厳しさは歓迎だが、禁酒の決まりを聞き幸民の困惑の表情に、青木の師の心の言葉。
- 2・師の信道立ち会いのもとで、塾頭から、六段階のどの級に入れるかの試験をうける。判定する側の周弼が舌をまく見事な最上級の結果。足立塾での熱心な勉学の成果。
- 3・坪井信道は学び方や生活態度については厳しいが、塾生の思想、方向には自主性に任せた。この姿勢は後の蘭学塾(幸民の塾、洪庵の塾)に引き継がれ、有能な人材を輩出。

Ref. 8p32 - 36

### 第3場 洪庵・大坂中天游塾より坪井塾入門

- 1・幸民が入門した文政十三年はその12月に天保元年と改元、年が明けると天保二年(1831年)、その2月、大坂から思々齋塾こ足掛け五年間学び、師の中天游から「もう僕が教えることはないから、江戸の坪井を頼れ」安懐堂を紹介されて、出府して来た緒方三平、後の洪庵が入門した。
- 2・洪庵から入門の挨拶を受けた塾頭の周弼は「おい幸民、こんど大坂から来た新入りはお主とよう似た奴だぞ」「それだけではないぞ。判定の結果もお主と同じで最上級だったのだ」と言う。
- 3・幸民と洪庵は同年齢で最初からうまがあったが、体格・顔付きは全く異なる。水軍を率い、漁師でもよい偉丈夫、眼差し、鼻梁、口元に意志の強さを感じる茫洋な幸民。細い目、長い鼻筋、すこし突き出す顎の、見るからに優しく誠実そうな洪庵。両者の語らひは、勉学資金(藩主の支え・自分で稼ぐ)、目標(自然の理探求・蘭方医として)のこと。
- 4・信道は洪庵からの相談で、玄関番・義眼作り・蘭学書写本・富裕な商家の按摩を世話する。幸民はその中で学業に精励する姿にも感動し、友情は深まり、生涯の糧に。
- 5・一ヶ月程すぎ春になると、伊東玄朴が信道へ「これは自分が長崎の鳴滝塾でシーボルト先生に学んでいたとき手に入れ、世に出そうと思っていたが暇が無くなった。お主のところの優秀なものに託させると、本邦で最初の本格的な蘭文典となる」と持ち込んだ二冊『ガラマンチカ』『セインタキス』の翻訳が周弼・幸民・洪庵に声がかかり(この間は禁酒の塾則を適用せぬと信道に言われ幸民は赤面)、最上級の幸民には、女手のない塾での師の結婚の仕事も加わり多忙となる。

Ref. 8p36 - 41

## 第13幕 青春・婚儀恋情

### 第1場 坪井信道・青地林宗長女糸と婚儀

- 1・37歳になるまで独身の塾主坪井信道と、江戸屈指の蘭学者青地林宗(1755 - 1833、松山藩医の家に生まれ、蘭学を馬場佐十郎に学び、信道の師宇田川榛齊らとも交流)の長女糸(くめ)との婚儀が行われる。新婦の父青地林宗は当時57歳、『気海観瀾』『輿地誌』等の書を出し、天文台訳官も務め、水戸藩からも三顧の礼で請われるなど真面目な学者。一方新郎側の参列者としては信道を家に引き取り面倒を十年間みてきた師の宇田川榛齊とその養子となっていた宇田川榕庵の親子が江戸に身寄りのない信道の親兄弟の代わりとして列席。  
その他の参列者には居住区から下町連と呼ばれた、足立長雋を筆頭に、内科の伊東玄朴・竹内玄同、外科の戸塚静海など錚々たる面々が殆ど全部が出席。
- 2・婚儀は最初は長老の手前厳肅な雰囲気だったが、固めの杯が交わされた後は、書生気での鯛の生き造りの肴の酒宴。天衣無縫の伊東玄朴の遠慮ない言葉、林宗はこの度は榛齊のお骨折りでの長女が良縁に恵まれたが、まだ娘が四人いるとの合言葉。また伊東玄朴は未だ独り者で養子で代診の伊東玄鬼晁(ちょう)がいるとも発言して座の主役。
- 3・玄朴と一緒にシーボルト先生に学んだ高野長英(山手連、尚齒会と称し、医学研究のみでなく外交問題にもにも関心を持つ)が、玄朴は金持ちの患者ばかり診て金儲けに狂奔していると触れ回っているがどうなのかと、榛齊が問いたです。それに対する玄朴の種痘術をして痘瘡を退治したい元手の蓄財との答えなど、座は蘭学談義一色となる。信道は、種痘に関心のある洪庵を玄朴に紹介し玄朴は洪庵に大坂で気張れと言い、また物の理を究めることが目的の幸民を末席より呼び、先達の林宗と榛齊に引き合わせる。

Ref. B p40 - 46

### 第2場 青地林宗三女秀子との出会い

- 1・婚儀の宴のあと師の信道は、究理学の青地家や、舎密学の宇田川塾への使いには幸民を決まって命じた。どちらの主も若い幸民に好意を持ち引き留めて教導した。
- 2・はじめて青地家に行った時、川風をうけ横川沿いに北に進み、小名木川、豎川を渡ると本所、やっと探した医所や学塾の看板もない天下の青地先生の小さな家で、来訪をつけると、長女糸と瓜二つの三女秀子が現れる。先生は自著『気海観瀾』を熱心に講義し、その後も訪問のたびに講義。いつの時も「儂もお主と同じように天地の究理を極めたいと願っているが、それについての書はまだ不十分なので、若いお主に後を頼まにゃならん。じゃから懸命に励んでくれ」の言葉。
- 3・青地家には、信道の嫁の糸のあと、次女道子を筆頭に秀子・宮子・信子と年にあまり隔たりのない四人の娘があり、その楽しそうな笑い声が書齋での講義中も聞こえる。  
幸民は五つ下の17歳の立ち居振る舞いのきびきびした秀子の存在が、意識の中で大きくなり、彼女の姿を目で追うようになる。ふと目が合うと慌てて目をそらす。

Ref. B p46 - 50

### 第3場 坪井塾での訳業

- 1・周弼・洪庵・幸民に任された翻訳の仕事は難事業で、我が国最初の和蘭辞書の『波留麻和解』の写本を三人が一日中独占して努力。周弼は塾頭の役割もあり、洪庵は生活費を稼がねばならず、睡魔が襲う。三人揃うのは塾生の寝静まる深夜では幸民の独壇場。
- 2・幸民は師の信道の許しで公然と大好物の酒にありつけるので、一生徳利をでんと据え飲みながら一段と調子をあげて頑張る。困難にあっても酒臭い息をはきながら、素手で『ターヘルアナム』に取り組んだ前野良沢・杉田玄白をあげ、仲間を激励。
- 3・悪戦苦闘の末、年内に語法論の『ガラムンチカ』文章論の『セインタキス』の和蘭文典を完訳。依頼主の玄朴と信道は江戸の多くの蘭学者を招き祝宴。周弼が一番の功労者は幸民と話し、洪庵は「幸民いよいよ酔うていよいよ勤む、吾人の及ばざるところ」であった。酒の減り具合と訳の進み具合をくらべるとどっちがどっちと言って笑う。訳された文典は早速教材になる。洪庵の適塾でも創立当時から使用。

Ref. B p51 - 53

## 第14幕 塾卒業・帰郷

### 第1場 塾卒業、三田帰省、葛城山麓高貴寺訪問

1. 天保の飢饉が始まる天保四年(1833)2月、24歳になった幸民は、坪井塾を卒業して、三田に四年ぶりで墓参りなどのため帰ることとなる。藩の上屋敷に参上し、隆国に報告、学費・生活費の世話のお礼と共に、とんぼ返りで出府とも述べる。勉学の労をねぎらった隆国は「あわてて上府することない。郷里でゆっくり骨休みすればよい。それともなにか急いで江戸に戻らねばならぬわけでもできたのか」と、心の動きをみるに敏な目で、青臭い幸民の顔を覗き込む。
2. 師の信道夫妻にも挨拶。嫁いで二年過ぎ前年10月男子を生み母親の貫禄がついた幸民と同年の内儀の糸は姉の口調で「こちらにも川本さんのお帰りを首を長くして待っている者がいることをお忘れなく」と。信道も「その通りじゃ。お前がいなくて青地の家に淋しがる者があるからな」と。二年前の和蘭文典の翻訳完成直後の10月、青地家の末娘信子11歳が病没、その葬儀を幸民が何かやかと手伝い秀子との垣根もとれ言葉を交わせるようになっていた。優しく物静かでも凛とした理想の男性の父林宗も自分の後継者ができたと褒める若者幸民の好意を感じ、ほのかな思い。
3. 三田へ帰郷の途、幸民は師の信道に頼まれた用件のため、四日市から参宮道に伊勢湾沿いの道を取り、大和の桜井から飛鳥と難波を結ぶ竹ノ内街道に出て、葛城山麓の真言宗の古刹・高貴寺に信道の兄浄海(その後宝塚市清荒神清澄寺の住職)を訪ねた。兄は若い信道が文政二年(1819)蘭学を志し(宇田川榛齋)の『医範提綱』を見て)宇田川塾に入りたいと尋ねたとき、激しく反対し義絶の状態が続いていた。幸民は師の信道が蘭学者の信頼厚く江戸での中心的存在、結婚して一児の父である等を熱心に説明。黙って聞いていた浄海は数珠を片手に、穏やかな口調で「拙僧は間違っていた」と了解した。

Ref. B p53 - 58

### 第2場 郷里三田、幼な友達との宴

1. 三田に帰郷した翌朝は、父・兄の眠る桑原の欣勝寺に墓参し、家への帰りに天満神社の高台に足を止め、周辺の山並み、山野の自然を眺め、江戸の暮らして失いかけていたものを取り戻し、いつかこの静寂そのものに林宗先生をお連れしたいと思うが、まだ未熟な自分は必要なものを吸収できる江戸に身をおかねばならぬと考える。
2. 母にまた江戸に出立することを告げるのは辛かったが、母は「私や家には気にせず、学問をせよ。それが亡くなった兄・父の望み、殿様のご思を忘れぬように」と。
3. 幸民の帰郷を知った幼な友達が数人集まって激励の宴。江戸ではなかなか口にできない伊丹の剣菱の一斗樽が持ち込まれた。湯飲み茶碗で酒をのみながら、家もすぐ近くで仲がよかった小寺弥五が幸民に忠告。「藩内にはお前のことを快く思わん連中がおるといことだけは心に留めときや。きっと造士飴時代のことや、お殿様のお前に対する昨今の温情への妬みや。それに若君は蘭学がお嫌いなようで、取り巻きの間でお前に対する反感が高まるとるようや。くれぐれも注意せいよ」と。その場の皆も「そうや、弥五の言うとおりのや」と。母の気丈な言葉と幼友達の忠告を胸に江戸に帰る。

Ref. B p59 - 61

### 第3場 青地林宗歿、信道より秀子との縁談

1. 坪井塾の敷居をまたぐと同時に、わずか一月の留守の間に、青地林宗(1775 - 1833)が22日に逝去しと知らされる。早速信道に連れられ、本所の青地家で仏前に詣で、浅草曹源寺に墓参り。道すがら「なにしろ急だった。前の晩、先生は普段と変わりなく床に就かれたらしいが、そのままだっそうじゃ」と胸まらせて信道の言葉と思い出。
2. 曹源寺の門前が見えてきた時、さらっと「先生に先立たれて青地家には稼ぎ手が無うなってしまった。上の道子は玄朴の養子玄晁と縁談。義母や残りの娘も少しして三好町の家に引き取るつもり。じゃからお前も早く独立して秀子を貰ってくれ」と唐突な重大な発言。

Ref. 8p61162

## 第15幕 自立・成婚

### 第1場 自立・三田藩医、藩主に随行帰省

- 1・数カ月後、幸民に藩の上屋敷からの呼び出し、九鬼隆国にまみえ目付の越賀弥六郎から、医術をもって殿様に歩行小姓の役職で仕えることを申し渡される。以後の様子は幸民が『養英軒雑記』に書き残している。なお洪庵はこの頃宇田川榛齋についても学んでいる。
- 2・隆国の帰郷時に随行を申し渡され、天保五年(1834)5月幸民は坪井塾を辞し上屋敷長屋に移住、7月末隆国に随行江戸を立つ。8月15日三田到着後、江戸に永住し学問に励みたいと願い出たが「当分、余に付き従うのじゃ、国元にあるうちはここより余の出府の時随行すればよい。それより畿内をまわってみよ」と言われる。隆国は幸民への妬みや反感が重臣の子弟の間で濃厚で、それを陰で保守的で蘭学を嫌う世継ぎの隆徳(たかのり)が煽っているのを知っていた。

Ref. Bp62164

### 第2場 京阪遊学、蘭学者訪問

- 1・幸民は隆国の言に従い9月21日から11月5日までの約一ヶ月半大坂や京都の蘭学者歴訪。
- 2・大坂では洪庵に勤められていたので京町堀坂本町のその師中天游の思々齋塾を訪ね、江戸での洪庵の奮闘ぶりを話し喜んでもらう一方、江戸での蘭学への風向きを大坂蘭学の始祖橋本宗吉に話すと喜ばれるだろうと述べ、その案内で心齋橋筋を東に入った車町の糸漢堂に連れて行かれた。その途上情けない畿内蘭学者の状態に悲憤憤慨。
- 3・宗吉は中風で最盛期には数十人も塾生のいた広いが閑散となった突き当たりの前栽の見える寢床に横たわっていた。その横には書物がうずたかく積まれ、硯と筆。  
はじめ宗吉は無表情のまま幸民の挨拶をうけたが、幸民が究理学や舎密学を極めたいと述べると、生き生きとなり天游の手を借り起き上がり顔を歪めながら話し始める。自分の育ち、江戸の蘭学に追いつけ追い越せと励んだ仲間の話など。とりわけ幸民が感銘を受けたのは「これを知るは易く、これを得るは難し」という「親験実試主義」に基づいた大坂の蘭学者の実践(エレキテルの実験、伏屋素狄の墨汁・大豆による循環経路調査、各務文献骨格構造の木骨等)。蘭学書を翻訳するだけでなく、自分で試してみることが大切なことを悟る。  
別れの際、幸民は「先生の話に身を刻み、一生の宝にする」と深く頭をさげる。
- 4・大坂では福沢諭吉、旧暦12月1日新暦1月10日(1835中津藩蔵屋敷に末子として誕生。翌6月父病死、母は子供5人を全てを連れ中津に帰る。
- 5・その後幸民は京都にも足を延ばし、実り多かった遊学を終え、三田に帰郷した。12月にお召しがあり、藩医に任じ七人扶持、出府に随行しその後は常府を許すと。翌年4月末三田出立前、殿様のお供をして駒宇佐八幡参詣。

Ref. Bp65 - 70; 福翁自伝 p3

### 第3場 幸民・秀子と婚儀

- 1・天保六年5月25日十カ月ぶりに江戸に着いた幸民は深川三好町の坪井塾に行き、屋敷外に家を持つことを許されたこと、秀子とのことを師信道に口上するつもりで。
- 2・幸民留守中に青地林宗の遺族はすでに坪井家に引き取られ、玄関で彼を迎えたのは予想もしない当の秀子。それで幸民が何も言えないでいると信道の言葉。師の内儀の糸だけでなく張本人の秀子・青地家の母や柿妹も同席で幸民はあがってしまう。「僕ははっきり秀子との婚儀のことと思い、義母ともども喜んでいる。秀子もその気で花嫁修行に励み、気の早い玄朴は仲人をやると決めている。なにか不都合でもあるか」と。幸民は普段の自分に戻り、秀子に顔を合わせてからの心理経過を打ち明けた。話はとんとん拍子に纏まり、その夜は坪井家で内輪の祝宴。林宗も望んでいたとの話。
- 3・藩医の勤めも考え霞ヶ関の三田藩上屋敷からも二本榎の下屋敷からもそれほど離れていない芝露月町に住まいを見つけ、7月11日藩屋敷内の長屋から移り住む。その新居での年の暮れ26歳幸民21歳秀子の婚儀。媒酌人は信道とならび下町連の中心の伊東玄朴。彼は当時佐賀鍋島藩医であったが、その後江戸に種痘所開設に奔走、その功で幕府奥医師、やがて法眼に叙され蘭方医の最高の地位。信道の婚儀に劣らぬ多数の蘭方医が押しかけどんちゃん騒ぎ。幸民は林宗と昨年亡くなった母を偲んだ。

NA 幸民自筆『養英軒雑記』 Ref. B p71 - 75

## 第16幕 刃傷事件

### 第1場 隆国と隆徳の意見相違、幸民苛め

1. 藩主隆国は進取の気性で、幸民が蘭学を学び深めることを支援し、藩医に取り立てるなど抜擢してきた。しかし松平阿波守家から寛政十年(1798)嫁入りの本妻於理(おひさ)の長男嫡子の仙次郎は、享和三年(1803)4月行年二歳で病没し、その後は隆国の妾の象(さき)に享和元年(1801)4月に生まれた幼名武三郎、後の隆徳が藩主の跡継ぎとされたが、性格は驚くほど保守的で、蘭学を切支丹伴天連の妖術のように毛嫌いしていた。
2. このような雰囲気の中、藩の一部のものには、幸民に対する太刀打ちできないいまいましさからくる十代の造士館の頃からの妬み、反感、幸民の人付き合いの下手からくる相手を無視したと思われる誤解、それに次の藩主になる若君の蘭学嫌いという大義名分に支えられ、彼らからの「いじめ」があり、蘭方医として抜擢された幸民の間には一触即発の場面が何度となく起きていた。

Ref. B p77 - 79

### 第2場 刃傷事件

1. 幸民の結婚の祝言から二ヵ月余しか経たぬ翌年の2月末、幸民が藩の上役を傷つける事件が起こった。これに関しては死の40日前の明治四年4月の遺書には「勤仕幾モナク不慮ノ禍ニ罹リシニ、尚コレヲ棄テ玉ハズ、幾多ノ黄金ヲ出シテ、以テ其罪ヲ償ヒ玉フミナラズ、尚且愛憐ヲ垂レ玉ヒテ、軽緩ノ罰ヲ加エ玉フ………」とある。
2. その日、隆国の腫れもの治療を終えた幸民は、別室で好きな酒を振るまわれ、ほろ酔い気分で帰宅のため門を出たところ、藩屋敷に帰ってきたいつも絡んでくる上席の藩士数人に出くわす。いずれも随分飲んだようで足元が乱れ、目がすわっていた。連中は「これはこれは、蘭学の先生。また殿様に胡麻すってのお帰りかな。それにただ酒も随分召しておられるようじゃ。武骨ものの拙者らには真似できぬこと、そのこつを教授ねがおうではないか」と因縁をつける。幸民は腰を低くし「確かに儂も御酒をいただいている、失礼があつてはいかぬから、どうか今日のご勘弁を」に嵩(かさ)にかかって「拙者らを口先でいいくるめ逃げ出すつもりか」「造士館の時はまんまとその手に乗せられたが、今日はそうはいかぬぞ」「我が国には儂らにあう漢方という医術がある。夷狄の文字が読めるとして藩医にしゃしゃりてるな」「殿を丸めこめて、殿も殿じゃ」など悪口雑言。蘭学で罵られるのはよく経験するので耐ええたが、大恩のある隆国をその屋敷門前で悪しざまに罵られ黙っておれず、「お屋敷の門前ですぞ、藩の名にかかわります、少しはお謹みなされ」。
3. 「なに、くわい頭の分際で拙者らに意見するつもりか。若君に代わって君側の奸を成敗してくれるわ」連中の一人が抜刀したかと思うといきなり切りつけてきた。しかし酔いのため腰がふらつき、身をかわした幸民は刀を力まかせにもぎ取った。もぎとった刃の切っ先が背後から幸民を羽交い絞めにしようとした者の腹部に突き刺さり、血しぶきをあげる。一瞬に酔いが吹き飛んだ仲間、うめき声をあげる怪我人を屋敷内に担ぎこむ。邸内から駆け出た藩士が血刀をさげ呆然たる幸民を取り押さえる。

Ref. 8p80 - 82

### 第3場 江戸屋敷幽閉

1. 幸民は屋敷内に幽閉、当分屋敷内に留まらせると隆国は新婚で身ごもる幸民の妻秀子に伝えた。事件の詳細を聴取し、背後に隆徳の蘭学に対する偏見が糸をひくとみて、藩を二分する軋みを残す拙速な裁断を避けた。武張った若い藩士は死罪にと、ことなかれ主義の年寄りも喧嘩両成敗、身分の低い一般の藩士は幸民に同情の念と、藩内にはそれぞれの立場で意見が別れた。隆国は議論に耳を傾け沈静化の潮時を待つ。
2. 秀子は幸民に全幅の信頼をよせ、自分は出産のこともあるからと坪井の家で待つ。
3. 5月17日隆国裁断。怪我人に自分の懐から多額の見舞金。幸民には死罪という隆徳らの主張を罪一等減じ、江戸払いとし、行き先を書いた紙を与う。

Ref. B p82-86

## 第17幕 浦賀塾居・試練

### 第1場 浦賀塾居、長男誕生、親子三人暮らし

1. 幸民は二ヵ月半幽閉後、藩屋敷を去りその夜から本所の知人の光六左衛門を頼り、坪井家と連絡し家の始末、秀子出産を頼んだ後、1836年6月6日塾居先の浦賀に落ちつく。
2. 海路で江戸に入るとき房総半島と三浦半島の間を通るが、浦賀はその三浦半島東端にあり、幕府は海の関所として浦賀奉行をおき、番所を設置していた。塾居となった幸民が世話になる小川家は大きな廻船問屋で、浦賀番所とは港をはさんだ東浦賀の表通り、その浦の閑静な離れ座敷に案内され、挨拶と主人の言葉。書物の調達や知人との書簡の交換の便宜を図るので学問に精を出して下さいと。隆国とよほど親しい間柄の主人は、頑強な体躯、風貌から隆国と同じ志摩の出で九鬼水軍の末裔らしく見える。
3. 好きな酒は毎回夕餉に銚子がつくが、幸民は孤独感と焦燥感との葛藤の連続。西洋の学問を我が国のものにするという使命を思い、義父林宗が気にしていた『気海観瀾』の改定・増補に取り組む。同書、ボイス原著、林宗の『格物綜凡』遺稿と首っぴき。
4. 坪井信道は青地の遺族引き取り、塾生も増えたので、この年深川冬木町に引っ越し塾名も日習堂と改める(往来をはさんで大川があり、門前に楊柳一株あって目印)。そこから、秀子が9月19日暮れに男子出産の書簡。胸を撫で下ろした幸民は熊之助と命名し返書。その年の暮れ妻子と対面し、三人揃っての暮らしを始めた。天保八年元旦(1837)海岸沿いに三人で東叶神社初詣。対岸房総半島からの朝日の海。幸民回想。

Ref. B p87 - 95

### 第2場 洪庵・適塾開く

1. この頃世の中は激動の時代に入りつつあった。五年前に始まる大飢饉は人々の暮らしに影響し各地に一揆の続発、「救米」だけでなく「世直し」も要求。学問一筋の暮らしの幸民にも身近な知人の活躍ぶりも伝えられる。江戸の信道からは幸民も何度か訪れ舎密学の教えを受けた宇田川榕庵が出版の『舎密開宗』第一編送られる。
2. その翌年、塾居生活三年目の天保九年(1838)には坪井塾での学友緒方洪庵が大坂で蘭学塾の適塾を開いたと伝えられた。彼は坪井塾で学力進歩著しく塾頭となり更に信道の勧めで薬品研究の為宇田川榛斎の門に出入りしていた。1835年2月当時江戸にいた父に伴い足守に帰郷し3月24日師中天游が53歳で逝去したので4月大坂に出てその塾で蘭書を講じた。翌年には天游の子中耕介を伴い長崎に修業に立った(緒方洪庵と名を改めたのはこの頃から)。二年間の長崎修業の後、天保九年(1838)1月帰郷、3月に大坂に出て瓦町に自分の号適々斎の適塾を開いた。なおこの年7月には摂津名塩の紙漉き業出身で中天游の塾で洪庵と同門の医師億川百記の長女の八重17歳と結婚した。
3. 適塾は医業も繁盛し、塾生も次々に多数入門し手狭になり弘化二年(1852)暮れ過書町に拡大移転した(保存現存)。ここに1855年福沢諭吉(その前年不遇の中津から長崎に出ていた)が入門、1857年には塾頭となり、幸民・洪庵・諭吉のつながりが始まる。

Ref. B p95 - 98; 海溪「緒方洪庵と適塾」大阪大学出版会(1996)。

### 第4場 高野長英・秀子妹の宮子と結婚、壺社の獄

1. 江戸から天保九年12月秀子の妹宮子と、高野長英との縁談がまとまった書簡が届く。
2. 長英は幸民より六歳年上で時に35歳、奥州水沢の出身、江戸で西洋内科医吉田長淑に入門、その死後1824年長崎に赴き鳴滝塾に学びシーボルトから「ドクトル」の称号も与えられ、舎密学・生理学を学ぶ。シーボルト事件で仲間捕縛されると姿を消し、文政十三年1830江戸に帰り、医所を設け大観堂という蘭学塾の看板を掲げ、生理学の著述。共にシーボルトに学ぶ小関三英に渡辺華山を紹介され「尚齒会」に顔を出し(山手連)、政り事への関心を強め、華山は『慎機論』長英は『夢物語』を執筆。
3. 縁談は小関三英からの話で宮子と母は乗り気、年の暮れ12月下旬に婚儀が行われた。
4. 翌年1839年5月所謂「壺社の獄」が幕政を批判したとしておこり、華山は江戸北町奉行所に召喚、三英は逮捕を予期して自殺、一時身を隠した長英も奉行所に出頭。華山は故郷三河田原に塾居、長英は永牢を申し渡される。

Ref. B p98-101

## 第18幕 江戸復帰・独立

### 第1場 江戸に帰る、火事被災

1. 天保十一年(1840)の年の瀬、隆国と親しい浦賀の海防警備役に任じられていた播磨国福本藩主池田将監(しょうげん)から幸民に呼び出しがあった。「どうじゃ、元気にしておったか、何か望みがあるう」「手前の願いはお殿様の御恩に報いることで、学問に励むことしかありません」「その願い、早速、九鬼殿に伝えてつかわそう」。
2. その結果翌年正月早々五年ぶりに江戸帰参を許され、天保十年8月生まれの清二郎(清一)も含め二児の父の幸民一家は、京橋北の桶町に居を定め、新しい医所の看板を掲げ、『気海観瀾』の増補・改定に集中し、患者もぼつぼつ増えたが、夫婦の悩みは長男がひ弱で高熱を発すことで、手当ての甲斐なくこの年9月わずか六歳で亡くなった。
3. 幸民が江戸に復帰2年後64歳になった九鬼隆国は藩主の座を隆徳に譲り、二本榎の下屋敷に移った。幸民は隆国の近くに住みたいと思ひ芝の田町に家を見付けて引っ越す。隣町が高輪の大木戸で、そこを西に折れると隆国の住む別邸。まだ隆国にお目通りしてないが、舎密学の腕で西洋医薬品を調製し、蘭方医・薬種問屋に重宝がられる。
4. 弘化二年(1845)の正月24日青山で発生した火事が麻布・目黒・芝一带をなめ尽くし、二本榎の別邸も被害。幸民の住む田町にも火の手、住まい丸焼け、書きものと蔵書の一部を持ち出すのがやっとなり、家財道具・衣類・買いそろえた蔵書の大半が灰塵。幸民は坪井塾のある冬木町に近い猿江町の商家の離れに仮住まい。

(CG青山からの火災); Ref. B p102 - 108

### 第2場 薩摩藩翻訳依頼、火事再被災

1. 続いて二ヵ月もたたぬ3月27日、伝馬町で火事があり、獄舎の囚人も一時開放されたが、「蛮社の獄」で永牢を言い渡されていた高野長英は、刻限をすぎても牢に戻らず行方をくらました。幸民は義弟に当たる長英の妻宮子も身を寄せている信道の家に駆けつけた。そこでは同じ知らせを受けて駆けつけた玄朴も交え、信道との間に会話があった。それにつけて幸民も蘭学者としての自分なりの思いを深めた。
2. 月が変わり4月27日、改築を終わった下屋敷の67歳の隠居暮らしの隆国から、幸民に塾居になって以来九年ぶりにお召しがあり、藩医に復帰話し相手になってくれ等の話があった。その夏、日本橋に近い小松町に仮住まいの幸民の所に、薩摩の武士井上庄太郎が訪れ、蘭書の翻訳を頼むという薩摩藩との最初の知遇を得た。
3. その年11月、本所菊川町に三田藩中屋敷が完成、隆国が移ったので幸民も小舟町に本格的に居を構え、医所の看板を掲げ、朝起きると隆国のもとに出仕し帰宅すると患者を診た。夜は『気海観瀾』の増補改定や、蒸気機関など西洋文明利の原理・構造の訳述を長英の脱獄をきっかけに急ぎ、忙しながら充実した日々を送っていた。
4. 弘化三年(1846)正月15日日本郷辺りの失火から290余町を焼き尽くす大火があり、幸民一家は又もや身一つで焼け出された。二年続けての被災で夫妻の落胆は大きかったが、今回は名声も上がっていたので、『火事見舞到来物覚』の現存書面には、数々の蘭学者、三田藩、薩摩藩その他延べ71人の人名と見舞い品が列挙されている。住まいもすぐ世話されて、八丁堀代官屋敷に近い茅場町に居を構えた。

(CG本郷からの火災); Ref. B p108 - 116

### 第3場 隆国不調、隆徳反感

1. 跡継ぎ藩主の隆徳の態度は形式的で、その後も事ある毎に幸民への反感を露骨にする。弘化四年69歳の隆国が不調を訴えたとき、主治医の幸民を全く無視し、漢方医の指示として湯治をすすめる、蘭方医学の制禁の声も公儀で高まっているとして、その言うことは一切採らぬ所存との言。隆国の譲位が遅く幸民への過大の温情への嫉妬。
2. 幸民は人の気を見るに鈍、自分から働きかける人間ではない(太鼓のように強く叩くと大きく応えるが)。藩主から嫌われ、いずれ藩から追われる時が来るかも知れぬと思いつつ、幸民の性格では、どうしようもなかった。

Ref. B p116 - 118

## 第 19 幕 島津斉彬の知遇

### 第 1 場 斉彬と対面、長英消息

1. 嘉永元年(1848)、幸民 39 歳の春、薩摩藩の井上庄太郎から島津斉彬との会見を求められた。堅苦しいことの苦手の幸民は何度も辞退したが、粘り強く説得されお目通り。  
斉彬は藩主斉興が側室の子久光を愛し藩主の座を譲らぬので、40 歳になってもまだ部屋住の身だったが、賢名天下に聞こえ、当時の名君とも親交、新風を吹かせる。
2. 斉彬と幸民の対面と会話。単刀直入な斉彬の何が肝要かとの問い掛け。「国力・知力を蓄えて、どこが相手でも負けぬ自信を育てることが肝要と思い、蘭学をやる者の使命はその事と心得ております」との幸民の答え。「その通りじゃ。薩摩は西洋に負けない殖産興業をなそうと思う。異国の影への脅えを一掃のためじゃ。そのため先生の力を貸して頂きたい」と斉彬は話し、幸民は訳述を終えた蒸気機関や写真術の説明。
3. 高野長英の消息もさりげなく斉彬は漏らしてくれた。幸民は未刊行の『遠西奇器述』の写本を捧げる腹づもりで薩摩藩邸を辞し、宮子に長英の無事を伝えるため冬木町の坪井の家に向かった。

NA (『遠西奇器述』) Ref. B p119-122

### 第 2 場 信道重体・死没、蘭学禁制の令

1. 当時幸民はなんとしても守りたい二人の病人(隆国と信道)をかかえていた。
2. 師で義兄の信道はもともと体が丈夫でない上、若いとき、貧しく苦勞し、桑と結婚したので義父青地林宗の死後には青地の全員を引き取り面倒を見た。これら積年の疲れで病床に伏し、弟子の義弟伊東玄晁と幸民が治療にあたるものの、診立ては違った。
3. 幸民はなんとか寿命を延ばそうと、大坂の洪庵にも詳しく病状を知らせ「何力良方モ御座候八八相伺度書候」の書簡も現存している。玄晁も洪庵宛の書簡で、適塾に入門中の信道の養子信良に一刻も早く江戸にもどり、養父を看護するように求めた。
4. しかしその効なく、嘉永元年(1848)11月8日信道は54年の生涯を閉じた。その弟子は二千数百人にのぼり、その近郊近在の者、江戸表で藩医をつとめた長州藩の武士に江戸在住の殆ど全ての蘭方医らに盛大に見送られ浅草誓願寺に葬られた。
5. 信道が亡くなった翌年2月15日(1849)、公儀から「蘭学御制禁の令」が出され、幕府お抱え医師に、外科・内科を除き蘭方医術が禁止された。蘭学の歴史は時代の逆風とのせめぎあいであった。蘭方医学の優秀性が世間に認識されてくると、それまで幕府の医学館を牛耳ってきた漢方医学の多岐家が危機感を深め、蘭方医学書については1844年から特別に医学館で検閲となり、緒方洪庵の『病学通論』も意識的に出版を遅らせる妨害をし、それは信道らの抗議を受けて1845年天文方検閲の旧制度に戻ったが、それから4年しかたっていないのに「制禁の令」が出、蘭書検閲も遅滞となった。
6. これは幸民に反感をもつ藩主隆徳を喜ばせ、父隆国の時代から学問で仕え西洋兵学の翻訳・建議もしていた白洲退蔵の意見を一蹴した。隆徳の言動は斉彬の耳にも入り、薩摩藩に幸民を引き取る機会とみて、隆徳にも持ちかけ、幸民の説得にもかかった。しかし『遠西奇器述』発刊についての隆国の意見にも従うこととした。

Ref. B p122 - 130

### 第 3 場 長英妻宮子歿・長英現れ墓参。

1. 嘉永二年(1849)4月7日高野長英の妻宮子が32年の薄幸の生涯を終え、父や妹信子の眠る青地家の菩提寺、浅草曹源寺に葬られた。宮子が長英と暮らせたのは天保九年の師走から5月までの半年足らずであったが、長英を思い、待ち続けたのである。
2. それから4カ月ほどたった夜、幸民の家に「儂じゃ、タカの字じゃ」のささやく声で顔を薬で焼いて癩痕のある高野長英が現れ、宮子を慕い、宮子と過ごした江戸で生き抜きたいとの言葉。秀子と11歳の清一も起き涙し、畏敬の眼差し。「これからどうする積りじゃ」に「医師の触れ込みで訳述に精を出すつもり」と。翌日清一の案内で宮子の墓参り。
3. 一カ月程後青山百人町裏通りで沢三伯の名で隠れ住む。

Ref. B p130 - 133

## 第20幕 マッチ試作・著作

### 第1場 マッチ試作・日本とマッチ。

1. 幸民は金融業を営む金持ちの患者の家を往診し、診立ての終わった後、好きな酒を振る舞われ、異国の珍しい話とせがまれ、「西洋にホスホルストックという摺付木(擦火口ホクチ)ともいう火をつける道具がある」と話した。相手は興味を示し「実物を手にしたい。先生に作れたら五十両進呈しましょう」と言う。長英をかくまう暮らしを守るのにその謝礼にも魅力を感じ、幸民は「僕がきつと作りましょう」と約束。
2. 幸民は既に自筆で訳述の『祐軒随筆一』(廣用文庫 1847年)の(ム)、(フ)、(キ)の項にその製造方があるので、燐素、硝石、過酸化マンガン、アラビアゴム等を用い試作した。
3. 完成したマッチを持ち金融業者の家に行き、目の前で試してみせた。すると相手の男は、あれはその場の冗談であったと逃げをうって払おうとしない。幸民は怒り、知り合いに話すと、噂が金融業者間に広まり、相手は兜を脱ぎ、五十両を払った。
4. 我が国では、宇田川榕庵の『舎密開宗』に塩素酸カリによる付木の記載があり(125章)またリン付木も少し記載しているが(130章)、讃岐高松藩の久米通賢(みちたか)による天保11年(1840)の『佩弾銘』に、雷酸銀(ドンドロ)による付木に関する記載があり、それを裏付ける『生歴木(ステレキ)諸品之控』の実験の日誌も、坂出市の鎌田共済会郷土博物館に所蔵されている。それにはステレキ(硝酸)製造、ドンドロ(雷酸銀・雷酸水銀)製造そしてドンドロ付木製造が、天保十年2月から7月にわたり日付入りで詳述されている。

NA(『祐軒随筆』、『佩弾銘』、『生歴木(ステレキ)諸品之控』)

Ref. B p134 - 137; E p26 - 39, 実験 p93-94.

### 第2場 著作完成・出版

1. 幸民はマッチ事件の頃から、今までの研究成果を世に出していく。まづ浦賀塾居の頃から15年もの間、苦心を重ねてきた『氣海観瀾広義』の原稿を完成させた。これは二度の火災の際にも、いつもいの一冊に持ち出していた、こつこつと学問に励んだ義父青地林宗の著書を詳細に検討し、広範に増補したものである。早速発刊に取りかかったが、まづ出版許可を得るのがひと苦労だった。まづ出版元から奉行所に願い出、天文方の検閲を経ねばならず、仕事が遅く、幸民の不得手なうらさい交渉事があった。
2. 大坂の緒方洪庵から依頼された、医師の倫理にまでおよぶ内容の蘭方医学の書『扶氏経験遺訓』の出版は、幕府の地位にあぐらをかく多紀家には耳が痛く、なかなか許可がおりず、幸民が憤慨を綴った洪庵宛の書簡も残っている。
3. その大坂では洪庵が、嘉永二年(1849)7月初めパタビア(現在のインドネシアのパタビヤ)の港から長崎のオランダ商館医モーニケのところへ届いた牛痘苗を京都に赴いて分苗を依頼し、同年の11月7日には大坂古手町(現在の中央区通修町五丁目)の種痘所において分苗式を行い、1796年英国のジェンナーが発見した牛痘種痘法が始められた。この種痘所は大坂除痘館と称し、仁術を旨とする精神で、その事業は苦難の数年を過ごすものの普及し発展し、安政五年(1858)4月24日全国に先駆けて官許も得た(江戸の種痘所設立は安政五年5月、官許は万延元年(1860)。

Ref. B p137 - 139; (c) [図録「緒方洪庵と適塾」適塾記念会(1980);

(d) [海溪「緒方洪庵と適塾」大阪大学出版会(1996)]

### 第3場 高野長英の死

1. 幸民が本来不得手な出版の交渉事がかかえて右往左往していた時期に、何度も隠れ家を変えるよう勧めてきた高野長英が働きざかりの42歳で死んだ。
2. 長英はシーボルト事件や壺社の獄などの修羅場をくり肝がすわったのか、幸民の提案をしりぞけ「いや、この面相じゃ、岡っ引きにわかるはずがない。僕は今の閑静が気に入っている。もうどこへも移らぬ。そうだったらそれでよい」と言っていた。
3. 顔面が焼けただれた浪人が潜むことを知り、不審をもった探索方が、それが長英と知らず11月1日未明踏み込んだ。寝入りを襲われた長英は抵抗不可能と知り、「くそ！ 僕も行くぞ」と叫び、枕元の脇差で喉笛を掻き切り、血しぶきを吹き上げ、果てた。

Ref. B p139 - 140

## 第21幕 写真実験・諭吉適塾

### 第1場 幸民と銀板写真。

1. 幸民自筆の『祐軒随筆一』(廣用文庫1847年)の(ミ)の項に、「コロマテーベ」として硫酸銅溶液に浸した紙と硝酸銀による新写影鏡の記載がある。銀板上にヨウ素の蒸気でヨウ化銀の被膜をつくり被写体の画像をうる、1837年フランスのダゲール発明の銀板写真法(ダゲレオタイプ)は、我が国にオランダから初め長崎の御用商人時計師の上野俊之丞が導入し、薩摩藩に献上したといわれている。薩摩藩島津斉彬の知遇も得ていた幸民はその要請もあり自らこの方法を実験研究し、嘉永五年(1851)5月に成功した。このことは江戸木挽町の幸民から越後柏崎の旧弟子森田正治宛の8月20日付手紙の「春來ポトガラヒーと申写真図製作に刻苦いたし五月來漸出来上り大楽に御座候」で判る。
2. 幸民の薩摩藩での朝夕の講習余話を収録し、門生田中綱紀編で安政元年(1854)刊行の『遠西奇器述』には、「直写影鏡八数年前吾力師既ニコレヲ実験シ」とあり、そして直写影鏡ダゲウロテービーについては、器具の図と共に、第一法から第五法とその手法手順が詳細に記載されており、日本最初の写真書とされるものとなっている。
3. 写真機のレンズは坪井塾同門で、蛮書和解御用に仕出の杉田成卿を通じ天文方から入手、得意の薬品作りでは、ヨウ素は海草類を煮詰め、水銀は辰砂を焼いて作り、被写体には蘭学者の妻として嬉々として承諾した妻の秀子を選んだと考えられる。なおこの年11月には念願の『気海観瀾広義』の第一冊の理学一般の総論が発刊された。

Ref. B p128 - 129, 143 - 147; F p11, 134 - 136; 川本裕司・中谷一正「川本幸民伝」(1971)p136.  
NA(『祐軒随筆』、『遠西奇器述』)

### 第2場 幸民と湿式写真。

1. 1851年、英国彫刻家アーチャがコロジオン塗布のガラス板を硝酸銀溶液に侵し感光板とする露出時間が短く画像は美しい写真法を発明、湿っているうちに使用せねばならぬので湿式法とよばれた。これも我が国に安政四年(1857)長崎に開設の医学伝習所のポンペを通じて広まった。また万延元年(1860)咸臨丸で訪米し帰国した通商条約批准使節団の持ち帰った土産物に、随員が撮してもらった湿式写真があった。
2. 写真に興味を持つ幸民は、よく磨いた板状の物の上に感光性のあるヨウ化銀のような膜を作ればよいと考え、アルコール・硫酸・アンモニア・エーテル・カドミウムなどで溶液を作り、それを磨きあげたガラス板に塗布し、硝酸銀で処理しこれを作り、撮影に成功している。その証拠に、坊主頭の幸民自身とちよっぴり気取った秀子夫人を写した二葉の写真が、現在、日本学士院に桐箱に入れ、保管されている。その蓋の内面にはそれぞれ、1861年にあたる文久元年辛酉写行年五十二才之像、文久元年辛酉四十七才の記載がある。
3. 西の彦馬と東の蓮杖といわれ、我が国写真師の祖とされている上野彦馬(1838 - 1904)は13歳で父上野俊之丞を亡くし、長崎でポンペに医学・化学を学び、湿式写真も習得した。江戸続いて藤堂公に従い津に移り1862年『舎密局必携』を刊行、その年長崎に帰り「上野撮影局」を開く。他方伊豆下田の絵師の下岡蓮杖(1823 - 1914)は来航した米人から写真術を学び、やはり文久二年(1862)に横浜に写真館を開業したのである。

Ref. B p207 - 208; F p134-144 川本裕司・中谷一正「川本幸民伝」(1971)p136.  
NA(日本学士院所蔵「川本夫妻写真像」)

### 第3場 福沢諭吉・適塾入門。

1. 大坂で生れ間もなく父を亡くした(15幕2場)福沢諭吉は、中津で幼少時代を過ごしたが1854年兄の勧めで蘭学を志し先ず長崎に、ついで翌年数え22歳のとき大坂で洪魔の適塾に入門した。そこでは蘭日辞典『ズーフ・ハルマ』写本も奪い合い勉学に励んだ。
2. なお安政四年(1857)の頃、塩酸製造、また礬砂(どうしゃ、塩化アンモニウム)の製造の野心も起しアンモニアを馬爪を蒸し焼きにして作るのに、臭気を嫌われ、淀川(現市内の大川)を船を上下して実験した様子とその福翁自伝に興味深く記されている。
3. 1857年塾頭にもなったが、翌年藩の命令で江戸に出て、築地鉄砲洲の奥平家中屋敷のなかで蘭学塾を開いた。

NA(『ズーフ・ハルマ』と適塾); Ref. H p21-82.

## 第 22 幕 薩摩事情・藩主変遷

### 第 1 場 薩摩藩事情・董担と幸民

1. 本邦西南の外様雄藩 77 万石の薩摩藩はその 25 代藩主・島津重豪(しげひで)(1745 - 1833)は 11 歳で藩主となったが傑物で開明的、中国語・オランダ語を学び、シーボルトを江戸参府中に訪ね、長崎出島に出入りするなどヨーロッパ文明への関心も高く、藩校造士館・医学院等を次々に設立、明時館(天文館)も安永七年(1778)に開き、薩摩暦を作らせた。43 歳で家督を長男斉宣(なりのお)に譲るが、孫の斉興(なりおき)の代になっても藩の実権を握り続けた。累積債務も膨らませたが調所広郷(ずしよひろさと)を登用して改革を図った。その晩年に寵愛したのが曾孫で、後に 28 代藩主となる島津斉彬(1809 - 1858)である。
2. 27 代斉興は、正嫡で嗣子の斉彬を推す派と庶子の久光擁立を推す派の対立をつくり、藩の危機を招き久光に座を譲る機をうかがい続けたが、海外の形勢も達観、識見遠大の人物として斉彬を評価する老中阿部正弘や開明的諸大名の正論の前に抗しきれず、還暦を迎えた嘉永四年(1851)4 月、既に 42 歳になっていた斉彬が 28 代藩主となった。
3. かねてから薩摩藩屋敷で知遇をえていた川本幸民が藩主就任の祝いを述べると、これから抱負を話し始めた。「余はまず国元で西洋に負けない最新の産業を興すつもりじゃ。海防のため公儀に大型船の建造を建議するが、許しを得て国元でもとりかかる。そのため急いで精練所を造らねばならない。冶金や綿火薬・樟腦・耐火煉瓦・ガラスなども製造したい」。幸民は身を乗り出し斉彬の顔にじっと目を据えて聞いた。「それも急を要する。近いうちに西洋列強のいずれかが開国を迫ってくるじゃろう。どこかは分からぬが、あれらのやり口は決まっておる。相手に国力あれば友好関係を樹立し、ないと分かれば、印度がやられたようにひと飲みじゃ。じゃから先生にも今まで以上に手を貸してほしい」。このとき二人の関係は藩の大小を越え、同志となった。

Ref. B p140 - 142

### 第 2 場 鹿児島での諸事業

1. 前幕 1 場の様に幸民は銀板写真を実現し、さらに鹿児島では斉彬が次々に、幸民の薩摩藩での朝夕の講習余話(主としてオラダ人ファン・デル・ベルグ氏の理学原始に基く)収録の付図付きで蒸気機ストームウェキトイグ・気圧蒸気機アトモス・ヘリス・ストームウェルキトイグ・蒸気船ストームシキップ・傳信機テレグラフ等を記載の『遠西奇器述』にもよって、それらを実現して行った。
2. 鹿児島市北郊の磯海水浴場近くに、藩主になった斉彬は即座に集成館事業を始め、理化学研究目的には、城内動植物館内御花園・開物館で種々の研究を行い、御本丸と探勝園御茶屋の間では電信器実験もした。東洋初めての工業団地ともいべき集成館では、大砲鑄造のための反射炉と溶鋸炉の他、鉄工所・蒸気金物細工所・ガラス工場・鍋釜製造所などを備えていた。新型帆船の建造にも取り組み、嘉永七年には後に幕府に献上される軍艦「昇平丸」を、その翌年には「雲行丸」を完成させた。

NA(「集成館始図」鶉細娘戎)、Ref. Bp146, 148 - 149

### 第 3 場 三田藩事情。

1. 嘉永四年も押し詰まった 12 月 16 日、三田藩では 52 歳になる九鬼隆徳が隠居し、嗣子の精隆が 12 代藩主の座に就いた。中屋敷に出向いた幸民に隆国は顔をほころばせて言った。「その方に期待をかけた余への面当てのように隆徳は蘭学を嫌い、その方につらく当たりおった。しかし、今度藩主の座に就いた精隆は 28 とまだ若い。それほど頑迷固陋でもあるまい。これで藩内の空気も少しは風通しがよくなることじゃろう。
2. しかし翌年嘉永五年(1852)10 月半ば、73 歳になり体力的に衰えをみせていた南嶽と号した九鬼隆国は病床に伏し、幸民は本所菊川町の中屋敷に泊り込みで看病したが、12 月 25 日隆国は幸民に脈を取られ、苦しむことなく、この世を去った。
3. 幸民は淋しく気力もなく、仏門に入るとの思いに取り憑かれた。それに斉彬の怒りをこめた言葉が活をいれ正気に返らせ、その依頼による訳業にもどり、44 歳の幸民は嘉永六年(1853)を迎えた。

Ref. Bp147 - 148, 150 - 153

## 第23幕 黒船来航・ビール試醸

### 第1場 黒船来航

- 1・嘉永六年(1853)6月3日(太陽暦7月3日)正午過ぎ、黒船四隻が出漁中の漁師達を驚かせながら伊豆沖を通過し、相模湾を横切り、浦賀水道に侵入し、午後五時頃、旗艦サスケエハナ号とミシシッピ号の二隻の蒸気船が、帆船サラトガ号等二隻も従えて浦賀の沖に碇(いかり)をおろした。これが我が国を揺るがしたペリー来航であるが、一カ月半前那覇に来航、首里王城入城も強行した。この情報は薩摩藩島津斉彬の嘉永六年5月1日付同藩江戸屋敷宛書簡で「黒船来航の場合は江戸屋敷の女・子供などは渋谷へ順々に移動せよ」など具体的指示と共に知らされ、老中首座・阿部正弘(35)にも伝えるように記された。
- 2・驚き慌てた浦賀奉行は長崎回航を要求したが拒否された。大統領フィルモアから將軍宛の国書を差し出したが、これも権限ないと受領を拒否した。しかし翌朝江戸湾に深く侵入し測量・全速力航行、空砲発射の示威活動もされ、とうとう国書受領を余儀なくされ、6月9日ペリーは水兵・海兵隊・軍楽隊等300人を率い久里浜に上陸、二本の白旗と使い方を記した「添え書」で降伏も促す威嚇もし、国書を浦賀奉行に手渡した。
- 3・これらの交渉では、通訳として堀達之助[吉村昭『黒船』中公文庫参照]が、浦賀と力・中島三郎助と共に活躍をした。彼はその後も多忙な日々を送り、本邦初の本格的英和辞典の『英和对訳袖珍辞書』を完成させた。他方長崎には7月13日、軍艦4隻を率いてロシアの使節ブチャーチンが来航、開国の国書を手渡す。翌年1月ペリーは返書を受け取りに七隻の艦隊(旗艦ポーハタン号)を率いて江戸湾に再来、2月横浜に上陸、複数開港を求める条約草案を示し締結を迫り、3月3日(太陽暦1854年3月31日)に日米和親条約(神奈川条約)が調印され、下田即時開港、函館早期開港を確認した。通詞は森山栄之助(35)。

Ref. B p155 - 156; 166 - 168

### 第2場 知見西洋技術

- 1・開国と攘夷と世の中が分かれるなか、斉彬は今まで諸藩に厳しく達していた「大船建造の禁」をとかせ、建造にかかるなど八面六臂の働きを始めた。
- 2・幸民は西洋の科学技術の水準には自分たちも努力すれば追いつくことができるのだ、黒船なににするものぞと考え行動を起こした。既に数年前に薩摩藩での講話を収録した『遠西奇器述』は脱稿し、斉彬にはその写本を献呈、薩摩ではそれに記載の蒸気機関や電信機を作る工場建設も始めていた。世に出すのには隆国の指図を待っていたが、必要性が高まった安政元年(1854)11月に公刊された。それで幸民のもとには技術的問い合わせが頻繁に届き、それに答える書簡をひっきりなしに薩摩に送った。また斉彬の要請で白砂糖・塩の製造、地雷・水雷・鉾山の爆破法の訳述にも追われた。
- 3・なお日米和親条約の際の米国からの献上品には、本当に石炭で走らせたミニチュアの蒸気車一式[神奈川県立博物館に1/5復元模型]、電信機のほか数々の先進文明の物品があった。

Ref. B p156 - 159

### 第3場 ビール試醸

- 1・1854年再来のペリー一行は林大学頭以下日本側の全権をポーハタン号に招き、船上で歓迎パーティーを開いた。その席には外国の酒、ビールも出され、それに酔う者もいた。
- 2・出席した幕臣から、薩摩屋敷でそれを聞いた幸民は、自分の手でその酒を作ろうと、ペリーが去って一カ月後、茅場町自宅の庭に炉を築き、妻秀子、15歳になる息子清一の手伝いで、ビール作りに着手。主役の大麦、発酵用糖類を増やす馬鈴薯、醸造に適す水を調達、酒酵母は酒醸造元からもらい、蘭書記載のホップは同種のカラハナソウで代用した。まず麦芽を作り、それと水を混ぜて煮沸濾過、もろみ粕を作り、別の釜で馬鈴薯と麦芽と一緒に煮沸したものに混ぜる。できた麦汁にカラハナソウの毬花に含まれる黄色い粉を混ぜ煮沸、糟(かす)を濾過冷却、酵母を加え約8日間発酵。涼しい場所で熟成、麦汁は琥珀色、湯飲み茶碗に注ぐと細かい泡を浮かせた。味見をし確認もした。
- 3・義父青地林宗の眠る浅草曹源寺で、坪井信道未亡人糸、その妹道子と婿玄晃など身寄りに、伊藤玄朴、杉田成卿など呼べる限りの蘭学者も招き試飲会。秀子は喜び奮闘す。ビール製造法は『化学新書』(後述)の488-491章に詳説あり。

Ref. B p159-165

## 第24幕 蕃書調所・薩摩藩籍

### 第1場 斉彬江戸へ・西郷対面

- 1・斉彬は日米親条約が結ばれた三日後に江戸の薩摩藩邸に入り、幸民も呼ばれた。
- 2・「余が駆けつけても何ができる。老中の阿部伊勢守がやる以上のことはできまい。阿部は攘夷派の標的にされるだろう。暴れ馬が次々に現れるが何としても今の状態で攘夷は避けねばならぬ。鍵は水戸の徳川斉昭公、その存在感と懐刀藤田東湖のもつ影響力は、水戸を攘夷派の総本山と化す危険がある。策はある。一橋家を継いだ斉昭公の実子慶喜を次の將軍にかつごう。そうすれば斉昭公を幕政改革の方向にひきつけ、攘夷からそらすことができるし、英邁と噂高い慶喜の下でなら雄藩も一致して国力の増強に励めるじゃろう。しかし、この事はまだ秘中の秘じゃ。」
- 3・「ところがこれから育てたい、先生に引き合わせたい者がある。名は西郷隆盛という」このとき隆盛は26歳であり、ともに太鼓に例えられた幸民と隆盛が対面挨拶した。バチの役割を果たさねばならぬ斉彬は、楽しそうに二人を眺めているだけだった。その沈黙の中でそれぞれが三人三様のことを思った。そんな二人の表情を眺めながら斉彬は「これでよい、一方は我が国近代化の頭脳、もう一方は国の政りごとを変える周旋役。いずれも余の掛け替えのない片腕じゃ。余は存分に働く」とほくそ笑んだ。

Ref. B p169 - 172

### 第2場 幸民門下に橋本左内・蕃書調所開設

- 1・刊行された『遠西奇器述』の評判は幸民を忙しくし、入門を求める若者が来るようになった。5月初旬21歳になったばかりの越前松平藩士橋本左内が、すでに適塾に学び緒方洪庵の紹介状を携えて門を叩いた。左内は藩の近代化のため舎密学をものにしたいと目的を持っていたので、気に入りに、真剣に仕込み、林宗と自分の昔を偲んだ。
- 2・左内が幸民のもとにいたのは此の5月から7月中旬までと、再出府した翌年の安政二年11月から三年の6月にかけての合わせて1年に満たない短い期間にすぎなかったが、帰藩後、藩の明道館で蘭学科掛を務め、その後松平春嶽の片腕として国事に奔走し、数年後には安政の大獄で悲劇的な最期をとげたが、幸民の忘れ得ない弟子である。
- 3・安政二年(1855)12月幕府は浅草蔵前の天文方の蕃書和解御用を独立させ、九段坂下に洋学所を設けたが、それは翌年2月蕃書調所と改称され本格的に始動し、この御用役を命じられた勝海舟らにより江戸在住の蘭学者名簿も作成された。教授には蕃書和解御用の時代から翻訳官として出仕していた箕作阮甫(58)・杉田成卿(40)、教授手伝いには、47歳の幸民をはじめ、薩摩藩士で斉彬から頼まれ幸民が蘭学の手ほどきをした松木弘安(後の寺島宗則、外務卿として千島樺太交換条約・日刊修好条約に活躍)、長州出身で最初適塾に学び江戸に出たとき洪庵の紹介状をもって幸民の門を叩いた門下生の東条英庵ほか数名であった。
- 4・安政四年(1857)正月には幕臣の子弟191名の入学を許可して、開講式をあげ、洋学の教授をはじめた。そして翌年からは諸藩士の入学もゆるされた。

Ref. B p172 - 175

### 第3場 幸民・薩摩藩籍に

- 1・幸民は蕃書調所に着任早々、その実力で中心的存在となり、舎密学の教科書として利用できるものの翻訳にも精励し、翌年『兵家須読舎密真源』を完成させた。
- 2・幸民は幕府の学問所で教えることとなり、四年前(1852)10代藩主隆国が没してから、藩で役目もなく、前藩主隆徳時代の浪費と早魃で藩財政が逼迫、住民に人頭税賦課にも反対して手を付けてない四年分俸禄を藩に届け出、何度も申し入りのあった薩摩藩に移り三田藩を去る決意を固め、喜んだ斉彬は江戸城内で当時の三田藩主九鬼精隆に交渉した。精隆は今迄に幸民に辛い目を遭わせたことを詫び、それを承諾した。「許してくれ、気の向くときいつでも郷里三田に帰ってこい。その時は天下の名士川本幸民を歓迎する」との殿様の言葉に、心残りなく、48歳の幸民は安政四年(1857)5月晴れて薩摩藩籍に入り江戸詰奥医師となり、頭髪も慣例で切った。

Ref. B p176 - 179

## 第25幕 転居・安政の大獄

### 第1場 木挽町に転居

- 1・幸民は九段下の蕃書調所と薩摩屋敷のほぼ中間地点で、適当な広さの家を探し、西本願寺のある築地の西側の木挽町に手頃な家を見つけ、安政四年2月には転居した。
- 2・毎朝早く自宅から鍛冶橋御門に出、堀端を右回りに一橋御門まで歩き、それから北に折れ蕃書調所に通り、外国の書物・文書の翻訳したり、真剣に生徒たちを教え、きびしく叱り、頭取には生徒の枠を広げること、窮理学や舎密学の必要性を力説した。
- 3・斉彬とは薩摩藩籍となつてすぐ公式にお目見えしたが、この後すぐ帰藩した(翌年安政五年夏国元で急死したのでこれが二人の面談の最後となった)。藩主が留守かどうかに関係なく、幸民は薩摩下屋敷にも小まめに出仕した。生産の技術面の相談、急を要する翻訳依頼がいつ何時あるかもしれない。安政四年8月薩摩藩からは、新たに興した工場が生産を開始し、それらを総括して集成館と称したこと、電信機実験も成功した知らせがあった。
- 4・斉彬の命をうけ水戸や福井などの諸藩との周旋に奔走している西郷吉之介をはじめ、留守邸をあずかる藩士たちは喜び沸き、酒盛りを始めた。幸民が訳述した新しい製法が現実に稼働しはじめたことに酒好きの幸民も嬉しく、浴びるほど飲み、帰り道赤坂あたりで転び怪我をした。幸民の次の狂詩が残る。孟浩然の『春暁』をもじって「幸民赤坂を覚えず、処々手傷を負う、夜来風雨の声、名落ちること知る多少」。

Ref. B p180 - 185

### 第2場 蕃書詞所充実・火事被災

- 1・幸民は安政四年(1857)11月蕃書調所教授職並に昇進したが、その頃、教授手伝いにかけて洪庵の適塾で塾頭も務めた長州出身宇和島藩籍の村田蔵六(良庵、後の大村益次郎)、やはり適塾に学んだ坪井信道の養子の坪井信良が、年末には教授手伝い並に木村軍太郎・津田信一郎も登用されるなど、教授陣が強化され、また生徒の枠も安政五年5月には、それまで又者(またもの)と呼んで排除してきた各藩の藩士にも受講資格が与えられた。
- 2・仕事の合間に適塾卒業生は大坂の思い出、洪庵の様子に話の花を咲かせた。洪庵が幸民を大袈裟に吹聴したらしく、彼らは幸民を敬い、何事も相談にきた。特に村田蔵六は無口だったが、窮理学や舎密学に関してあれこれ質問し、親しげに語りかけた。
- 3・ところが安政五年2月10日、日本橋界隈の失火でおこった火事が翌日になつても鎮火せず、南へ東海道を道中するように広がり芝高輪まで焼き尽くし、火の通路の幸民の木挽町も災禍に襲われた(幸民としては3度目)。この時の火事見舞いの名簿が現存し、それには多数の中に、三田藩関連もあり在藩中のとげとげしい関係修復もうかがわれる。

Ref. B p185 - 188

### 第3場 安政の大獄

- 1・この頃の世の中の動きを見ると、安政四年(1857)6月に4年前の黒船来航以来、先頭になり難局に向かい幕政改革を進めていた老中阿部正弘が39歳の若さで急死し、次期将軍に一橋慶慶喜を擁立する開明的大名の斉彬や松平春嶽に大きな打撃を与えた。
- 2・その後同年10月アメリカ総領事ハリスが将軍に謁し、日米通商条約締結を要求、明けて安政五年正月幕府は堀田正睦が上京し条約勅許を奏請したが、三月朝廷はこれを却下し、4月に大老に次期将軍に紀州藩主の長男慶福(後の14代将軍家茂)を推す譜代大名を中心とする幕閣主流の井伊直弼(44)が就任し、その腹心は長野主膳(44)だった。
- 3・国元の斉彬は危機を感じ、橋本左内とも天下の情勢につき意見を交わして西郷を呼び戻す。斉彬指示で西郷は朝廷工作に京に上るが、7月斉彬(50)が突然発病し逝去(西郷殉死を月照が止め、その後活動)。ペリー来航で幕開けした幕末史が正弘・斉彬から直弼に移る。
- 4・直弼は紀州の家茂を次の将軍に決め、独断的に日米通商条約調印等独裁の道を走る。斉彬の死を待ったかのように慶喜擁立派の越前・水戸・尾張の藩主に謹慎を命ず。
- 5・その後も長野主膳作成の名簿により、10月越前江戸屋敷に乗り込み橋本左内宅搜索をはじめ、海田雲浜・吉田松陰・頼三樹三郎等の逮捕、一橋派の謹慎・処罰と翌年安政六年(1859)に続く、安政の大獄が始まる。

Ref. B p189 - 193

## 第26幕 江戸へ諭吉・桜田門外の変

### 第1場 幸民と諭吉の出会い

1. 幸民は安政六年(1859)4月、蕃書調所教授に昇進し事実上の頭になり、木挽町のその自宅には各藩の蘭学者が引きも切らず押しかけるようになった。
2. 豊前中津藩の福沢諭吉は、大坂の適塾で学び塾頭もし、大川でのアンモニア製造の実験の試みもあったが、藩の要請で前年(1858)25歳の時に江戸に出ることとなる。江戸屋敷の蘭学好きの上士族、岡本彦三が藩邸に蘭学塾を開きたいと、前に薩摩藩の松木弘安(後の寺島宗則)、杉享二も雇ったが、教師とし藩の諭吉に目をつけたのである。
3. 諭吉はまず中津に帰って(コレラ流行中)母に別れを告げ、希望によって適塾にいた広島出身の岡本周吉(古川節蔵)、それに原田磊蔵(らいぞう)の三人の道中で、10月下旬徒歩で江戸に着き、まず木挽町夕留の中津藩奥平屋敷に行くが、鉄砲洲に中屋敷の長屋を貸すとのことで、諭吉と岡本周吉はここに住みこみ、兩人自炊の所帯を持ち、塾を始めた。
4. 諭吉が江戸に来た翌年の安政六年には五カ国条約が発布され、神奈川、長崎、箱館3港を開き露・英・仏・蘭・米に貿易を許した。そこで諭吉は横浜に見物に行き蘭語でなく英語の必要性を深く感じ、英蘭会話書を買ひ、辞書も見たく蕃書調所も訪れたが持帰れぬので、横浜に行く商人からホルトロップ英蘭対訳辞書を藩に頼み求め、独学する。
5. 幸民のもとにも諭吉は訪れたが、同じ適塾の塾頭経験者の村田蔵六とは対照的な能弁の人物で、最初は翻訳の問題等を尋ねたが、それが一段落すると攘夷を唱える者を誹り、これからは蘭語ではだめで英語が必要と大きな声で語り、それに同意しなかった村田蔵六を貶したりした。幸民は実は自分たち親子も始めていると答えた。

Ref. B p193 - 194; H 福翁自伝 p83 - 92

### 第2場 幸民周辺・諭吉渡米

1. 安政五年7月島津斉彬急死後、まだ幼い忠義が藩主となり、その父久光が国父として実権を握り、斉彬時代の閣僚全てを退け、工場の機能も殆ど停止させ、幸民への翻訳依頼も無くなり、斉彬計画の学問所を作り、幸民の手はどきをうけた松木弘安を頭とする夢もついていたが、幸民は自主的に『蒸気船説』『爪哇兵備説』を記述した。
2. 前年から下獄の26歳の橋本左内を安政六年10月斬首。その事を知った幸民は自宅に適塾出身の教授仲間、東条英庵・村田蔵六・坪井信良などを招き、左内の思い出を語り洪庵も思い、流罪の西郷吉之介も思う。「幕府もやがて滅びる」と村田蔵六の言葉。
3. 安政六年8月下旬三田藩では12代藩主精隆が亡くなり、12月23日23歳と若い隆義が第13代藩主となり、早速兵制を西洋流に改革、藩校では蘭学を教科としたと聞く。
4. 安政六年冬(1859)幕府が日米通商条約の批准交換のためアメリカ軍艦ポーハタン号に正使新見豊前守を乗せ、軍艦咸臨丸もこの護衛、実は航海練習のため艦長は軍艦奉行木村撰津守(31)、指揮官は勝麟太郎(38)で渡米となった。諭吉(27)は幕府の蘭学医桂川の紹介で木村の家に行き、お供して渡米したいと願い出た。これが許され万延元年(1860)1月13日品川を出航し浦賀に泊り、1月19日太平洋横断に出港、嵐にも遭ったが2月25日サンフランシスコに到着。諭吉は米国での歓迎に迎えられ、その風俗の数々、女尊男卑にも驚き、通弁の中浜万次郎とウェブスターの字引一冊ずつも買ひ、写真屋の娘との写真も土産に5月5日浦賀に帰国した。なお8月には諭吉の初めの著書出版である『増訂華英通語』(vの掛ヴ等を考案)が刊行された。後で幸民はこれでの関字に関し教えを受けている。

Ref. B p194 - 196, P201 - 202; H 福翁自伝 p93 - 108

### 第3場 桜田門外の変

1. 諭吉が渡米不在中のこの年3月3日季節はずれの積雪の中、水戸と薩摩合同の刺客団18人が桜田門外で井伊大老を襲い殺害した。人々は幕府には忠誠であったが、国を本当に愛せず、幕府だけの存続のため安政の大獄を行った最高権力者の暗殺を、あまり悼まなかった。このような雰囲気の中幕末の第二幕は幕を閉じた。

Ref. B p200 - 201; H 福翁自伝 p108

## 第 27 幕 化学新書とその源流

### 第 1 場 翻訳者手・稿本完成

1. 蕃書調所の幸民は、万延元年(1860)5月と10月に、旧知の武谷棕亭(1824 - 1869) [適塾に学び福岡藩で博多に設立の精錬所を監督指導]宛の書簡に、「ギュンニグは初心之者試験之法則ニ大ニ宜敷書ニ御座候」「春來ギュンニグ之分離書(官本也)一見仕候処仕極簡便ニ而初学ニ宜敷書ニ御座候」「簡便之試方多々有之候ニ付」と書いた興味ある書を見つけ、翻訳に努めた。
2. その訳書の題名には、従来使われていた「舎密」の語の代わりに、変化を表現する中国からの『六合叢談』に見かけた「化学」が適切と考え、『化学書(万有化学)』とし、蕃書調所に提出3月5日改め済となったが(「開版見改元帳」)出版にいたらなかった。そして翌年文久元年冬(1861)に1855年刊のギュンニグ増補重訂第三版を得て、細かく書き込みの補訳をし、『化学新書』とし、上・中・下の三冊からなる手書きの和装本が現在も日本学士院に所蔵されている(化学史学会が平成十年(1998)解説・補注の由来考証付きで復刻出版した)。
3. なお第 21 幕第 2 幕 2. で述べた幸民が湿式写真で自像を撮影したのはこの頃である。

Ref.Bp206 - 207; Gp2 - 3・P76 - 78

### 第 2 場 内容と活用

1. 『化学新書』巻一頭初に「原本ハ依・亜・私徳合爾士(イ・ア・ストックハルド氏ノ著)とあるように J. A. Stöckhardt 著『Schule der Chemie』が原著(ドイツ・Tharandt の Dresden 工科大学図書館蔵)である。蘭語訳(1850 版、1855 年版、国会図書館蔵)は幸民が「依・烏・根寧(イ・ウ・ギュンニグ)氏コレヲ譯シ」と書いたように、オランダ Utrecht の大学にいた化学者 J. W. Gunning(現地読みではフニングによる。その内容は表題に『無機と有機界の化学一理解しやすく表現され、簡単な実験で明らかにされた -』とあるように、無機化学(1-402)および有機化学(403-561)にわたり多数の実験項目を含んでいる。

Ref. G グラビア頁、p6-12、14-71

2. 本書は蕃書調所とそれに続く開成所にて有意義な稿本として活用された。そこに学んだ辻新次の懐旧談(東京化学雑誌 3 巻 p64-74 明治 15 年所蔵)に「初又書籍ハ蘭書ニテペローセ、プレミア両氏化学通論ベルセリウス氏及ヒワグネル氏化学教授本、ギュンニグ氏無機有機体化学書メイエル氏兵家化学書 ギラルデン氏製造化学書等大概ネ皆ナ千八百四五十年前後ノ刊行ニ係ルモノナリ本邦ノ著訳書ハ宇田川榕庵譯舎密開宗同遠西醫方名物考川本幸民重訳化学新書同兵家須讀舎密真源……」とある。なお『化学新書』の一部「重金属第一種、鐵」より「重金属第一族ノ総括」までを 172 頁にわたり筆写したものが、栃木県黒羽町の黒羽藩校の作新館の旧蔵図書とし残されているが、これは洋学に関心深い開明的な藩主大関増裕のもとから江戸に留学した藩士が、蕃書調所で筆写して持ち帰ったものである。

Ref. 化学史学会復刻「化学新書」下 所載解説

### 第 3 場 西欧源流

1. 1846 年初版の原著を翌年蘭訳したのは Gunning(1827 - 1900)は、当時 Utrecht 大学にいたが、1849 年助手、1853 年学位取得、1854 年よりは講師となり講義も担当していた。幸民が最終的に参照し『化学新書』に細字で上注行間に書き込んだ 1855 年刊の補注は、ドイツ語原著と比較対照して(化学史学会復刻「化学新書」下 p552 - 572 参照)、蘭訳者 Gunning 自身の見解の多数の増補がある。その後工芸学校の教師となり(若かりし頃の W. C. Röntgen[第一回ノーベル物理学賞]も世話)、自分自身で『化学教科書』を著した。これは川本幸民・清一・坪井信良訳『化学読本』陸軍文庫刊として和訳された(国会図書館蔵)。やがて Gunning は Amsterdam 大学教授ともなる(その大学講師就職に van't Hoff[第一回ノーベル化学賞]を世話)。
2. 原著者 Stöckhardt(1809 - 1886)はドイツでの産業革命進行中の Chemnitz の実業学校で化学を教え、新興の農芸化学にも興味も持ち、1846 年『Schule der Chemie』初版を出版するが、1847 年 Dresden 近郊 Tharandt の森林アカデミー(明治 23 年埼玉県葛蒲町出身で各地公園造成で有名な本多静六が留学)に新設の農芸化学講座教授に招聘、生涯を同地で過ごす(記念の Stöckhardt-bau あり)。原著は評価が高く、生前に 19 版(死後 20、21 版)を重ね、12 ケ国で翻訳出版されるほどだった。なお青少年の頃、原著の実験をして興味を持ち化学に進み、有名なノーベル賞化学者 A. V. Baeyer(1905 年受賞)、E. Fischer(1902 年受賞)、W. Ostwald(1909 年受賞)が育つ等の影響があった。

Ref. G p2, P76 - 80, P84

## 第28幕 精練方設置

### 第1場 勝麟太郎・蕃書調所頭取

- 1・万延元年6月、アメリカ帰りの勝麟太郎が天守番の頭核で、新しく蕃書調所の頭取となった。勝が初めて顔を見せた時、異国の珍しい話が聞けると期待したが、一同が待つ大広間で小柄な勝は、鋭い眼光で武士の世界にはあるまじき口調で、「土産話はしたくない、西洋の列強はその経済の仕組みで新しい国を餌食にしなけりゃ生きられねえのよ。おいら達はともかく国力をつけるこった。その総本山がここよ。ここを良くする手立てがあつたら、おいらに何でも言ってくれ」「学びにきている者は己の立身出世のためや、公儀や藩のためという狭い料簡を捨て、六十余州を守るためだということを肝に銘じて励むこった」と話した。これで調所の雰囲気さがらりと変わった。
- 2・勝が着任し数日後、幸民に近寄って親しげに話かけた。「あんたが川本さんかえ。一緒に船に乗っていた中津藩の福沢諭吉という生きのよい若者が、あんたのことを褒めていたよ。あいつは生意気だが、自分をもっている。ありゃ近い将来、必ず事をなすぜ。舎密学を専門にやる分野を作れというあんたの提言は読ませてもらった。早速、談判してみる。それから諭吉から聞いたが、あんたのご子息はもう始めているらしいが、これからは英語が必要。ここでも近く本科にするから」などと話した。

Ref. B p20ト204

### 第2場 精練方(後の化学方)設置

- 1・新しい頭取の勝の仕事は早かった。その会話から二ヶ月もたたぬうちにお上の許可を取り付け、精練方を作り、幸民にその教授も兼任させ主任とした。さらにこの年の暮れには、本科をフランス語から英語に変更し、あらたに掘達之助を教授手伝いに採用して英語を担当させ、翌年からはドイツ語やフランス語も取り入れることにした。
- 2・新設された精練方はまさに幸民の独壇場であった。主任教授として生徒たちに幸民が「化学」と呼称するようになった舎密学を熱心に手ほどきしながら、彼らに手伝わせて、硝酸は硝石と緑礬を用い、塩酸は海塩と緑礬を用い、硫酸は緑礬を烈火で蒸留するなどして各種の酸を製造した。なお器具にはまず釜を築き、土砂を用いて貧乏徳利をぬって鞏固とし、薬品をこれに詰め、受器には西洋徳利の胴に穴を穿ったものを用い、冷器には冷水を盛った兜鉢を用いた(辻新次懐旧談、東京化学雑誌第3巻 p64-74 明治15年)。
- 3・勝が調所の地位を高めるため、老中や若年寄など幕府のお偉方の大挙視察を行った。幸民にお歴々が肝をつぶす派手なことと言われたので、多くの貧乏徳利を集め、それに生徒を動員し真っ赤におこした石炭を詰め、それを土の中に埋め、これに竹の樋を通し準備した。ちょうど日が沈み薄暮になった頃、幸民は竹の管の先に火をつけて廻った。筒先に灯がともり、ガス燈の灯が調所の庭を照らし、一同は感嘆した。

Ref. B p205 - 210

### 第3場 新しい幕・村田蔵六の動き

- 1・世の中は古い時代の終焉に向けて第三幕をあげ、その波が蕃書調所にも次第に寄せ始め、人の出入りが激しくなってきた。文久元年(1861)の春、勝も軍制改革のため新設の御軍制取調御用に、天下直参のお歴々に交じって抜擢され、蕃書調所を去った。「幸民さんよ、あんたは斉彬様への恩義をもう十分返したのではないかえ、ここらあたりで公儀に籍を移して、ここに根付いてはどうだえ。あんたがやる仕事は政りごとの仕組みがどう変わろうが、必ず残り、引き継がれる」と別れの言葉を述べた。
- 2・10月にはヨーロッパへ外交使節団派遣に、松木弘安・箕作秋坪・福沢諭吉等が随行した。
- 3・勝は文久二年(1862)軍艦奉行放となり、兵庫に海軍操練所を設立し人材育成を図る。その後軍艦奉行、第二次長州征伐では全権使節で休戦交渉、江戸の無血開城に働く。
- 4・年の暮れ前年宇和島から藩籍が故郷長州に移っていた村田蔵六(大村益次郎)が長州に帰り軍制改革。長州征伐、下関事件で用兵戦術にすぐれ、明治政府に入り兵制改革。

Ref. B p210 - 211; NHK大河ドラマ昭和49年「勝海舟」、昭和52年「花神」(大村益次郎)

## 第 29 幕 洪庵江戸へ・開成所

### 第1場 緒方洪庵江戸へ

1. 袴を着るのがなにより嫌いで、今迄も諸藩からの仕官の口も門下生に振り分け、今回の幕府からの要請も頑固に断っていた大坂の緒方洪庵が、文久二年(1862)の秋口、幕府奥医師に任せられ、最高の医学機関の西洋医学所頭取も兼任することとなった。

洪庵は医学の実践と教育で本邦随一の実績を積んでいた。15年間にわたり『扶氏経験遺訓』(30巻)を発刊し続け、その中で医療に携わる者の心得を説く部分を『扶氏医戒之略』として世に問い、医の倫理の確立にも貢献し、種痘、コレラ予防を実践した。

2. 8月5日大坂天満八軒家の船着場に多くの見送りの人が集まり、洪庵は若者一人だけを連れ三十石船で出立、8月19日江戸に到着。幸民は日本橋たもとの商家に、自筆の「御公儀奥医師、緒方洪庵様御一行」の大看板を立て、待ち、やがてかって適塾での教え子も集まる。午後洪庵が到着すると幸民はその腕をとり、日本橋通りを木挽町の幸民の家まで蘭学者の行進が始まった。ここで洪庵を囲んで、30人以上の蘭学者の談笑と酒宴が夜更けまで続いた。ここで幸民は今迄躊躇した幕臣への移籍を表明した。

Ref. B p212 - 222

### 第2場 江戸での幸民と洪庵逝去

1. その翌日洪庵は江戸城で着任の挨拶をし、西洋医学所のある下谷御徒町(現台東区)に役職に相応しい屋敷を与えられた(身体の余り丈夫でない洪庵に好都合)。幸民も翌日調所に出仕すると頭取に意向を伝え、その年の暮れ、薩摩藩籍を離れ、幕府の臣籍に入った。
2. 幸民には新しい楽しみができた。勤めを終え調所を出ると、自宅とは方角の異なる御徒町に向かい、洪庵の屋敷に三日をあけず顔を見せた。翌年文久三年(1863)3月下旬子供を連れ八重夫人が大坂からきてからは、洪庵不在のときは夫人の江戸生活の愚痴に付き合い、洪庵の顔を見ると満足し腰を上げた。洪庵も同じで、城を過ると架籠を幸民の木挽町に走らせることも多く、それぞれが相手の帰りを待つこともあった。
3. ところが文久三年6月10日昼過ぎ、洪庵が何の前触れもなく多量の血を吐いて、医師を呼ぶ間もなく息絶えた。幸民は言葉を失い、表情を失い、葬儀一切を仕切らねばならぬ立場となった。十カ月前日本橋で待ち受け、よみがえった坪井塾の青春が、何の予告なく取り上げられた。喜びが大きかった分だけ、失った悲しみは言語を絶した。

Ref. B p222 - 226

### 第3場 諦観のなか時代をみつめ

1. 蕃書調所は文久二年(1862)もはや時代にそぐわぬ「蕃書」から「洋書調所」と名を改め、一ツ橋門外西側の護持院ケ原の新宮の校舎に移った。教授は川本幸民、箕作阮甫に杉田玄端の三名、精錬方担当は前年から調所勤務の教授手伝出役の宇都宮鉦之進(三郎、1834 - 1902、尾張藩出身、精錬方を化学方とすること提案 1864年4月開成所から幕府に伺書、明治に入り工部省に出仕、化学工業基礎作りに活躍)であった。文久三年(1863)8月には、「開物成務」の語からとり「開成所」と改称。  
開成所教授職は川本幸民、堀達之助、市川齋宮、幕府最初の留学生の津田真一郎、西周助。
2. この時25歳になる息子の川本清一も教授手伝いとして抜擢され、親子そろって幕府学門所の教官になり、翌年清一は田安侯の奥医師安井元兆の長女、桂子と結婚した。いずれの時も幸民は、晴れがましく安堵した表情で、父親らしく振る舞った。
3. 二年後の慶応元年(1865)12月には『螺旋機汽説』『旅客手冊』『暴風説』の三冊の訳述書を幕府に献上し、その褒美として、黄金大判二枚を賜与された。なおさらに五十の手習いではしめた英語に関し、D. Pij1の英蘭会話文典の英文会話だけを抜粋して『英吉利会話』をまとめたが、これは開成所にきた Gratama の校閲にもよる。
4. 幕府にオランダから招かれた Gratama(ハラタマ)は、慶応二年春、まず長崎の分析窮理所で化学を講義、翌年江戸に来た。しかし幕府混乱後、新政府が大坂に設立の舎密局に赴き、本国から持参転送されてきた薬品・器具の梱包もここではじめて解かれ、明治二年開校して、本格的な西欧流の実験化学教育が始まったのである。

Ref. 8p227 - 230

## 第30幕 隆義執政

### 第1場 三田藩上屋敷と座敷牢、精隆から隆義へ

1. 安政六年(1859)4月安政の大獄で取り調べの水戸藩家老安島帯刀を、座敷牢を作り預かっていた江戸霞ヶ関の撰津三田藩上屋敷で、8月19日12代藩主精隆(きよたか)が35歳で急逝した。藩としては安島を同情も持ち大切に預かっていたが、8月27日切腹の裁決が出て、安政の大獄の粛清第一号となった。精隆の子は早世が多く跡継ぎがいなかったため、いわば身内である丹波綾部藩九鬼隆都の三男で、書を習い道学者を師と仰ぎ道徳を熱心に学んでいた22歳の隆義が、養子となり12月28日13代三田藩主となった。
2. 万延元年(1890)5月15日三田に初入部のとき、藩主は老職始め諸役人一同を招集し、「寓意の趣」を述べ、領内士民を教化することに留意苦心、藩士は平服で拝聴感泣。翌年稲作不良で蔵を開き貧民救済、小柿乙原両村の境論を聞き、村民に和解を説く。

Ref. C1 p173; D1 p6; D2(三田藩九鬼家年譜)p288 - 292

### 第2場 白洲退蔵登用、兵制改革

1. 一切の旧式を廃して人材登用。儒官白洲退蔵(1829-1891)を抜擢、藩政に参与させ、西洋文明一藩に施行する先駆けとなった。彼は藩校造士館教授白洲文太郎の子として若くして大坂・江戸に儒学を学び三田に帰っては父の後を継いでいたが、安政元年(1854)正月13日浦賀にアメリカ船が投錨した時は、江戸藩邸を出てその内情を探り、作詩もし、開国を唱導するようになった。隆義は退蔵の器量非凡なのを看破し、先生と呼び文久三年(1863)には藩政に就くことを懇望されそれに当った。藩金庫をあけ借金の莫大なことに驚き、大坂屋敷へ徒歩で出向き債権者を呼び、鶏肉手酒宴もはり、誠意をもち生活もきりつめ藩財政再建に努めている旨を訴え、借款を成立させた。また藩領の経界改正、小学校を興し、治水にも努めた。なお上海版の聖書五冊の購入が江戸表に知られ問題化しかけ、福沢諭吉の取りなしで無事に収まったこともあった。
2. 慶応二年(1866)、川本幸民は横浜新聞に掲載の元込め銃で、先込め銃に比し5-6倍の早さで次の発射が可能な最新式の銃であるスナイドル銃(針銃)の広告を見、これが画期的なことに気付き、早速隆義にその威力を説明、同席の白洲退蔵もこの銃に強く魅せられた。時代遅れの火縄銃、ゲーベル銃、弓矢、甲冑果して何の用にかなさんと隆義は鎧兜等の武具を全藩あげて売却させ兵制を改革し、退蔵に購入させたスナイドル銃350挺を50石取り以上の藩士全員に強制的に買わせた。

Ref. C1 p172, 177, P193; D1 p13 - 14; D2 p299, P303; 北康利「北摂三田の歴史」p207 - 208(1999)

### 第3場 神戸海軍操練所、参勤交代復旧令

1. 元治元年(1864)5月、幕府軍艦奉行の勝海舟が大坂湾防備のため神戸に海軍操練所を開いた(現在三宮駅南1km国道2号線南脇に海軍操練所跡碑あり)。ここには坂本竜馬・陸奥宗光など後世に名を残す逸材が集まった。三田からは、いの一に家臣の前田又太郎を練習生として派遣し、観光丸に乗り組ませた。又太郎は海軍の成績がよかったので、毎月賞与金一両が支給された。
2. 隔年から三年に一度に緩和し妻子の本国引き揚げも許すと変えられた参勤交代を、この年の9月、元に戻す命令が出された。隆義は大名たちの声を代表し、越前福井藩主松平春嶽に次のような手紙も出した。「將軍の意図がどこにあるか知らないが、これでは諸大名が喜んで服従しないのではないだろうか。万一、復旧令は実行されないなら幕府のご威光にもかかわると、ひそかに嘆息しています。せめて参勤の割合を、一年おきに百日間江戸にいるぐらいにし、妻子のかわりに人質を出すよう命令を変更すれば諸藩も令に背くことはないだろうし、公儀のご威光も損じないですみ、また諸藩の疲弊も少しましになると考えます」。隆義の懸念どおり色々な口実を並べ、全く実行されず、幕府に強制執行の力もなく、この時代錯誤的な復旧令はかえって幕府の弱体を天下にさらけ出した。

Ref. C1 p177; D2 p298, P303

## 第31幕 維新直前・大政奉還

### 第1場 幕末三田藩の立場と隆義

1. 幕末当時、現在の兵庫県には 18 藩あり、小藩分立幕府勢力が色濃かった。大阪湾・瀬戸内海に面する重要地に家門や譜代の尼崎・明石・姫路に天領の兵庫・西宮を配し、その背後には交互に、譜代(三草・安志・山崎・龍野準譜代・山陰に向かう街道の要地に 篠山)と外様(三田・小野・福本・林田・三日月・赤穂・柏原・出石・豊岡・村岡)を配置していた[C1 p211 に図]。三田藩は家門の尼崎藩と譜代の篠山藩に前後を囲まれる。
2. 江戸藩邸では徳川方の東国大名旗本達が大勢押しかけ徳川を守る会を造り、隆義を会長格とし、誓文、水盃をして誓い合う。国元三田よりはお迎えの使者、隆義は大政奉還(慶喜が慶応三年 1867. 10.14 上奏)に反発して苦悩の文「今回江戸城拾国御門のかための御沙汰相伝え候につき徳川には三代将軍に御恩あり候間、相受御沙汰通りに相聞候間、一家中の者その心得に候と申越し、若し見相違候いては切腹も致す」とある。11 月 22 日、隆義家中に諭達し「驚愕」「涕泣」「皇運の御衰運と大長息」と愁嘆の極みを述べ、公共の論で政令一途にできるのは喜ばしくとも、奸賊が縉紳をそそのかしたかと疑われ、徳川家の恩沢に身命と領地を差し上げ当家の命運もこれまでとすると述べた。

Ref. Clp191; Dlp5, 7, 9, 14 - 15; D2p305

### 第2場 白洲退蔵、隆義を説得。

1. 三田藩では城内から荘重な太鼓があたり静寂を破ってドーン、ドーンと鳴り出し、人々は不安を感じ戸外に飛び出し騒ぐ。そのうち下級武士が装束を整え小走りに城内に向かう。間もなくそれが志摩鳥羽から国替えになって初めての総登場の太鼓と人々に伝播されるのに時間はかからなかった。この太鼓こそ三田藩が佐幕か尊皇かの政変の中の維新に対処する藩の姿勢を正面に打ち出す会議を告げる総登場の報せであった。
2. 一家中の思い「三田藩は外様なので旗色宜しき方につが利、将軍いないのに利なき処に居るも不心得、京都より呼び寄せあるので先ずそれに応ずるがよい」。白洲退蔵は「天子を父とし幕府を母とし、その間に親疎の考えは有していなかった。故に幕府を究迫するは母を疎外するも同様で、情けにおいて忍びぬところである。けれども子の分としては止むを得ず泣いて父に従うより外はない」と与論大勢をしめているので隆義の帰藩を促したが、隆義は聞かず幕府も許さず佐幕大名の中堅の鑑とさえした。これを聞き、11 月 28 日三田出発江戸に出て隆義に会い、慷慨撃切深くその失策を諭し一語一語言葉は静かだが、迫る退蔵の眉宇には鉄桶のような意思、隆義は漸次退き座隅に至る。存分に押し問答の末、漸く納得し低頭し過ちを謝し、その言に服した。九鬼隆義は為政者として家臣の意見を十分に汲み取る裁量があったので、この様に維新に際し藩運を見誤らなかった。これは小藩だから出来た柔軟な変わり身だった。
3. 12 月 28 日幕府の許可をえて、隆義を守護し帰藩の途。順道丸で品川を発し正月 4 日兵庫港着。丁度鳥羽伏見の開戦を聞き、重臣を京都に詰めさせ三田に帰る。隆義は船中より病気。黒装束、異国人風に異国の沓を履き帰国。7 日異人姿で墓所参詣。

Ref. C1 p157, P191 - 192; D1 p7, P9, P14; D2 p305 - 306

### 第3場 山陰鎮撫軍の福住到着、京都警備

1. 慶応四年(明治元年、1868)1 月 9 日山陰鎮撫軍の総督・西園寺公望が薩摩兵 300 人を率い多紀郡福住村に到着。三田藩は出迎えて勤皇二心なき帰順を誓う挨拶をする。三田にこられても職業にはげみ、騒ぎ立てるのは上様の御意に背くとお触れも出る。お供の長州士一人家来 3 人付き添い、引戸の賀籠に乗り 15 日朝五つ時三田を通る。そのほか早駕籠が度々(14 日七つ半時 6 人掛け、15 日六つ時、六つ時半時早駕籠四人持ち三挺、雑物三荷付き添い大将一人)通った。
2. 摂津で唯一の外様の三田藩は、重臣を京都に派遣、旧幕時代より担当の神埼川筋警衛等を引き上げるなど切替えたが、19 日には神埼川筋警衛は外国船渡来の京都守備として引き続き今度は朝命により守衛を命じられた。徳川慶喜追悼例に基づき三田藩は兵卒 50 人を上京させ御所警備につくなど非常に早く新政府の支配下に入った。

Ref. C1 p195; D1 p5; D2 p306

## 第 32 幕 幸民帰郷・英蘭塾

### 第 1 場 幕末から明治への幸民

1. 開成所は慶応元年(1865)陸軍奉行所管となり、理学・化学の学料を置き、オランダからハラタマ(Gratama)を招き、彼は慶応二年長崎に着き、翌年には開成所にも出所したので、幸民も英語学習に良き協力者を得た。しかし世間の政情は、慶応二年(1866)12月末の孝明天皇崩御、睦仁親王(明治天皇)践祚。幕府の第二次長州征伐失敗。将軍家茂宝歿と瓦解の一路をたどり、薩長連合から倒幕へとめまぐるしく変化し、慶応四年には西郷隆盛と勝海舟二人の努力で、江戸城の無血開城と続いた。
2. 江戸の開成所に勤めていた幸民が、幕府の終幕間近の慶応三年(1867)正月 4 日付で、旧知の福岡黒田藩の重臣武谷稔亭(27 幕 1 場参照)宛に、送った書簡に「右騒擾ニツイテハ芸学モ縮短止ムヲ得ザル勢イニ御座候。西学ヲ唱工候者ハ尽ク天誅ヲ加エルナドノ暴説流行仕ルモ左ノミ恐怖モ仕ラズ候得共、之ガ為メ生徒出ズ困却仕候。当時時之形勢ニテハ是非共九州之大諸侯御奮発下サレ、九州ヲ制シ政府ノ悪習ヲ御改革下サレズ候テハ、庶民塗炭之患ニ陥リ申シ候。…」とあり、従来政治の改革を望んでいる。
3. やがて川本幸民 59 歳は幕府の崩壊を眼の当り凝視すると共に、開成所も閉校となったのでその禄を食んでいた自分が今更薩長の禄を食むを潔しとせず、野に降りることとし、慶応二年 6 月から開成所英学教授手伝いとして英語指導に没頭していたその子の清二郎(清一)と共に、明治元年(1868 年 9 月改元)7 月、江戸が東京と改称された月、三田に帰った。

Ref. B p231 - 232, 川本裕司・中谷一正「川本幸民伝」(1971)p166 - 168

### 第 2 場 三田帰還・英蘭塾と門人

1. 幸民親子は三田に帰ったが、藩主九鬼隆義は、三田藩籍を離脱し薩摩藩の知遇を受けて後に幕臣となった幸民を再び召抱えるわけにいかず、さりとしてこれほどの学者に藩士子弟の教育を委ねたいと切望していたので、嗣子清次郎を家禄 50 石で新しく召抱え屋敷町薬師町の古刹金心寺境内跡に屋敷を与えた。そこで幸民親子は英蘭塾を開き、「世界に眼をむけよう」と説き教え、英語は清次郎が担当した。
2. 幸民親子の声望をしたい、英蘭塾には各地から門人が参集した。その来学者 127 名の姓名簿が残っているが、筆頭は 1835 年生 33 歳の越賀範三郎である。彼は藩校造士館で漢籍を修め、江川太郎左衛門に入門砲術・用兵術を学び、後大阪岡本真介門で欧州兵学を学び、さらに勝海舟のもとで蘭学・欧州戦術・築城術等を学び、大阪佐藤与之助につき測量術も修めている。英蘭塾で語学を通じ開化の新思想に目覚めた。以後家老の九鬼隆継の長女保子を娶り家督相続の養子となり(自宅が現存し、九鬼邸建築として公開)、工部省に入り、鉄道技師として活躍した九鬼範三である。明治 41 年(1908)74 歳で歿。
3. 次に 1848 年生まれの前田恭一郎(余何人、後慶応義塾に入学し泰一と改名、神戸で教会活動)盛華縫殿助(後に医師の森鼻宗次)、篠山よりの坂部貞輔(明治元年 11 月より明治三年正月まで学ぶ、清一との写真あり)等の名があり、若い入門者としては 1858 年生まれの杉田勇二郎(明治二年 5 月に入門、後に元良家の養子となり、心理学を修める)の名もある。堂内に座ることができぬほど溢れたので、近くの畑中村方仙寺に分校も設けた。三田藩子弟の殆どだけでなく、篠山・柏原・尼崎・福知山等からも教えを乞いに来ている。

Ref. C1 p203; D1 p16, 20, 158; 小沢清躬「蘭学者・川本幸民」(1948)p182-192

### 第 3 場 明治新政府の教育

1. 明治元年、明治政府は幕府の三学問所、昌平坂学問所・開成所・医学所を接收、昌平学校・開成学校・医学学校と名称を変え復興させたが、翌年昌平学校を中心に大学校を設立、後二者は大学分局として高等教育と教育行政の機能を併せもたせ、明治二年それぞれ大学・大学南校・大学東校と改称された。他方化学の面では、明治元年 8 月に開成所の理化学施設を大阪に移し、舎密局を開くこととした。その建物は翌年 3 月に完成した。
2. 舎密局は明治二年 5 月 1 日 オランダ人ハラタマ(Gratama)を教頭に開校式を行い、22 歳の三崎嘯輔と 19 歳の松本銚太郎を通訳として講義し、実験もした。舎密局は理学校、理学所と改称の後、明治五年中央集権の方針で廃止された。

塚原徳道「明治化学の開拓者」(三省堂選書 1978)p39 - 48

## 第33幕 明治初期教育、幸民上京・逝去

### 第1場 官教育の新展開

- 1・人心一新のため遷都論もおこり、大阪への話もあったが、まだ関東・東北地方のおだやかでない情勢も背景に、東京に明治元年秋の天皇東幸(12月遷幸)、翌年3月の再幸、4月には太政官を移す布達があり、事実上の東京遷都が決定、中央集権化が進んだ。
- 2・開成所も明治元年開成学校、明治二年大学南校、明治四年南校、明治五年第一大学区第一番中学、明治六年開成学校、明治七年東京開成学校と名を変え、明治十年には東京大学(法・理・文)となった。他方医学所も、明治元年医学学校、明治二年大学東校、明治四年東校、明治五年第一大学区医学校、明治七年東京医学校と名を変え、明治十年には東京大学(医)となった。
- 3・これらの学校では、明治二年より仏・英人を教師として授業を開始したが、その後も多数のお雇い外国人教師が招かれて教育が進展した。  
化学については、ハラタマの後任となったドイツ人リッテル(H. Ritter)は、大阪の舎密局・理学校閉鎖後明治六年上京、開成学校鉱山学科で教えたが、明治六年末天然痘で死去。明治三年福井藩に招かれた米人グリフィス(W. E. Grifris)は、明治五年上京して大学南校で教え明治七年帰国。その後任24歳のアトキンソン(R. W. Atkinson)は東京開成学校で分析と化学の他その応用へも関心を持ち、東京大学で教授として残り、明治十四年まで教えた。明治六年来日のダイバース(E. Divers)も明治三十二年まで教えた。この他グリフィスの親友クラーク(E. W. Clark)は、明治四年来日、静岡学問所で2年間教えて後上京、開成学校の理化学教師となり、明治八年帰国した。
- 4・生徒も明治三年7月太政官通達で各藩から大学南校へ推薦の貢進生をつのり、明治四年の貢進生名簿によると、生徒数310(英語専科219、仏語専科74、独語専科17)で、下級武士の子弟である。やがて試験で入学するものもあり、明治の時代を背負う人材が育成された。具体的には、東京大学理科での初めての日本人教授となった桜井錠二の生い立ちにそれを見る。安政五年(1858)金沢に生まれ、5歳未満で父が他界、少年期4年間私塾に学び、明治三年満11歳半で藩立英学校へ入り、七尾の所国語学所で直接外国人教師の英語授業を受け、明治四年4月に貢進生に選ばれ在京中の兄と生活を共にするため母と上京、5月英語を主とする大学南校の試験に合格した。アトキンソンに化学を学び、明治九年本科2年のとき文部省第二回海外留学生に選ばれ、英国ロンドン大学で学んだ。明治十四年帰国東京大学講師、翌年満24歳で教授。  
Ref. 塚原徳道「明治化学の開拓者」(三省堂選書)p39-78(1978)

阪上正信「西洋近代化学の移植・育成者：桜井錠二」化学史研究24(2)p157-168(1997)

### 第2場 幸民・清一の上京

- 1・三田では明治二年九鬼隆義も英学校開設を急務と考え、幸民の同意も得て幸民旧知の福沢論吉に教科書・諸機器を発注したが、11月の百姓一揆(35幕)で計画は崩れた。
- 2・明治三年(1870)7月川本清二郎(清一)が新政府に召され太政官出仕となったので、幸民・清二郎親子の三田英蘭塾は閉鎖され、一家で東京に出る。清二郎は、元治元年(1864)26歳で田安侯の奥医師安井元兆の長女桂子16歳と結婚、長女静子が生まれていたが、明治二年長男敬蔵が生まれ、数え年61歳還暦の幸民も孫と共に東京に出て、神田千代田町20番地に居住した。8月幸民は隠居、清次郎が家督を相続して戸主となった(後に住居も本郷区真砂町30番地に移り、幸民死後は名も清一に改めた)。
- 3・清二郎は32歳、明治三年10月太政官より大学少博士に任じられ正七位に叙せられた。

Ref. B p233; D1 p20, 21

### 第3場 幸民逝去、秀子・清一のその後

- 1・明治四年、病気勝ちであった幸民の病勢がつつのり、坪井芳州(大木仲益、坪井信道の高弟でその娘婿、米沢藩から鹿兒島藩に移り坪井芳州と改名、蕃書調所教授、さらに医科大学教員になる。)の処方箋も残っているが、遂に6月1日逝去した。享年数え年62歳。葬式の際の香典帖等もあり、参列者の氏名も知れる。
- 2・浅草松葉町曹源寺(青地家の菩提所)に葬られ、裏面に裕軒川本先生之墓の字が刻された。この墓は、幸民の妻秀子が明治三十三年9月86歳で歿した翌年の明治三十四年2月に、川本家がクリスチャンとなっていたので、秀子の墓とならべ、小石川雑司ヶ谷の共同墓地に西北端に改装された。
- 3・清一は明治四年7月『相馬略』(幸民が序文、馬の医学書、陸軍兵学寮本刻)の蘭書訳を刊行、明治八年には『化学読本』(化学新書の蘭訳者フニング自著で出版した蘭書の幸民・清一・坪井信良和訳、陸軍文庫刊)出版した。文部省官吏、外務省御用掛と勤め、明治15年牛込区会議員ともなり、大分県中学校にも職を得たが、大正七年(1918)7月次男城司経営の福島高玉鉱山で80歳で歿した。

Ref. B p233; D1 p21; 川本裕司・中谷一正「川本幸民伝」(1971)p183, 216 - 217

## 第34幕 諭吉、幸民・廃藩置県

### 第1場 諭吉幸民の交流・慶応義塾

- 1・幸民と共に学んだ親友洪庵の適塾を出て安政五年(1858)江戸に来た福沢諭吉は、心置かない先生として幸民の所を訪れた。万延元年(1860)数え年 27 歳で諭吉が初めて出版した『華英通語』でその凡例で皇国又本邦の文字に闕字したことに懸念を持ち、木挽町の自宅の幸民にその必要性を尋ね、洋学自由思想の大家の川本先生より蕃書調所ではその成規なく、闕字全廃しても心配ないとの明答を得て、欣喜して走って帰宅したことが福沢談として福沢諭吉全集緒言 24 - 25 に掲載されている。『福翁自伝』H. p139 に江戸洋学の大家川本幸民先生の説が述べられているが、これは幸民の弟子で薩摩藩の松木弘安(文元年 1861、諭吉・箕作秋坪と共に訪欧外交使節団に随行した年来の学友、後に寺島宗則と改名)が、文久三年(1863)7 月の薩英戦争(前年の生麦事件で英人斬死の賠償問題が起因)の際、英艦隊に薩摩の西洋形の船と共に捕えられ、その後英国との間に立っていた英書も読める商人清水卯三郎の世話で脱出し、関東で身をひそめていたのを、薩摩からの探索に清水が当惑し、幸民の意見を聞きにきてそれにより決断し薩摩に通知し、本人を殺さぬよう念をおして引き渡したのに関連する。
- 2・安政五年(1858)10 月より江戸築地鉄砲州の奥平家中屋敷で蘭学塾を開いた諭吉は、英語への転向を決意し、文久元年(1861)冬 28 歳の時、中津藩士の次女 17 歳の錦と結婚、芝新銭座に転居したが、12 月には幕府遣欧使節に随行、翌年末帰国後は本格的な英語塾体制を整えた。秋には再び鉄砲州中屋敷に移り、11 月長男市太郎が生まれた。慶応三年(1867)には幕府の軍艦受取委員として再び渡米(多量の英教科書購入)6月帰国、12月末に芝新銭座有馬家中屋敷を購入、翌年 4 月に此处に移り、年号に因み慶応義塾と名付けた。なおこの頃から幕府、明治政府からの要請も断った。明治四年(1871)には三田(みた)の島原藩中屋敷の払い下げを受け移転、4 月には講堂も完成し授業を開始した。
- 3・なお諭吉は明治二年 11 月福沢屋諭吉の名で書物問屋組合に加入し、出版業の自営に取りかかり、次々に自著を出版した。また諭吉の勧めで、横浜では早矢仕有柑的が丸屋商社(後の丸善)を創業した。

Ref. D1 p22; H p317-324, p186-200; H p13, 15-16

### 第2場 隆義・版籍奉還、諭吉との関わり

- 1・三田藩では明治二年 2 月天皇東京に再幸で京都御所留守中の警備に、イギリス風に訓練の精鋭 50 人がスナイドル銃を携え、笛太鼓の軍楽隊つきで出立、御所警護の任についた。
- 2・藩主隆義は明治二年 4 月 4 日江戸行き出立、兵庫を 6 日出、蒸気船にて 7 日江戸着。6 月 17 日三田藩の藩籍を朝廷に奉還した。6 月 20 日召されて参朝の上、「九鬼長門守三田藩知事仰せ付けられ候事」の書き付けをもらった。新決意のもと旧役人を一掃、職制を改革し、大参事白洲退蔵、小属小寺泰次郎等の新進気鋭の人材を登用。一般男子も洋服着用、牛肉常食、洋式の操練など県下でも最も進み、洋学校設立も計画した。
- 3・幸民を通じて諭吉と知り合いとなった九鬼隆義は明治二年 10 月 8 日書簡を届け、その返信を諭吉は 11 月 6 日付けで送っている。それに幸民より洋学校の為の入用品目録が届いた。二ヶ月で品物到着のことなどが述べられている。さらに 明治三年正月には「国尽くし」改版一部拝呈、義塾の様子閣下の勉強を祈り、一身の独立は一家、国家の独立に及ぶと述べている。次に 2 月 15 日書簡には旧冬の領民騒擾の事、貧民を救うには金よりも知恵を、原書を読む必要、幸民にモラルの小冊子呈上、ご覧下さいなどがある。2 月 20 日書簡には注文の「国尽くし」200 部の割引代金などがあり、4 月 25 日にはそれを受取の事、外国注文品横浜より積み出しの事、10 月 14 日書簡には病中見舞いお礼と共に、幸民が東京に来たのでお目にかかり、御地の様子を詳しく聞いた。計画の学校の故障は残念。三田藩のみならず天下の大不幸、難にあって失望自棄せざること一大緊要。「西洋事情」二篇 4 冊出来上がるので一部拝呈と述べた。

Ref. C2p59 - 62; D1p9 - 10, 23 - 28

### 第3場 隆義・廃藩置県、藩士慶応義塾へ

- 1・明治四年三田藩は家禄制度、華士族呼称を廃止、人民各自が独立し、智を磨き業を修めるよう挙藩帰農計画をたて、政府に資金貸し付けを願い、5 月「帰田仕法」の上表と副表を差し出し、大参事白洲退蔵らが岩倉具視に陳情した。しかし 7 月 10 日には天皇は在京の諸藩知事を招集して「廃藩」の証書を出した。7 月 15 日九鬼隆義は三田藩知事を免ぜられ(廃藩置県)、三田県となった(明治五年正月 23 日兵庫県に編入、三田県庁は兵庫県出張所)。
- 2・三田(さんだ)の幸民親子の英蘭塾に学んだ生徒もその閉鎖後、三田(みた)に移転新築の慶応義塾に、19 歳の九鬼隆一(静人、大坂江戸堀の三田藩蔵屋敷で隆義に福沢を招いたときその給仕役として同席、更に明治二年 5 月には隆義に伴われ芝新銭座の福沢邸訪問)、23 歳の前田恭一郎(余何人、泰一)、14 歳の武藤敬蔵が次々に入学した。

Ref. C2 p99; D1 p10 - 11

## 第 35 幕 郷騒(百姓一揆)

### 第1場 背景・きっかけ

- 1・何よりも三田地方には、幕末の慶応二年、三年にひどい洪水があった上、その傷痕の消えぬ明治二年は気候不順で、6月に六甲山に雪を見、土用に裕(あわせ)を着たほどの冷害の夏に襲われた。収穫は半作程度、米価は四割方跳ね上がった。
- 2・隆義は養子となり13代藩主になった頃は、難渋人へ毎月三合の救米など、格別の憐れみを民に施し、感謝され他領の百姓も三田を羨むほどだった。しかし藩籍奉還の明治二年頃は、特別な殖産事業もないまま、藩財政の緊迫、新体制の人事のもとでの、洋学校の建設の意図など、将来の方向に目が向き、年貢率約七割のもとでの難渋人の願い、その状況への配慮が少なく、駒宇佐八幡の杉檜の売り出し、下田中天満神社の名木の切り倒し、寺院の釣り鐘、宝物の売却、神田(神社の所有地)・寺田・村の共有地没収など、新仕法は民には不人気だった。禄の借り上げも藩士は不平不満だった。
- 3・旧藩士内(全員約200人)にも、新体制の白洲退蔵・小寺泰次郎ら主流派に対し反感を持つ反主流派があり、それに志摩の頃から九鬼氏に属し家老職だった九鬼兵庫隆元(郷騒動の後は免職し隠居し、嫡男貢は西姓)、星崎佐左衛門(後述の九鬼隆一の実父)、野津甚三郎等がいる。
- 4・三田藩下田中村に、若く京浜に学び心学の書も発行、知行合一の大塩平八郎らの陽明学にも接し、行学者とも署名し塾も持つ、篤学61歳の仲忽左衛門(田中宗兵衛)がいた。その門弟に29歳北畠市衛門、川除け村の市田栄蔵と22歳の奥田市松、貴志村40歳を越える志茂吉右衛門等がいた。
- 5・難渋する百姓のため年貢五分引きを、仲は庄屋と藩の会談に努力したが、藩は「政務多端で支出多く到底できない」と通達。次の道として藩の代官による検見(けみ)を嘆願したが、藩の代表として稲の検査に来たのは「ゲジゲジ」のあだ名もある取り立てにきびしい小寺泰次郎で、すげなく年貢半減の嘆願を拒んだ。これは藩内各村に伝わった。

Ref. C2 p69 - 71; D1 p10; J p40 - 41; 全般\*

### 第2場 行動・請願・打ちこわし。

- 1・明治二年11月13日各村有志に、通牒(天狗状)「15日朝を期し最後の手段(一揆)を」(北畑、市田による)送られる。
- 2・14日払暁、竹法螺が鳴り、篝火がたかれ、藍村、高熊の原に同勢(相野、藍本、岩倉、幡尻、東本庄)が蓑笠に身をかため、鋤・鍬を持ち集まる。一方三輪の上野原から有馬富士の方を向き竹法螺を吹きつつ同志(志手原、尼寺、小野、小柿、乙原等)を集め、三輪の庄屋34歳井元与右衛門(年貢半減交渉で役立たなかった責任感で)元気だせと発言。この集団は高熊からの集団列と加茂で合流。
- 3・15日城内大騒ぎ、議論、参事白洲退蔵が弁舌で解散させると单身駕籠で出掛け、藩主もその後から馬で单身加茂に向い対談押し止めようとしたが、加茂村で百姓に取り囲まれ、馬は材木等を投げられ驚き跳ね落馬、白洲の出た駕籠は溝へ踏込み潰され逃げる。藩主はある家の押し入りに隠れ、山伝いで帰城。この夜、上野原は関の声と、篝火で物凄い光景。
- 4・この間勢い余った集団は、農村の豪農庄屋(奥谷、嘉土、門野、竹内)へ「打ちこわし」、一揆幹部の村代表の止めにかかわらず、翌日にかけて豪商の米・肥料商(三木、大川瀬、米屋)、油屋(油谷、岡島)、質屋(深田)、酒屋(泉屋、酒蔵で詰口を抜く)、菓子屋(銭屋、日頃なめない)に「打ちこわし」があった。
- 5・16日朝、仲の指令で雄弁な北畑が目的達成以外に後を残すなどの注意を演説した。この後一揆勢は歩武堂々と三田陣屋に向かった。百姓は「苦しめたのは白洲と小寺じゃ、二鯛の首を取れ(退蔵と泰次郎の二たい)」とも叫んだ。桜の馬場が交渉の場所となり漸く年貢五分引きを承認させた。
- 6・18日志茂が願書を書き記し、藩役人(九鬼兵庫)に渡す。その訴状23ヶ条には、一揆に異例な藩人事に関する注文(白洲、大原、小寺の退官要求)もあった。その後、立札等もあったが、結局のところ藩の安全を考える白洲の妥協によって、年貢五分は実質的には達成された。

Ref. C2 p72-82; D1 p10; 全般\*

### 第3場 裁き

- 1・京都から役人(弾正)が来て取り調べ聞き合わせをする。当局豪商は、百姓に負け自尊心を傷つけられた憤怒で、打ち壊しのひどさ等を訴える。まず北畑が捕えられ、関係者を次々に投獄、一揆当時家より出なかった仲は、名乗り出て自分の一存とする。
- 2・他郷(明治四年5月3日榎公園西の武庫川川原で絞首刑)、北畑懲役15年(神戸収容所で服役中発病、明治六年下田中へ帰るが10月歿)、市田懲役7年、奥田7年、井元懲役1年。身分制の色濃く残る時代の、財政文教と民生福祉の狭間の犠牲であった。

Ref. C2 p87-92; \* [全般資料] 西村繁、「明治二年三田百姓一揆」六甲タイムス(1985); 森鼻平治郎「明治二年三田の百姓一揆」(1932)

## 第36幕 諭吉来訪とその意見

### 第1場 諭吉の隆義への書簡

1. 第34幕第2場の明治二年11月6日の諭吉から隆義へ書簡は、明治三年の次の書簡に続く。11月2日神戸の宿長屋で書いた書簡。病後後気が乏しいので、旅行で気を養う一助と、中津の老母の許に帰省を計画。先月28日江戸を出立。アメリカ船で今朝神戸着。一先ず大坂に行き、玉江橋北詰の中津藩蔵屋敷に滞留し、下関まで船便を待つ。暇があれば藩にも尋ねてみたい。「西洋事情」二篇改版につき一部拝呈。神戸までかき飛脚無く大坂まで持参の同じ11月2日付けでの書簡。中津屋敷の鮎屋彦兵衛に居る。両三日は暇なのでまかり出る積り。(既に福沢は大坂江戸堀の三田藩蔵屋敷を訪ねたことがある。34幕3場参照)。東京では岩倉具視にも会い、藩の話もし、口上よき模様、学校など自由自在。近臣一名明日にも旅宿に差し出して欲しい。12月13日書簡。大坂より。先日訪問拝話し、品物頂戴のお礼。中津で老母も江戸に行くことになり同行、無事旅行、神戸に母残し大坂帰着。明日か明後日に神戸に立ち帰り、便船で江戸へ出立の予定。三田は神戸から近いが老母一人手離すと不安なのでこの度も参上出来ぬが悪しからず。江戸も騒々しいが用心したい。
2. 明治四年になると 正月29日付で三田藩知事様下執事宛のかなり長文の書簡がある。15日の書簡のお礼と改年おめでとう。自分は12月19日横浜着、無事に帰宅。都下の景況は人の話よりも静穏だが、用件以外は外出を控え、出る時はパッチ麻裏で鳶口などを携行、早足に往来。旧冬留守中に三田二丁目元島原藩邸を官より借り、建物買い取り普請、来月中に引き移る積り。元金無く、金策の苦勞を官の南校東校とも比較し、教授の状況も含めて述べ、日本国中の洋学生の必要性を論じている。岩倉公西欧に行くので思召しの一条(拳藩帰農計画帰田仕法を出し、資金貸付の願い、34幕3場)埒が明かなくなった。世に悪人これなく、真実所見を相手構わず公然唱えること。当春白洲先生同道で上京、在職の人と議論されたしと述べる。
3. 明治五年には2月15日付で、去年12月1日より例の発熱、一時は大いに衰弱したが、この節全く旧に復した。昨冬ご覧に入れた「学問のすすめ」の製本が出来たので50部拝呈。旧藩の衆に分与下さい。学問流行、漢詩殆ど廃止同様、蔵書に漢書あれば売り払いの方と述べる。そして四月朔日付け 神戸金場常次郎宅からの書簡では、昨冬来話の三田・有馬の訪問実現を伝えた。

Ref. D1 p23-30;慶応義塾編「福沢諭吉全集 第17巻」岩波書店(1959-1964)

### 第2場 諭吉、三田へ来訪

1. 諭吉は明治五年4月1日横浜から船に乗り、3日神戸に上陸、大阪で緒方洪庵の未亡人八重に面会した。故洪庵先生はいなくても八重夫人は自分をわが子のように愛してくれるから大阪に着くととりあえず行くと福翁自伝(H)に述べている。三田に遊び有馬に行くことなど話すと、病後で歩けそうにないと駕籠をかしてやろうと言われ、その駕籠で大阪を出立した。よい季節でパッチをはき羽織を着てコウモリ傘を持つ。
2. 少し歩いてみるとなかなか歩けるので「コリヤ駕籠はいらぬ、駕籠屋、先に行け、おれは独りで行くから」と言い、独りで供もなく連れもない。話相手がなくて面白くないところから往来の向こうからくる人々に、三里ばかり歩く間、そぶり、言葉を変えて色々話しかける。百姓に土族らしく横風に道を聞いたり、土族丸出し口調、大阪町人風等々に。先の人によって自分の身を伸び縮みするので心中面白くない。ゴム人形のように、これでは人民の方から圧政を招くと落胆した。
3. 途中洪庵夫人八重の故郷で、適塾に学んだ伊藤慎蔵(1825 - 1880)が福井・大野藩から移り(1862年)、家塾を9年間開き翻訳出版(筆算提要、磁石靈震気療説)もした名塩に一泊した。
4. 翌日三田に来た諭吉は、小紋の羽織で片手にコウモリ傘、パッチ尻端折りという至極軽微なものだった。町では西洋小物店に立ち寄って洋酒の瓶を出させ、ペラペラと張り紙を読んで、一瓶を買って行った。そして九鬼家に一泊した。

Ref. H p216 - 218; Clp103

### 第3場 諭吉の意見、有馬逗留

1. 三田では九鬼隆義は廃藩置県後の処世術を福沢諭吉に質問した。諭吉は隆義に三田藩が今後採るべき道を示唆した。頗る米国鼻根で、官吏よりも商人のほうが人間の取るべき自由の生活方であると奨励した。このように商業への転進を勧めたので、この資本主義的近代精神を入れ、これが三田の与望となって、一人も官途を求め者無く、皆が帰農帰商を志した。
2. 三田九鬼家一泊の後、有馬温泉に入湯し、逗留した。その様子は明治五年4月15日付けの有馬旅館の「そふめんや」から丸屋善蔵(丸善大阪支店)宛ての諭吉の書簡に窺われる。熱海箱根と異なり広き湯壺二ヶ所あり、入込(一日百文)・合入・買い切りの3等級あり。私は17日1両の貸切とした。三田より子供一人を連れ、二人で面白い。湯は広さ8畳、ぬるく泳ぎの稽古も出来る等。
3. 尚4月18日付では、隆義宛福沢諭吉拝答として、先日のご厄介厚遇、入湯後も度々頂戴ものを頂くお礼の書簡を出している。

Ref. C1 p103;D p36;「福沢諭吉全集 第17巻」p129-131

## 第37幕 キリスト教との出逢い

### 第1場 キリスト教宣教師の神戸来訪

1. 神戸の居留地に、明治三年3月31日、米国外伝導教会(アメリカン・ボード)[ピューリタンの流れを汲む各教会の独立・主体性を尊重する会衆派・組合派の伝道団]派遣のD.C.グリーン(27歳)夫妻が到着した。キリスト教は、1865年三田藩の白洲退蔵が中国語訳聖書5冊を買ったのが江戸表幕府に知れ、福沢諭吉とりなしで無事に収まったことがあり、また九州浦上信徒4000人の流刑等もあり、切支丹禁制の高札は未だ1873年(明治6年)までは撤去されていなかった。居留地内での外国人の礼拝とキリスト教活動のみは許されていたが、居留地外では医療と英語授業のみが許された。これに関連する事として明治四年、神戸での宣教師の日本語教師であった市川栄之助の家宅捜査・その妻と共に突然の逮捕・投獄・獄死の事件があった。
2. 明治四年3月3日にはアメリカン・ボード宣教師O.H.ギュリック(40歳)夫妻が神戸に着任、グリーンに協力するようになった。また12月1日にはアメリカン・ボード宣教師デーヴィス(33歳)夫妻が神戸に着任した。やがて三田藩九鬼隆義家に女中奉公していた甲賀ふじ(16歳)が、デーヴィス宅に住み込み奉公となる(2場、有馬での縁で)。さらに翌年明治五年(1852)5月27日宣教医J.C.ペリー(25歳)夫妻が来神し、生田神社前に施療所を開設した。

Ref. D p14, P51, P72-73; 小林昭雄「歴史と神戸」10・5(2001)p23-26

### 第2場 有馬での滞在、元三田藩士・九鬼隆義家族との交流

1. 明治五年夏、J.C.ペリーのすすめで避暑のため、有馬にデーヴィス夫妻は子供も連れて滞在していた。そのもとに8月4日、北8Kmの三田の地から、いずれも幸民親子の英蘭塾に学び英語学習に関心深い三人の元三田藩士、前田泰一(11848年生、明治四年慶応義塾に学び、聖書にも関心持つ)、佐治職(1853年生)、鈴木清(11848年生)が訪ねた。これを機縁に佐治職はデーヴィスの書いたトラクト(小冊子)伝道用説明書を口語訳(真の道を知る近道)することとなる。
2. 有馬に二週間逗留中、デーヴィスは夫人と子供を連れて三田にも赴いた。朝野文書(C2)に「異国人男女二人、二歳ぐらいの子供連れくる。三田町見物に来る。初に女子を抱き、キョクロクの両眼に杉丸一間半ぐらいの棒をつき、人足一人の両肩に棒載せ、二人して担ぐなり。一人替り人あり。これが異国の鴛籠なり。後に男女歩いて町方見物致す。」とある。旅館に滞在したが、物珍しさに人が集まった。九鬼隆義の妻園子も三人の子供[長女肇(ちょう)、次女好子、嫡男隆輝2歳]を伴って挨拶に旅館を訪れた。
3. デーヴィスが有馬に帰ると、九鬼隆義と家族も連れて訪れ、数週間滞在し親密な交遊がはじまった。なお九鬼家の肇姫の御守り役の甲賀ふじ(1857年生)が、隆義がその母にも説き、デーヴィスの女児童(クララ)の子守に遣わされることとなった。

Ref. C2p123; D p51, P59, P95, P109, P135; 小林昭雄「歴史と神戸」10・5(2001)p26-27

### 第3場 医療と宣教師

1. J.C.ペリーは米国ジェファーソン大学卒業し医業に従事していたが、結婚後間もなく医学伝道のため日本行きを志願し、神戸に来た。最初居留外人のための国際病院の医師を勤めるかたわら、生田神社前の施療所「恵濟院」を設け、貧しい日本人患者をみた。兵庫県令神田孝平はこの新進医師を知り、県立神戸病院に招聘し、地方医家の指導、洋学普及を計り、解剖室も設け、死因を明らかにする解剖医学も教えた。元三田藩医の木村強(1844年生、藩主隆義に重用された医師)、川本泰年(1828年三田生、川本幸民の兄周篤の子、洪庵の適塾にも学ぶ)もその下に学ぶ医師であり、理論信条より実際の奉仕がペリーの信条であった。
2. 明治六年8月ペリーは三田へ医療巡回に出掛けた。三田では湯の山町の木村強邸跡に診療所「慈善病院」として、地元の若林元昌(主事)をはじめ五人の医師有志による独立病院が開設された。ペリーはここを二ヶ月に一度訪問、午前は祈祷会と診療、午後は医療と宣教に成果をあげ、また藩主九鬼隆義の主治医でもあった。
3. 明治六年春、隆義の長女肇が五歳で病没したが、その枕元にペリーが付き添い、当時の新知識で手厚い看護がされ、こうした尽力に対し九鬼家は死を悼み、デーヴィス牧師によるキリスト教式の葬儀が行われ、墓碑に In Memory of Eldest Daughter of the Noble Kuki Takayosi とある。

Ref. D p51-52, 65-66, 69-70, 73; I p23-24; J p55-56

## 第38幕 ネ申戸移住・学校発足

### 第1場 神戸移住

- 1・早くから洋装断髪を施行し、西洋風生活を入れ、英語学習を進め、宣教師との交遊を持ち、将来神戸港が開けるとの諭吉の教えもあった、九鬼隆義とその妻園子、嫡男隆輝ら家族、主な家臣は、諸品物を売り払い、明治五年 11 月三田を去り神戸に引っ越した。
- 2・明治四年から西運上所前の波止場の改修が、神戸港の中心部に流れ込む生田川の付け替えの大仕事を伴い行われた。一旦降雨があると土砂を流出、両岸の家屋・田畑に被害を及ぼし、右岸の居留地に住む人々からも治水対策の要望も出されていた生田川を東約 1Km 振って付け替えるのである。それによる旧川尻の土地は民間に売却された。
- 3・九鬼隆義は明治六年 3 月に神戸花隈の別邸宜春園に居を構えたが、投機の根性のある家臣小寺泰次郎は理財の才を奮い、これらの地所を二束三文で買い占め神戸の大地主としての基礎を造った。神戸発展に伴い地価高騰して莫大な利益をあげ、神戸の所得番付で、隆義と泰次郎の旧三田藩主従が一二番を占めるようになる。

Ref. C2 p122, D p8, P36, P51-52

### 第2場 宣教師と英学校、教会

- 1・英語を通じ港外事情を学ぶ意欲的な前田泰一等の青年八人が結社金二円を拠出して、明治五年 12 月宇治野村(現神戸市中央区下山手通)に英語教授所を開いた。デーヴィスを主任教師にして四人の宣教師が協力し、聖書講義にはグリーンが当たった。
- 2・明治六年 2 月には「切支丹邪宗門ノ儀八堅ク御禁制タリ」の高札が撤去されたので日本人相手の宣教活動も活発となった。前田泰一は西国街道沿いの市場町に聖書やキリスト教関係書籍の書店を 4 月に開店した。やがて 9 月から毎日曜日午後には店の奥で聖書研究・日曜礼拝が行われ、グリーンが司会し、元町講義所と呼ばれた。毎回出席したのは九鬼隆義とその夫人園子、前田泰一とその妻ちよ等十余名であったが、やがて五十名前後の人々が集まるようになり、教会へと発展した。
- 3・明治七年 4 月 19 日には宣教師達のまわりに集まってきた日本の青年を中心に、アメリカン・ボードによる組合派系統の日本人で第一号としての摂津第一公会(後の神戸教会)が誕生した。(長老派教会としては明治五年 3 月横浜公会[横浜海岸]、明治六年 9 月東京公会[新嘗]が居留地外人の教会の性格で設立)当日はグリーンにより、元三田藩士前田泰一とその夫人ちよ、佐治職(つかさ、三田英蘭塾に学ぶ、宇治の英学校に山道を越え通う。歯科医を志し、明治七年グリーンと共に横浜に行き学ぶ。ここで帰国の新島襄に会う)、鈴木清、甲賀ふじ、九鬼隆義の実母りさ等 11 名が受洗。この日青年達が礼拝の主要部分を担当、前田泰一編「組合教会賛美歌」が用いられ、教会形成に日本人信徒の際立った主体性を示した。

Ref・D p52-53,p105; J p51-56,p67-68

### 第3場 女宣教師の来神と女学校の設立

- 1・明治六年 3 月 31 日女性宣教師 E. タルカット(36 歳)と J. E. ダッドレー(32 歳)が到着し、神戸のデーヴィス宅に同居し、夏には有馬の九鬼家避暑宅にも滞在し、三田の婦人達に話し、接触する機会も得た。神戸では同年十月花隈で家を借り(旧三田藩士前田兵蔵宅)、旧三田藩の男女子弟に、本国での教師の経験を生かし、英語と唱歌を教えはじめ、「背筋を真っ直ぐにして歩きなさい」と叱咤もした。翌年(明治七年)4 月には生徒が増え手狭になり、私塾は隆義の配慮で北長狭通りの旧三田藩白洲退蔵の持ち家に移った。
- 2・明治七年 8 月、有馬で九鬼夫人を知り、三田の婦人とも顔見知りとなったダッドレーは、デーヴィスを助け三田に出かけ、三ヶ月の伝道をした。その神戸へ帰る時、旧三田藩士の子から神戸で教育を受けたい希望が相次ぎ、隆義からも旧領三田の子女達の教育依頼があった。
- 3・それでは寄宿制の学校が必要と、両女宣教師は本国の伝道会に訴え募金を集め、日本人有志(隆義、白洲退蔵、鈴木清、前田泰一等)も寄付をし、明治八年 3 月神戸・山本通り諏訪山梅林近くの土地を鈴木清名で買収、建築が始まり、10 月「神戸ホーム」(神戸諏訪山女学校の木造二階建の瀟洒な洋館が完成、両女宣教師は寄宿生 10 人と移り住み、通学生 24 名とともに授業を開始した。これが後に 13 年「神戸英和学校」と改称、明治二十七年と再改称の神戸女学院(現在西宮市岡田山)の創設である。
- 4・明治 13 年ダッドレーとその従姉妹 M. J. バローズにより花隈に発足した女子聖書学校(神戸女子神学校)は後に聖和大学に発展した。

Ref. p52, P107; J p59 - 66; 竹中正夫「ゆくてはるかに - 神戸女子神学校物語」(2000 年)p23-32

## 第 39 幕 摂津三田教会・幼児教育

### 第 1 場 三田に教会、新島襄

- 1・神戸に摂津第一公会が設立された翌年、明治八年(1875)7月25日、旧三田藩主の九鬼家の大広間に十六人のキリスト信者が集まって、公会という名の教会設立を話し合った。神戸に続き大阪に摂津第二公会が明治七年5月24日設立されていたので、これは摂津第三公会(三田教会)にあたる。ギュリックを仮牧師に、沢茂吉(1853年生、川本親子の塾で英語を学び、17歳で上京慶応義塾へ入学したが、家産が傾き中退、母の手元に呼び戻されたが、衣類を抵当に育牛練乳法を修め、神戸の牧場で管理)を長老に、丸井清七を執事にそれぞれ推薦した。受洗者は16名、参会者150名で、他の教会に比べ土族とりわけ女子が多く、ダッドレーの力によるとして特筆される。
- 2・明治十年9月7日、教会堂の建築が本町上(市民病院前の交差点東南付近)に完成し、献堂式が行われた。この公堂建築総費用517円70銭の内129円50銭はアメリカン・ボードの寄付であった。この日の演説者は、デーヴィス・沢山保羅・グリーン(三氏)で、献堂祈禱はギュリックが行い京阪神からの参列者併せて約250名で、司会は同志社の創立者新島襄であった。
- 3・新島襄(1843年生、元治元年1884年密かに函館より米国商船で渡米、アーモスト大学に入る。明治四年岩倉具視の欧米諸国視察団に同行した文部理事官の田中不二麿は折しも在米中の新島襄を通訳として欧米教育事情を視察)は明治四年(1871)秋アンドウバー神学校に留学中アメリカン・ボードの年次総会で日本に出発直前のデーヴィスに逢い、「自分も遠からず帰国し、キリスト教のために働きます」と決意を述べている。なおアーモスト大学では、日本でのアメリカン・ボード伝道の初めとなったグリーンに、それを勧めたようである。
- 4・新島襄は明治七年アメリカン・ボード65回年会での英語演説で、日本にキリスト教主義学校の創設を訴え浄財も得て、11月21日横浜港に、約十年間の留学を終え宣教師資格を持ち帰国した(翌日歯の治療に行き佐治職に会う。明治八年1月大阪・川口のゴードン邸に止宿し、大阪での学校創立運動に取り掛かったが許可がおりず、神戸のデーヴィスやベリー宅で宣教師達と共に生活し、三田での伝道を佐治職と共にやり、摂津第三公会(三田教会)設立に尽力した。
- 5・明治八年6月勝海舟の紹介で京都府顧問山本覚馬(目を患い失明、明治12年妹八重子が新島と結婚)に逢い、同志社を結成、デーヴィスは新島の考えに賛成して、10月19日家族と共に京都に移り、神戸を去った。同年11月29日、官許(これは田中不二麿、第46幕の九鬼隆一関与)「同志社英学校」の看板を掲げて京都下寺町通丸太町上の旧華族高松保実邸の半分を借り授業を開始した。神戸よりデーヴィスに従い京都に来た最初の学生八名は杉田勇次郎、佐治職など元町講義所に学んだ元三田藩士が占め、杉田勇次郎は柳原のデーヴィス宅に寄留した。明治九年9月、相国寺前(薩摩屋敷跡)に校舎二棟、食堂一棟を建て寺町より移る。[今出川校他]。この時熊本洋学校(バンド)生徒30人が入学した。

Ref. D p53-54, p77, p91, p137; | p22, p24; J p47-50

### 第 2 場 七一雑報、村上俊吉

- 1・明治八年12月旧三田藩士村上俊吉(1847年生、父母を若年で失い三田藩江戸詰め医師村上恒庵の養子、養父逝去で武士。明治五年上京し、福沢諭吉に私淑、横浜丸善に勤務、支那訳聖書「天道淵源」より信仰に入る。佐治職、明治七年隆義、白洲の勧めで神戸に帰り、志摩三商会に勤務。摂津第一公会で熱心な信徒、明治八年5月洗礼を受ける)を編集長に、我が国最初のキリスト教週報「七一雑報」(ギュリック主宰)発刊。
- 2・村上俊吉は明治九年に結婚、兵庫木戸町に間もなく転居、講義所を開始、その主任。これは兵庫教会になり、明治十年デーヴィスの按手礼を受け、兵庫教会牧師(組合派教会で沢山保羅に次ぐ2番目)となる。明治十三年3月にはギュリック牧師帰国に伴い、三田教会牧師も兼任した。

Ref. Op54・P61・P72・P77

### 第 3 場 幼児教育の開始

- 1・それぞれの子供が手元を離れていくと、孫の教育も関心となり、明治十九年(1889)5月摂津第一公会(神戸教会)婦人会の親睦会でキリスト教主義の幼稚園設立が急務となった。その実現のため資金獲得に努めることとなり、手芸品(「ミカド人形」はアメリカにも輸出され評判)を作り、明治二十年には幼稚園設立のため有志の婦人後援会も組織され資金を積み立てた。
- 2・幼児教育専門家を招きたいと、当時休暇で帰国中のデーヴィスに依頼、その講演を聞いたシカゴ幼稚園長のA.L.ハウ女史35歳が明治二十年神戸に派遣された。ハウは学校が出来るまで日本語を勉強(高知からの杉浦信子が助ける)。先ずすぐれた保母の養成が大切と痛感して、明治二十二年完成した中山手通の校舎で頌栄(日本人の命名Glory)保母伝習所を10月22日開設、11月4日に幼稚園も開園した。

Ref. D p106, p127-130; 頌栄保育学院「幼児教育の系譜と頌栄」(1996)p6-2

## 第40幕 志摩三商会

### 第1場 神戸の変遷

- 1・神戸は慶応三年暮れに兵庫開港とともに外国人の居留地が設定され、翌明治元年に神戸町改称。開港以来五年間は運上所とばれた税関もあったが、まだ鄙びた漁村であった。明治四年から神戸港中心部に流れ込む生田川の付け替え大工事が、運上所前の波止場改修と共に行われた。一旦降雨があると土砂を流出、両岸の家屋・田畑に被害を及ぼし、右岸の居留地に住む人々からも治水対策の要望も出されていた生田川を東約 1km 振って付け替えた。それによって旧川尻の土地は民間に売却された
- 2・明治五年漸く地所永代売買が解禁された。地租改定で地価が決まり、土族が土地を買えることとなり、開港場付近に目をつけたのが三田から来た、明治四年三田藩知事を免ぜられた九鬼隆義、それに重用された白洲退蔵と利に敏い小寺泰次郎の主従トリオであった。

Ref . D . p36 ; Jp43

### 第2場 志摩三商会設立

- 1・福沢諭吉より外国図書・医薬品などの販売の丸屋商社との共同事業で商業の有利性を聞かされ、一身独立の為の転進を勧められていた九鬼隆義は、明治五年 9 月時勢の進みによって、家臣の間での商社建設の気運が興ったので、改革派の白洲退蔵、小寺泰次郎、岩根静蔵(スナイドル銃購入による英国式軍制度の司令、三田藩で最初に断髪、明治五年兵器は兵庫県に環納)、前田兵蔵(幼名又太郎で神戸の勝海舟の海軍操練所に入り、坂本竜馬のもと成績優秀で、嗣子が前田泰一)等 15 名を社基とし、九鬼の先祖の地志摩に三田の三をつけた志摩三商会を、神戸栄町三丁目に開業した。実質的には白洲・小寺によって運営され、支配人には鈴木大路が任命された。
- 2・神戸で最初の輸入商社志摩三商会は看板に、『醫學西洋並びにキカイ所』と書いてあった。外国の医薬品の取り扱いを中心に、食料品・雑貨・薬種等の販売をしたが、神戸では志摩三商会のみだったので商売は繁盛した。その経営が永く続けられた要因は、神戸中心地の旧生田川々尻の土地を自己資本で買い占め、貸金業を興し、薬品販売業との二大事業を経営基盤としたことで、これで武士の商法をうまく克服した。
- 3・当時の役員給は社長白洲退蔵 40 円、副社長小寺泰次郎、岩根静蔵 25 円、前田兵蔵、鈴木大路等 15 円であった。明治十三年栄町五丁目に移転、この年支配人鈴木大路死去、後任は前田兵蔵次男向井正次郎。明治十五年白洲退蔵が退職して官界に入った。新たな陣容で努力したが躓きが生じ、他事業への拡大も画策したが殖産政策は失敗に終わり明治二十五年薬店業務の志摩三商会は九鬼家に収められた。

Ref . D p8 , P38 , P41 , P52

### 第3場 七曜丸

- 1・九鬼家の海運事業として、北海道に栗田寿吉を派遣して北海道物産買い付け輸送を開始するに当たり、西洋型帆船の発注、松島寺島町河古造船所で明治十二年に竣工、九鬼隆義は九鬼家家紋に因み、七曜丸と命名した。
- 2・初航海として北海道小樽に航行し、鮭・昆布を満載、帰りの航海は下関をまわり帰港した。本船積み荷は兵庫の北風庄右衛門店で売却し、高利益を得て満足した。
- 3・第二次北海道航海に明治十三年年 8 月 15 日、七曜丸は母港を出向、播磨灘を航行中、暴風に遭い、辛うじて江島真浦の港口に碇泊したが、夜半に風向き変わり、約一里半流され転覆し、船長・会計二人は溺死、他の六人の水夫は他船に救助され、残りは離島に泳ぎ着いた。その後代船で回航し塩、雑貨類を売り、既に買い付け済の塩鰯(ぶり)を積み、復路に錨を抜き出航しようとした時、天候悪化し風向き変わり波止場に衝突・破損・転覆する事故を起こした。これら度重なる大損害を受け廃業した。
- 4・九鬼隆義は志摩三商会本来の事業以外に、神戸で牧場を開いたり越後での石油採収事業・精油事業にも着手するなど、多角経営への事業拡大をしたが、殆ど失敗した。

Ref . D p49

## 第41幕 九鬼関係者の活動

### 第1場 白洲退蔵と小寺泰次郎

1. 白洲退蔵は志摩三商会を退職して、明治十五年8月福沢諭吉も設立に協力した横浜正金銀行の官選の取締役・副頭取に就任し、翌年1月頭取になった。しかし銀行局長の加藤氏と衝突し、在任僅か二ヶ月で副頭取小泉信吉と共に辞任、その後は大蔵御用掛となり、明治十七年より岐阜県大書記官に在任中は地方殖産のため功績を残した。明治二十三年思うところあり職を辞し東京に帰り、旧藩主九鬼家の家政について世話をし、明治二十四年2月九鬼隆義病没の際は寝食を忘れ尽くし、過労回復なきまま9月1日病に罹り13日に63年の生涯を終える。なお三田藩士族の現状とその子弟を思い、九鬼家地下局の資金貸与を制度化する必要を隆義に説き、奨学金制度の骨子を作り上げ、それは九鬼隆輝子爵に引き継がれた。福沢諭吉も先生と呼び交流のあったことはその孫白洲次郎(その墓碑は妻正子と共に心月院)の住居「武相庵」(町田市鶴川に公開)に諭吉の書が掲げてあることでも判る。
2. 小寺泰次郎は、志摩三商会設立後、やがて退職して独立、貸金業及びその他の商業を営むこと数年、その資本蓄積されるや地所の買収に投資、それらは市の発展に伴い中核の市街地になり、隆義と共に神戸最大の大地主、旧藩主を凌ぐ多額納税者となった。移り住んだ中山手五丁目の屋敷は蘇鉄園とも呼ばれ、昭和十六年に神戸市が譲り受け、相楽園と名付けられ現存(明治四十三年長男謙吉が建てたユニークな厩舎が園内に現存)。地方の公職(県会議員、市会議長、神戸区会議員)にはついたが、中央政界進出の野望なく、手堅く儲け、巧みに利殖した。学校関係への寄付と独立自由の学校の建設をもくろみ、故郷三田町狭間ヶ丘に土地も買収したが、明治三十八年70歳で病歿した。その遺志を長男謙吉(1877生、米国にも留学、衆議院議員、昭和戦後の公選神戸市長)が受け継ぎ、歿後7年にして明治四十五年、三田中学が設立開校した。

Ref・Dp15、P75

### 第2場 鈴木清と牛肉缶詰製造所

1. 鈴木清は嘉永元年(1848)三田に生まれ、川本幸民親子の英蘭塾に学び、明治五年志摩三商会設立に参画、両親を三田に残し神戸に移り勤めたが、武弁の人で商機に通じず、事業経営の一步に躓き退職した。デーヴィスにつき神学を学び、英語を研鑽し、明治七年設立の摂津第一公会の基礎を確立、グリーン仮牧師から洗礼を受けた。明治八年神戸ホーム(神戸女学院)開校を熱心に支持、この学校で神戸教会の嚆矢のキリスト教結婚式を挙げた。その後も殉教的熱誠で、日本で初代の布教に貢献した。
2. 事業の経営も忘れず、明治十一年当時海外製の色々な缶詰類輸入が侮れぬほど巨額に達し、海外に莫大な正貨が流出するのを憂い、自ら牛肉缶詰業を開始した。鈴木清は日本人の嗜好にも合うすき焼に似たものを缶詰に詰めた大和煮を考案した。何度も失敗を重ねた結果の完成品の試食を友人・知人を集め有馬温泉で行ったところ、缶詰が腐敗していた。自ら新聞にこのことを広告して製品販売を中止し、回収に努めた。顧客を欺かぬ良心、土魂商才と西欧のピューリタンのような企業家精神がバックボーンにあった。
3. 時の兵庫県令盛岡昌純の知るところとなり、牛肉の佃煮缶詰『大和煮』はヒット商品になり、『鈴木見勢諸缶詰売所』の名は全国に広まり、大いに事業は進展した。これは日本での缶詰製造の先駆けで、内外の諸博覧会で受賞、海外在留邦人への輸出、軍隊の食料品の需要も多くなり、鈴木清創始の牛肉缶詰業は大成功を収めた。

Ref・Dp135・P74

### 第3場 沢茂吉と牧牛

1. 沢茂吉は嘉永六年(1853)三田に生まれ、川本親子の英蘭塾に学び、慶応義塾にも入学したが、家産窮乏で中退、奈良県牧牛場で育牛、練乳法を修め、郷里に帰った隆義に命じられて六甲山系での牧牛を管理し、組合組織の製乳業を始めたが、牛の流行病のために失敗に終わった。他にも隆義は製塩・石油採取にも関与したが失敗した。
2. 明治八年摂津第三公会三田教会設立の日、母と共にギュリック牧師から洗礼を受けた。神戸女子英和学校では漢文・数学・習字を教える。明治十五年4月鈴木清の招きを受け、赤心社に入り、以後活動した。

Ref. D p8, P137

## 第42幕 北海道開拓（赤心社）

### 第1場 赤心社設立への道

- 1・明治十三年(1880)の頃になると、沃野広大で農牧に適し北辺の護りの北海道(明治二年7月開拓使設置、北海道と命名)には、土族授産の急から既に開墾社等が開墾に着手していた(NHKドラマになった「お登勢」に描かれた徳島支藩淡路から静内に入植)。兵庫県神戸港の鈴木清は、説得に応じた加藤清穂(神主の息子神戸のキリスト教信者達に講義すべく、行った時相知る)・橋本一狼(加藤の友人、現登別市の幌別村に明治十三年単独入植)と連名で、東京で「開拓雑誌」を主宰の学農社長津田仙(1837年生千葉佐倉藩士の子、安政七年20歳で蕃書調所に入り、慶応三年渡米、西洋農法を学ぶ。明治八年キリスト信者、明治九年学農社農学校を創設。娘海子は1864年生、明治四年北海道開拓使募集女子留学生で渡米、明治十五年帰国、明治三十三年には津田塾大前身の女子英学塾創設)に「北海道開拓会社を設立したいが、手続き等を教えてくれ」と、問い合わせた。その一問一答は「開拓雑誌」第六号に掲載されている。
- 2・明治十三年3月赤心社が設立され、同盟規則を作成し、4月に設立の趣旨を広告し、株式の募集を開始した。赤心の社名の由来は、報告の赤心を奮起するの意なきやと同盟規則結びにあるのでわかる。無資無産の人でも容易に入社できるよう、株金を小額にし株数も最低限に一株60円とし、毎月50銭積み立て10年を目途とした。官有地を開拓史から払い下げを受けた土地は、年期中は「株主一般の共有」すなわち社有とし、耕夫には相応の土地を割り当てて、開墾させ、労働に応じて給料を払い、収穫物は社の収入とした。
- 3・8月26日株応募者を集め、社長鈴木清副社長加藤清穂が選ばれた(創立記念日)。翌年明治十四年1月の株主総会では、株主から委員を選出、九鬼隆義、白洲退蔵も名を連ねた。

Ref. J p73-87, p189-194; D p8, p55-56, p131-146

### 第2場 第一次移民・鈴木清の「北行日記」

- 1・本社を神戸栄町に置き、社長は本社に、副社長が現地に駐在することになり、副社長の加藤清穂は明治十三年10月札幌に行き、開拓使から地味の好悪・風土人情を聞き、各地を巡視し、良い土地を入手出来ないまま、日高国浦河郡に至り、その西舎村北部の荒れ地を当初着手の場所に選定した(これが開拓への経験不足で計画性を欠いた)。
- 2・第一次50余名の移民は、途中暴風雨にも遭い函館に20日間滞在、明治十四年5月19日浦河に到着したが、入植した移民は途中滞在費自弁など金銭にも困り出稼ぎ(昆布収穫)もして、充分集まらず、経験・器具も不足で、社長視察の頃は新墾地は七反に過ぎなかった。
- 3・第一次入植状況視察に、鈴木清は加藤副社長の妻子も伴い、明治十四年6月28日神戸を船で発ち、東京に立寄り、函館で下船、7月31日浦河に着く。早速開拓地視察、あまりの業績不振に啞然とした。加藤の報告を聞き状況を知り、直ちに対策をたてた。
- 4・鈴木清の「北行日記」には、その旅行全容が詳しく書かれている。札幌に行き開拓使の諸課に行き種々陳情した。加藤は馬に乗り馬と共に倒れ、病院で手当て宿で静養。加藤の痛みも軽くなったので、二人で馬に乗り牛を追いながら浦河へ。途中加藤と口論。浦河では耕夫引き戻し策に日を費やし、9月になり演説もして心掛けを述べ、新しい器械を使い牛による新墾も始め、次第に熟練し発奮もし、宗教教育もした。移住者の住宅は一戸六坪で四坪半に床を敷く。元浦川の奥も視察し、11月神戸に帰った。

Ref. J p87-99, p121-158; D p132

### 第3場 加藤から沢茂吉へ

- 1・神戸に帰った鈴木清は、新たな開墾地に元浦川流域を選び、第二次移民募集を開始。開拓地管理に適する人物を探し求めた。たまたま神戸で製乳業を営み牧畜の知識を持ち、旧三田藩の明治八年三田の教会設立の際受洗した沢茂吉に目をつけ説得、沢はそれに応じ母や妻の同意も得て意を決し、明治十五年4月赤心社に入社した。
- 2・前年に入植した幌別川流域(第一部)は副社長加藤清穂にまかせ鈴木清選定の元浦川流域(第二部)は沢茂吉を部長に、和久山磐尾(三田で1836年生、明治十三年神戸教会で受洗。息子3人も連れ入植)を書記に任命、明治十五年4月15日神戸出発、向井錠太郎(三田で1860年生、神戸・大阪で店員として勤務していた)・祐蔵(三田で1864年生、同志社に入学、学費続かず退学、鈴木の缶詰会社勤め)の兄弟を含む80余人の第二次移民を沢は引率、5月10日浦河到着。
- 3・明治十六年(1883)3月の株主総会で、副社長加藤清穂は現地開墾監督指導の失敗、事務管理能力の欠乏、落馬起因の病により皆の人望を失い辞任し、沢茂吉が後任に選ばれた。以後は沢が幌別川流域、元浦川流域の両開拓地を管理することとなった。(加藤は雑務係となり耕牛馬飼育担当をしたが3年後退社)。

Ref. J p95-98, P99-116, p205; D p132, p141-143

## 第43幕 開拓の前進・充実

### 第1場 荻伏地域開拓の進行

1. 明治十五年5月11日、元浦川流域に第二次移民が入地した日は、荻伏(おぎふし、アイヌ語オニウス由来、そこに木「標木」のあるところの意味、浦川と三石の境)開基の日とされている。はじめ米国から買ったソルキーブラウが使いこなせなかったので、開拓使の札幌育種場から教師を招き、その後耕牛や心墾・再墾用のスキを開拓使から払い下げてもらい指導を受けた。この年、募集株も2000株に達す。
2. 明治十六年は、3月に暴風雪による家屋損害ひどく、夏は日照り、8月バツタの害(地上に四寸も積み重なり、粟、稗、黍に損害)、秋は豪雨洪水で田畑冠水、家屋棟上浸水などと重なり、移民の意気は阻喪したが、沢は根気よく彼らを励ました。そのため年50町歩に近い新墾地を開き、百町歩に種蒔し、二千余円と予想外の収穫をあげ、将来に希望を見いだした。
3. 明治十七年には第三次移民が入植した。沢は社員・小作人指導と心田つまり信仰心による一致協力を求め、私立赤心小学校を教会兼用として建て、日曜日は安息日としてキリスト教講話や道徳など寺子屋式教育を始めた。明治十八年4月の株主総会には、会社規約の改正も提案され、議論の末、赤心社は無毛の土地を開拓し土地無き農民に与える開拓会社から、開拓地を労力だけの農民に貸し、小作料や収穫物から利潤を得る土地経営会社に変身した。明治十七年野深村ケバボロ地区に30万坪の放牧地を借りたが、牛馬を大量導入の混合農業が冷害対策と沢は考え、その実施の演説を明治十九年株主総会で行い、感銘を与えた。道産雌馬十数頭と南部産雄種馬を入れ、後に道庁から他種種馬の管理も任せられ、社員を真駒内種畜場に派遣、技術を習得、日高駒の育成が始まった。

Ref. J p205-215, p217-238; D p132-33, p137-138, p56

### 第2場 浦河公会設立から元浦河教会へ

1. 元浦河では粗末な草小屋(二間半、五間の粗末な小屋)を舞台に、平日は開拓地子弟対象の寺小屋式教育、日曜は安息日学校として聖書を手にし祈りの場としていた。明治十七年2月発起人総代和久山磐尾の名で、「米国の始祖ピューリタンにならぬ」の思いのもと、「学校兼会堂新築之趣旨」を配られ、寄付金集めが始まり、その資金で同年暮れには、学校兼会堂(間口七間、奥行三間)と牧師宅(間口五間、奥行三間)の二棟の木造平屋が完成、明治十八年元旦これを神に捧げる献堂式が行われ、引き続き教会設立のため牧師探しに行った。
2. 学農社出身の田中助(1856 越前丸岡生、明治十一年学農社入学キリスト教に触れ受洗。明治十六年赤心社入社、5月荻伏へ)は、樹芸係兼徳育係であったが、社長の了解を取り付け、牧師への白羽の矢がたてられた。
3. 明治十九年6月26日土曜日、神戸から来訪したギューリック宣教師と原田助(熊本洋学校出身、神戸女学院教授の後、神戸公会牧師)が司会し、午前中に按手礼諮問会が行われ、午後二時から本番の浦河公会設立式と田中牧師按手礼式が、約130人出席で行われた。和久山磐尾、倉賀野斐(姫路出身、師範卒業、小学校教員、赤心社創業参加第一回移民のリーダー)、湯浅誠明(赤心社創業参加、沢に同行、第二次移民)三人が公会執事に選ばれ、翌日受洗の男13人女5人と公会設立員13人で公会がスタートした。
4. 田中助は明治十八年結婚した妻栄子(神戸女学院第一回卒業生、二男三女母となる)と浦河で努力した。田中牧師が赤心学校の先生もし、栄子夫人が代教したが、神戸女学院にならって卓上ベルを鳴らし子供を教室に集め、学力は夫よりあったとのこと。なお牧師は明治二十四年頃の荻伏共進談話会の折、半紙を何十枚も使い熱気球を自作し空にあげ、皆をびっくりさせるなど積極的な行動力もあった。私立赤心学校は明治二十四年浦川尋常高等小学校荻伏分校になった。明治二十八年途中病気にも罹った田中牧師は両親に孝養を尽くすと辞任し、兵庫県に帰るが、その送別は盛会で、別れが惜しまれた。明治三十一年、浦河公会は元浦河組合キリスト教会と改称した。

Ref. J p109-117, p211, P219, p239-262; D p134

### 第3場 赤心社の発展

1. 創業期の手探り経営から堅実な多角的経営に転じ、明治十九年5月商店部も創設、道庁から借りた牛も放牧、鶏や豚を飼い、漆、桑等の苗を植え、明治二十年綿羊も導入、翌年からは養蚕も始める。日清戦争は影響を辺地にも及ぼし農産物の加工商品化、大豆をもとに醤油製造も手掛け、評判を高めた。なお昭和になりハッカ栽培も手掛けた。
2. 実質リーダー沢茂吉は、母犀子(現地で婦人会等で尽力)妻天以(貞)、共に荻伏に転籍、七男四女の子沢山となったが、明治四十二年57歳で歿。亡き後は吉夫、幸夫、茂夫ら、子供がよく赤心社維持に努めた。

Ref. J p220-235, p107; D p133

## 第44幕 新しい学の海

### 第1場 鉄道設計の九鬼隆範。

1. 第32幕第2場にあるように川本幸民親子の三田での英蘭塾入門の筆頭にあるのは33歳の越賀範三郎である。天保六年(1835)三田屋敷町に生まれ、藩校造士館で漢籍を修め、江川太郎左衛門に入門し砲術・用兵学を学び、大阪で欧州兵学、勝海舟の門にも入り更に大阪で測量術も修めた。英蘭塾では語学を通じ開化の新思想に目覚めた。
2. 明治三年4月家老九鬼隆継の長女保子を娶り、家督相続の養子(隆範)となる。同年できたばかりの大阪工部省に出仕、鉄道建築技手になった。明治四年信濃川、明治五年東京銀座通り築地町並み測量(新橋 - 横浜明治五年、大阪 - 神戸明治六年)、明治十二年長浜敦賀間、明治十三年東京高崎間等の測量、鉄道建設に従事した。最初は大阪土佐堀の官舎に住み、3人の子供、明治十四年東京に単身赴任、家族は三田に帰し、明治二十二年東京に家族。明治二十三年定年、日本鉄道会社嘱託、技術部監。隆範の家には鉄道測量細図数冊が残る。
3. 絵画も嗜み、写生的草花の絵の軸物があり、三田に帰ってからは菊花栽培、観菊会を開き、謡曲を好み同好者と常時會合。三田の隆範設計の和風の意匠基調、素朴な洋風手法を折り込んだ擬洋風九鬼邸は、今に残り、公開。明治四十一年肺炎で歿、74歳。

Ref. D p158

### 第2場 心理学の草分けの元良勇次郎

1. 川本幸民親子英蘭塾入門者の明治二年5月10日に杉田勇二郎(勇次郎)の名がある。勇次郎は三田藩校造士館教授杉田泰の次男として、安政五年(1858)11月三田屋敷町に生まれた。幼少より温和で少年の頃習字・漢語を学び造士館にも入学したが、明治維新で閉校、12歳で兵庫の寺子屋にも学んだが一年弱で三田に帰り、英蘭塾に入った。
2. 明治三年英蘭塾閉塾となるや兵庫に出て英語を学ぶが、明治五年1月末に父歿。一旦三田に帰った。同年夏避暑で有馬に滞在の宣教師デーヴィス一家を訪ね、キリスト教の説教を聞き感動、彼につき神戸に出てその宅に寄宿し英語を学び、宇治野英学校入学、明治七年摂津第一公会(神戸教会)でグリーン牧師より受洗した。
3. 明治八年新島襄が京都同志社設立(第39幕第1場)、賛成赴任のデーヴィスに伴いその宅に寄留、11月開校で、親戚の反対を押切り第一回生に入学、苦学自立の道。同志社三年間在学中、心理学に魅力(カーペンターの精神生理)。母も辛苦。明治十二年上京津田仙の学農社の教授。数学に興味、計算機発明に熱中。日本キリスト教青年会創立に役割。明治十四年東京英学校(明治十七年青山学院)設立に尽力教鞭。同年津田媒酌で元良米子と結婚 24歳入籍改姓。
4. 明治十六年米国留学。ボストン大学哲学、明治十八年ジョンズ・ホプキンス大学で心理学・哲学。1887年心理学会誌に教授との共著の「圧の漸次変化に対する皮膚の感受性」を発表。『英軒雑記』特待奨学生。新渡戸稲造らが下宿に泊まる(コイル巻き銅線でつながる帽子で寝る)。明治二十一年(1888)博士号を手にして帰国。
5. 東京文化大学生物物理学講師、正則中学校を興し学校経営、修身科授業。後進に熱誠。明治二十三年10月東京帝国大学文科大学(文学部)心理学教室初代教授。心理学研究に独創的実験器具導入。著書『心理学』、哲学雑誌に記事連載。講義では臨機応変引用して説く。帝大に24年、高等師範に18年、大正元年12月55歳で歿まで、真摯に教育英界指導。
6. 三田に顕彰碑。側碑に弟子の俳人荻原井泉水の”おもいよこしまなし”の句。

Ref.D p91 , p93-94; J p48-49; K p52-53; 北康利「北撰三田の歴史」(2000)p315-329

### 第3場 皮下注射の森鼻宗次

1. 英蘭塾名簿の五番目に盛華縫殿助の名がある。これは1853年三田藍本に医者森鼻嘉門(純三郎)の子として生まれた森鼻宗次である。緒方洪庵の適塾に義弟として協力した緒方郁蔵(本姓大戸、江戸で坪井信道の門に入り洪庵を知る。洪庵が適塾を開いて間もなく大坂に出て洪庵を助け、兄弟の交わりを約し緒方姓を名乗る)の独笑軒塾(南塾)に学び、三田の英蘭塾に入り、再び大坂に出て、浪速仮病院付属医学校に勤め、泉州堺県病院長を経て明治七年堺県医学校長となる。
2. 「薬物新論」(明治六年五月)「新薬摘要」(明治六年六月)「皮下注射要略」(明治六年九月)などの著作で知られ、退官後は、大阪において開業し、大いに繁盛した。

Ref. L ; 藤野恒三郎「医学史話」(1984)p294-295; 「適塾」No13 , p168-169; No16 , p133-135

## 第45幕 九鬼隆一の生い立ち

### 第1場 生まれ、養子縁組

- 綾部藩首席家老九鬼隆周(たかちか)は嘉永六年(1853)7月嗣子を亡くし悲嘆に暮れていた。見かねた綾部藩主隆都(たかひろ)は、三田藩主として養子に行っていた息子の九鬼隆義に適当な養子候補の若者の紹介を書状で依頼した。そこで背が高く目鼻だちもはっきりして幼くして男らしく目立つ、三田藩重臣星崎佐左衛門貞幹(面倒見よく、一揆でも百姓に人望)の次男貞四郎(嘉永五年1852年三田屋敷町で生)に目をつけ、父と本人を呼び出した。そこでその母の死の余韻さめやらぬ万延元年(1860)その養子縁組は成立し、数え年八歳で「福は内、鬼は内」という習わしの節分で、九鬼家の自覚を高めた。
- 綾部藩では藩校で学び、儒学者近藤東作につき経学をおさめ、成績もよく督学(優秀な卒業生に後輩の面倒を見させる制度)にも選ばれた。なお慶応二年(1866)には正式に家老九鬼家の家督を相続し、九鬼静人と名を改めた。若くして西洋流操練術も学び、綾部藩の権少参事や洋式練兵中隊長の要職にもつき、やがて山陰鎮撫総督として丹波街道の塚原口を警備している。なお、明治元年(1868)には同じ家老家柄の女性沢野豊(たみ)と結婚した。
- かねてから三田藩の九鬼隆義は福沢諭吉に私淑し教えを受け、優秀な人材の推薦も依頼されていた。これを聞きつけた九鬼静人は綾部から隆義に書状を出し、会いたい旨直訴した。まず大坂江戸堀の三田藩蔵屋敷に諭吉が招かれた際、給仕となって同席する機会を持ったが、明治二年5月には隆義に伴い東京・芝新銭座の福沢邸にも赴き、諭吉との繋がりができるようになる。

Ref. D p193 後半; J p46; K p4-8, 13-18; 北康利「北摂三田の歴史」(2000)p282

### 第2場 英蘭塾

- 上京の日も近く静人は綾部藩権少参事の免官を願い出、その後藩命で三田藩と松山藩に派遣され、これが綾部藩に対する最後の奉公となった。妻の豊は身重の体で若干気もかかったが、養父は「実家でしばらくゆっくりしてから上京するとよい」と配慮してくれたので、慶応義塾入学準備に三田に開かれた川本幸民親子の英蘭塾に行きたい思いもあり、三田の実家に里帰りしていった。
- 明治三年(1870)2月、英蘭塾に入学した。幸民のもとへの入門者名簿の中に「九鬼静人 343 三 125 綾部」とあり、343は幸民門人すべての通し番号、三田での入門者127名のうちで静人は最後から二番自であり、やがて川本清二郎の明治政府への出仕により川本親子の塾が閉鎖れたので、静人は教えを受けたのは僅か五ヶ月程である。
- 明治三年9月綾部に残した豊(たみ)が、男子を出産、哲造と名付けられた。しかし彼女には静人が自分の手の届かぬところにいってしまう思いがあった。
- 廃藩置県の実施の半年程前、静人は新調した草履に脚絆と言う旅姿で、見送りの親族縁者にも別れを告げ、三田屋敷町の星崎家をあとに、新しい一步を踏み出した。

Ref. K p14 - 15

### 第3場 慶応義塾

- 明治四年2月25日、静人は福沢諭吉自身が証人となり、慶応義塾に無事入学し、英語等を学ぶこととなる。この頃から九鬼静人は名を九鬼隆一に改め心機一転している。福沢の慶応義塾は、前年に三田(みた)の島原藩邸の借り受けと建物払い下げを受け、芝新銭座から移転し、明治四年4月12日には講堂も新築完成し、授業を開始した。
- 当時の慶応義塾では原書をそのまま使用し、語学を必死に勉強した。一週間後に入学の豊後佐伯藩二万石出身の矢野文雄は抜群の秀才であった。隆一は優秀だが秀才の類でなく、洋学を主体の塾になじめず、三上是庵という経学の塾にも通った。ここで身につけた漢学の素養は、後刻の多くの碑文の漢文、官僚時代の文章に役立った。
- 旧三田藩主九鬼隆義と諭吉の関係は深まり、明治五年の諭吉の三田訪問、九鬼の親戚おあい(あいつ)が諭吉の子供の世話に上京し福沢邸に滞在する[明治六年8月、11月の諭吉の隆義・白洲宛の書簡にあり]。

Ref. K p16 - 18

## 第46幕 官か私か

### 第1場 文部省・欧州派遣・家庭

1. 明治四年7月文部省が設置され、前年三田から太政官出仕となり大学少博士に任ぜられた川本清二郎も文部省の仕事をするようになっていたが、明治五年4月九鬼隆一も11等出仕として文部省に入り、各地の実状調査のほか、法・文・理科系の南校の監事となり(校長は隆一より10歳年上の辻新次、開成所に学ぶ[第28幕第2場])、10等出仕の外国人教師係としてその綱紀粛清に取組み、次いで7等出仕の医科系の東校の事務主任となった。国費が多額に要る留学生の選抜に問題のあるので「各藩留学生の廃止に関する建白書」を提出した隆一は、明治六年4月、渡欧(フルベッキ同行)、ロンドンではパリー留学の中江兆民とも討論説得、11月帰国した。それにより明治八年から、留学生選抜は厳正公平な新制度となった。隆一は欧米視察帰国後、明治七年1月6等出仕学校課長、4月文部少丞(学務局長)、11月4等出仕督学事務取扱、と異例のスピード昇進をする。文部卿は木戸孝允(桂小五郎)。
2. 明治八年の京都に同志社設立に際しては(第39幕1場)、新島襄は岩倉訪欧使節の通訳として米国より参加して木戸孝允や田中不二麿と親しく、両者の間にあって当時田中文部大輔の腹心で木戸にも重用され傾倒していた三田藩ゆかりの隆一の寄与があった。
3. 隆一は更に文部大丞、大輔代理(田中大輔が米国建国百周年記念博覧会に派遣され九ヶ月渡米のため)、大書記官に昇格する。なお隆一を重用した木戸孝允は明治十年5月26日死去した。(2月には西南戦争勃発)そして明治十一年、パリーで開催の万国博覧会への審査官(総裁)として2月5日渡航(5月大久保利通暗殺)。翌年5月8日帰国、明治十三年2月文部少輔(文部次官相当)に28歳の隆一は栄進した。
4. 隆一は、文部省でてきばき仕事に取組み断行し官途を昇っていくが、家庭では妻豊との生活にわずらわしさを感じ、元芸者が妻の木戸孝允(昔、幾松といわれた気品のある松子夫人とは木戸邸訪問挨拶)、伊藤博文もと思い、京都の祇園で遊ぶ機会もあった。そこで一人の芸者杉山波津(後の初子、1860年生)と運命的な出会いで魅せられ、農に黙って、彼女を落籍し屋敷に小間使いという名目で置いた。やがて時間はかかったが農と離婚、明治十六年5月結婚、同月長女光子が誕生した。  
Ref. K p19-21 p33-42, p42-46, p60-63

### 第2場 明治十四年政変・官か私か

1. 国会開設の運動が拡充の明治十四年、大蔵郷・参議の大隈重信はこの機会と、明治15年に憲法発布、十六年国会召集の意見書と私擬憲法国会開設要目を用意した。起草は太政官大書記官矢野文雄。これが左大臣有栖川宮熾仁親王に密かに献呈されたが、直ちに三条実美、岩倉具視に話され、内務郷・参議の伊藤博文に諮られた。大久保利通亡き後の伊藤・大隈拮抗時代に当たり直接陛下に奉呈しない不自然な振る舞いに薩長の参議は罵り、急進過ぎると結論、深夜の内閣会議で大隈放逐と明治23年国会召集の御裁可を得て伊藤の地位を不動とした。
2. この政変で大隈のシンパであり自由民権派の牙城であった慶応義塾には種々の徹底した弾圧があり、矢野文雄はじめ福沢門下の官僚は一斉に粛清され、以後は東京大学出身が主流となる。福沢先生の軟弱で理想に過ぎると考えて国家主義的になっていた隆一は薩長藩閥の官途に止まった。  
Ref. K p100-115, 121-125

### 第3場 米国特命全権公使・福沢諭吉の評価

1. 明治十七年隆一は駐米特命全権公使を命ぜられ(文部省には欧化主義伊藤博文の意で森有礼が入り、明治十八年文部大臣)横浜港から伊藤博文初め政府要人の盛大な送別を受け、説得した妻初子(子供は日本に残す、米国では優美で有名)と共に、ワシントンに旅立った。
2. 官途で出世する隆一への諭吉の評価は、明治十七年9月11日友人の村井保国宛の書簡にある。「今回九鬼隆一米国公使として渡航致し候に付、御含みまで申上置度義は、御承知も可有之候、同人は舊撰州三田藩士某の二男にて、丹波綾部藩士九鬼の家に養子に参候者にて、明治初年本塾に入り、読書は不得手なれ共性質伶俐にて、老生は本と三田藩主と懇意、傍ら隆一も自ら近々しく致し、身の内外の有様までも語る交際、その後官途に付候ても不相替拙宅へ出入り、家人同様に致し居り候處、三、四年前より何か本人にインテレストある事とみえ頓に往来を絶ち、年始寒暑の無沙汰は無論、病気の節に見舞いにも参らず、是は変な事とは存知候共、痛痒を感じるほどの義にも無之、殆ど忘れたる有様に居候處、過日突然来訪、頻りに無沙汰の申譯抔いたし、殊に少年の者を近付けては不安少なからず、如何となれば無知の少年、只管これを信じて之に依頼するも、己が利害ここに去れば旧誼を棄てること弊履の如くなればなり。勿論彼も官海中の一人、藩閥は無し学問は無し、只交際の一藝今日まで立身したることなれば、心配多き事ならん。時としては反覆表裏、人間交誼の徳誼を破るの極端に達せざれば身を全うするの難き場合もあらん。この點より觀察を下せば亦憐れむべし」と。長男福沢市太郎宛同年9月8日書簡では「九鬼隆一米国公使として本月14日の船にて参候よし、同人も三、四年来宅へは頓と参らず音信不通の處、過日久々にて来訪、何か無沙汰の申訳抔致居候得共、此方は固より頓着可致譯もなし。就いては貴様方兄弟が米国へ在留致すとも、別段何も依頼不致候間、その心得を以、特別附合致すに不及。一切親密附合は無用の事に候。」とある。  
Ref. K p132 - 146

## 第 47 幕 美術と博物館(文化行政の海)

### 第 1 場 フェノロサ・岡倉天心と隆一夫人問題

1. 福井藩から開港した横浜に移住していた岡倉家に、1862 年覚造(天心)[後に英語学で有名な由三郎その弟]が生まれたがその母は八歳の時(明治三年)末子産後に急逝した(隆一に似た幼児体験)。九歳でヘボン開校の英語学校に通い、明治六年神田一ツ橋の官立外国語学校入学、翌年新設の東京開成学校再入学。明十年東京大学文学部へ編入。明治十一年米国よりフェノロサ(ハーバード大学卒業、モース紹介)25 歳新婚早々が教授に着任。天心は生徒のほか抜群の語学力で彼の通訳。明治十三年天心は基子と結婚。
2. 文部少輔の隆一の知遇を得た天心は、文学士の称号を得て卒業、文部省に入り音楽取調掛。洋楽重視の伊沢修二に屈辱感。専門学務局内記課に異動。日本美術礼賛論のフェノロサに隆一・天心は大さな影響を受ける。明治十五年 5 月龍池会講演会「日本画は洋画に優れる」(『美術真説』)。狩野芳崖・橋本雅邦の発掘。明治十七年法隆寺夢殿の救世観音調査。古社寺保存運動(福沢諭吉反対)。
3. 美術学校設立を念頭に文部省に委員会設置(委員長浜尾)、天心主幹、狩野芳崖、フェノロサも委員。明治十九年、天心は美術取調委員としてフェノロサも同行九カ月間の欧米出張をする。
4. 明治二十年、岡倉天心はフェノロサとの欧米出張の帰途、米国に立ち寄り当時公使の九鬼隆一を和装で訪ねた。ここで異国の慣れない生活で心身疲弊した初子夫人を東京に送り届けることを託され、東京までの約 30 日間に両者は胸襟を開き恋仲となった。同年 11 月 28 日隆一も賜暇帰国したが、やがて天心・初子ともそ妻、その夫と別居、同棲は公然となった。明治二十一年 2 月 15 日初子は、後に『いき』の構造』などユニークな著作のある哲学者として有名となる九鬼周造を生む。

Ref. K p72-97, p143-147, p149-152

### 第 2 場 帝国博物館総裁・古美術調査

1. 隆一は帰国後、宮内省図書頭に任命され、全国宝物取調局委員長にも就任した。また明治二十三年開催予定の第三回内国勲業博覧会審査総長を命じられた(第四回審査総長も隆一)。明治二十一年暮れには宮中顧問官も兼任した。そして明治二十二年には帝国博物館総長(宮内庁管轄)に任命され、天心も理事、四部構成(歴史・美術・工芸美術・工芸)の周到な隆一の構想は、行政的に具体化、帝室技芸員選択委員にも就任、本格的に美術の世界にのめりこんで行った。
2. 東京美術学校は明治二十二年開校した(校長は浜尾新、校長事務取扱天心、翌年 28 歳で校長、校服に闕腋の袍)。詩情と奇行、思想性のある批評眼の天心。愛弟子に横山大観。フェノロサは明治二十三年ボストン美術館東洋部長に帰国。
3. 九鬼隆一は、明治二十六年コロンプスのアメリカ発見 400 年を祝うシカゴ万国博覧会の事務副総長に明治二十四年暮任命される。洋画家団体「明治美術会」の出品拒否。黒田清輝帰朝と「白馬会」、天心は黒田を美術学校西洋画科に起用。明治二十八年第四回国内勲業博覧会出品の黒田の裸体画論争に審査総長 隆一の決断。
4. 隆一は美術保護に情熱をそそぎ、美術行政でその権威をみせるようになり、帝室奈良博物館建設開館での官僚的行動もみられる。他方「古社寺保存の請願」に応じ政府を動かす(明治二十九年諮問機関の古社寺保存会会長になる)、その法制化に成功(現存の国宝保存法)した。明治二十九年男爵に。
5. しかし欠点は初子・天心の愛憎問題もからみ隆一は漁色家だった。天心も明治三十一年帝国博物館理事兼東洋部長を辞し、東京美術学校校長を辞任。支持者と日本美術院を創立。明治三十七年ボストン美術館東洋部長。隆一も明治三十三年初子(その後入院)との協議離婚が成立した。

### 第 3 場 三田博物館・書画骨董蒐集

1. 九鬼隆一が提唱し、三田関連文化人達による博物館協会により、有馬郡役所を改造し西洋風瀟洒な二階建が建設され、隆一の集めた多くの古美術品を一堂に大正三年 12 月公開した。博物館には書画・彫刻・陶磁器類が多く、目録には天平時代の仏画・空海の龍猛菩薩・伝教大師の金色不動尊、雪舟・応挙・北斎・牧谿・光悦・探幽・光琳、近代では司馬江漢・橋本雅邦などの書画、多数の達磨画がある。当時我が国では博物館は数少なく、東京、名古屋からも訪れるなど、多数の来館者があった。
2. この博物館は、大正十四年有馬郡町村会に移管され、九鬼隆一が昭和六年 8 月 18 日逝去後、戦時中となった昭和十六年閉鎖された。管理人の辻井元三田町長が展示品を九鬼家に運ばせたが量が多く、14 人の人夫で数日を要した。隆一自筆の碑文は今も三田市役所市民会館脇に残る。書に巧みであった隆一の書は、宮島の巖島宝物館入口の額、京都の島津創業記念館、將軍塚などにも残り、一万点発願の達磨図も多くある。

Ref. D p193, J p46-47

# 第48幕 歴史につながる現代の海

## 第1場 歴史のしるし

1. 鳥羽から九鬼氏が移封以来の、二の丸、茶屋、武器倉、煙硝蔵などの三田藩本拠は、今三田御池に近く、県立有馬高校の敷地となり、道路を隔ててその隣の市立三田小学校付近は九鬼藩主の陣屋があったところで、その校長室近くには最近の発掘で台所の一部が発見され原型のまま保存されている。
2. 鳥羽より移封された藩主は以前からここにあった梅林寺を増改築、天翁山心月院と寺号を改め鳥羽の菩提寺常安寺の覚雄是の和尚を開基に、九鬼家代々の宗廟とした。その後(寛文五年 1665)、山号を清涼山とした。境内の本堂に近い一郭には、鳥羽城にいた守隆・良隆以下、三田移封初代の久隆に続く幕末の隆国・隆徳・清隆に至る歴代藩主とその係累の墓碑が集まっている。他方それから坂を登った丘の上の広大な公園墓地には、最後の藩主であった隆義(明治二十四年歿、明治二十年神戸教会で受洗)の墓を中心に、明治四十年その長男隆輝(子爵)が菩提寺である心月院と和解して、東京にあった代々藩主の奥方の墓も含めて、散り散りになっていた家族の墓(英文の隆義長女肇の墓も)を集めた墓域がある。
3. これに至る左側に堂々とした男爵九鬼隆一の墓と、大正八年隆一が県道横山峠脇に建て後ここに移された大きな「景墓碑」と、こじんまりした隆一ゆかりの人々の墓の一郭がある。敬慕費には木戸公・大久保公・岩倉公・フルベッキ先生・福沢先生・加藤弘之先生・星崎顕考・武藤顕叔父・琢磨顕兄それぞれの尊霊の名がある。
4. なお心月院墓地には、赤心社で沢の配下として第二次入植団に参加、三田藩士和久山磐尾の墓(裏に大正十二年9月13日永眠、すべての事に与り神に感謝す八十六歳卓章の句)、長女喜素(キソ)の墓も並び、また白洲家墓地には退蔵の孫の白洲次郎・正子の墓もあり、史跡霊園の趣がある。
5. 旧市内の屋敷町とその周辺には、白洲退蔵出生地、金心寺跡(川本親子の英蘭塾があった。現在は三田歴史資料収蔵センター、元良勇次郎(杉田泰次男とし生まれる)出生地、川本幸民出生地、小寺遊園地(小寺泰次郎屋敷跡)、明治の建築(九鬼隆範が設計の自邸)、川本幸民顕彰碑、元良勇次郎顕彰碑がある。
6. なお本町通り等には、今なお明治の頃からの木造民家もみられ、往時が偲ばれる。

## 第2場 新しい住宅群の展開

1. 元は田園の丘陵地に過ぎなかった旧市内の東北の丘には、今高層マンションの群も林立する住宅群が上空から見ると海のように広く長く広がっている。地域別にそれぞれ、フラワータウン、ウッディータウン、カルチャータウンと呼ばれており、町名も武庫が丘、狭間が丘、弥生が丘、富士が丘、すずかけ台、あかしや台、けやき台、ゆりのき台、さらに学園何丁目と新しくつけられた。
2. これは戦後の「環境を生かしたモデル近郊都市へ」と題した北摂ニュータウン計画の具体化で、1988年から1997年の十年間に、人口伸び率は我が国での全国一を達成、88年5万未満の人口は96年10万人を突破、今なお増え続けている。
3. この地域には、立派な収蔵庫もある県立「人と自然の博物館」があり、市立小学校も10校近く、中学校4、県立高3があり、関西学院大学の新しい学部も開設した。

## 第3場 新技術の展開

1. 住宅群の地域のさらに北部に、テクノパークが用意され、近代新技術を生かした産業の新しい工場立地となっている。既に30を越える電気・化学・製薬、その他産業の、新規の内装をもつ新設の工場が建設され稼働している。その実例を若干を見てみよう。
2. 体内および体外診断用の短寿命放射性医薬品を製造し、全国に迅速出荷配付している日本メジフィジクス社は、高速道路(中国自動車道)や空港(大阪伊丹空港)へのアクセスに便利な地の利に着目し、1990年ベルギー製陰イオン加速サイクロトロンを起動、1992年には2号機も導入2台で、最新装置機器で我が国のこの面での重要な役割を果たしている。
3. 金属利用に未知の可能性を見出し有効利用してきた三菱マテリアル社は、三田の新工場に最新技術を統合し、高純度、高精度の、半導体および記録メディア関連にユニークな諸製品を供給し、純度99.99nの純金、貴金属粘土、合金等も評価されている。

海に取り囲まれた  
我が国の歴史の大河の断面を

水波の海  
学問の海  
開化の海  
美術行政の海

と

しぶきをあびて眺め  
各地を具体的に訪ね  
善悪のしがらみを越え  
人間の表裏を示しつつ  
二十一世紀へと流れ込む

大河の奔流が  
電波と情報の海に  
浮かぶことを期待しつつ。

2002年3月31日

新しい大河ドラマ「九鬼奔流」を推奨する会

(日本化学史学会後援)